

393.3
H51
3



0056761000

0056761-000

393.3-H51-3ウ

想定作為及戰術統裁法

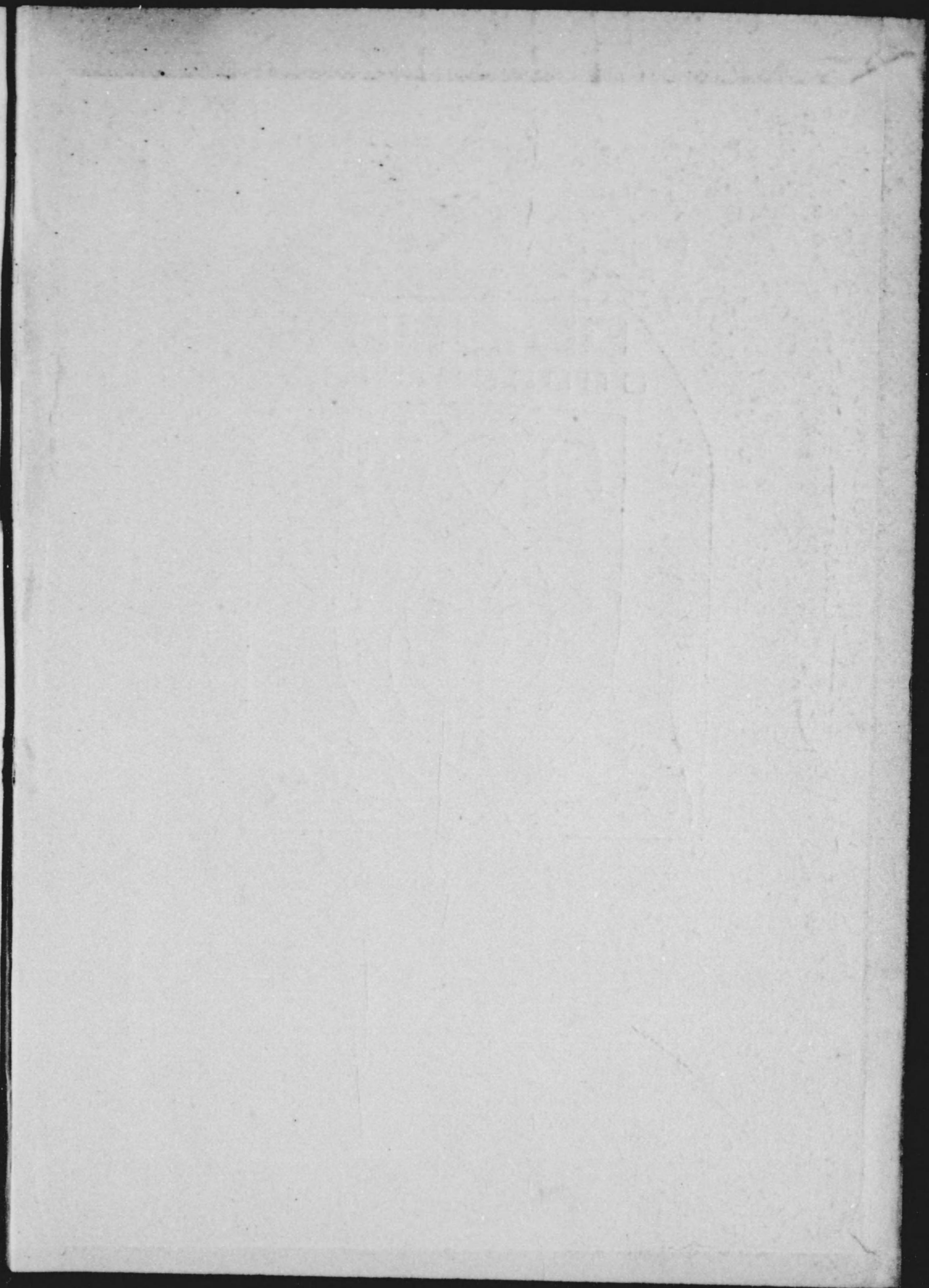
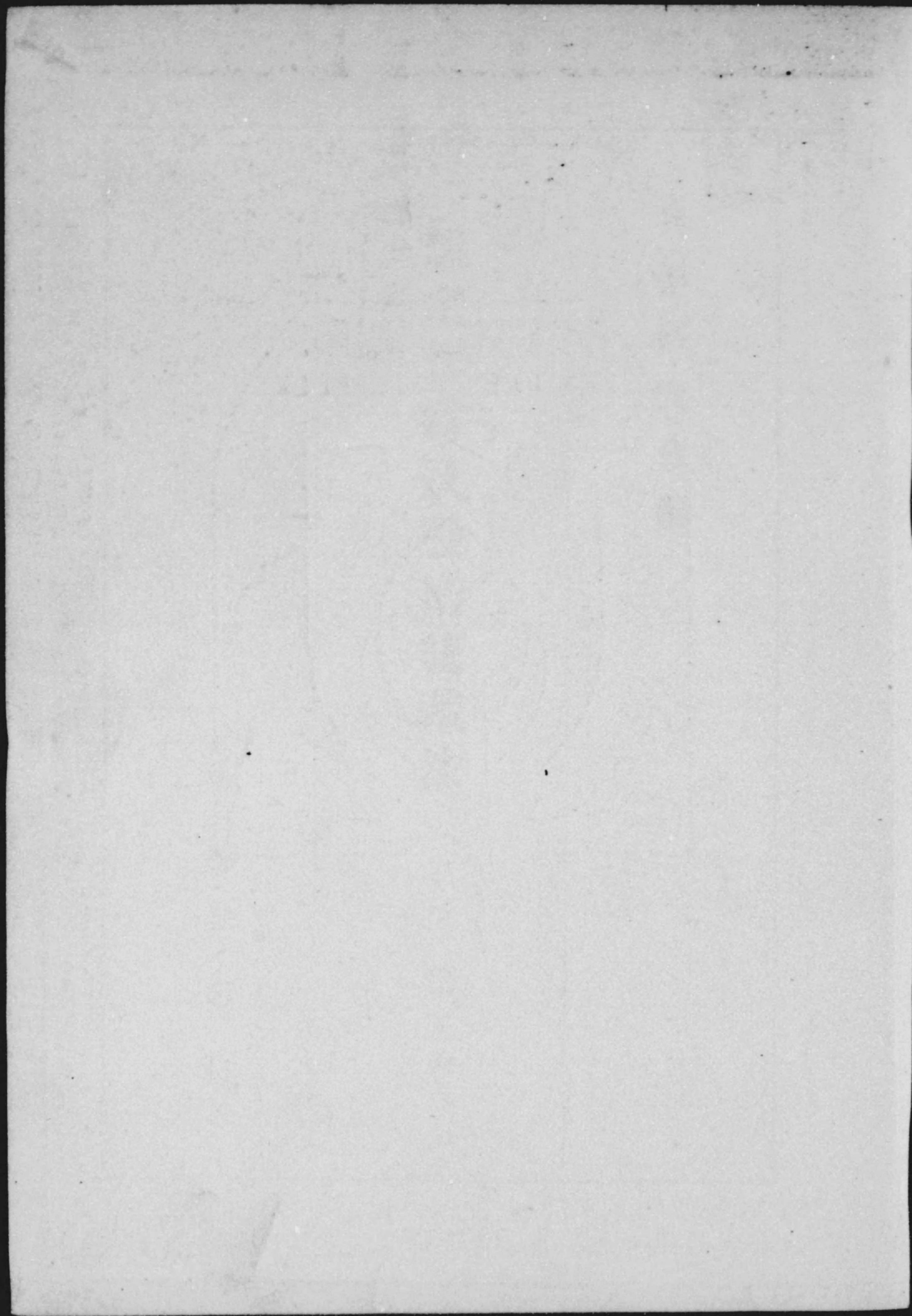
兵学研究会・編

干城堂

第2卷

昭和17

AJD



393.3
H51
3

兵學研究會編

想定作為及戰術統裁法

第二卷

干城堂發行



想定作爲及戰術統裁法 第二卷 目次

第十六 追撃中新なる敵に對する戰闘.....一

想定(第十九).....六

第一問題(甲) 十時ニ於ケル右追撃隊長ノ決心及處置.....二

第一問題(乙) 十時ニ於ケル左追撃隊長ノ決心及處置.....二

第一問題(丙) 十時ニ於ケル師團長ノ決心及處置.....二

第二問題 師團ハ爾後如何ニ戰闘ヲ指導セントスルヤ.....二六

第三問題 右翼隊ノ展開方法.....一九

第十七 追撃中新なる敵の現出に對する戰闘.....二

想定(第二十).....二六

第一問題 九時ニ於ケル師團長ノ決心.....三一

第二問題 師團ハ如何ニ陣地ヲ占領スベキヤ.....三三

第十八 退却戦闘の想定作爲……………四三

其一 晝間の随意退却……………四三

イ、攻撃を中止しての退却……………四三

想定 (第二十一)……………四三

第一問題 師團ノ退却方法……………四三

第二問題 收容陣地占領法……………四三

第三問題 右翼隊ノ退却方法……………四三

第四問題 師團長處置アリヤ……………四三

ロ、防禦よりの晝間退却……………四三

想定 (第二十二)……………四三

第一問題 師團ノ退却部署……………四三

第二問題 收容隊ノ陣地占領法……………四三

第三問題 右地區隊ノ退却方法……………四三

ハ、遭遇戦後の晝間退却……………四三

九〇 八八 八六 七九 七五 七一 六九 六六 六四 五七 五三 四五 四三

想定 (第二十三)……………九五

第一問題 十二時ニ於ケル師團長ノ決心……………九五

第二問題 師團退却ノ爲ノ處置……………九五

第三問題 右翼隊ノ退却部署……………九五

ニ、遭遇戦後に於ける困難なる退却……………九五

想定 (第二十四)……………九五

第一問題 師團ノ退却方法……………九五

第二問題 左翼隊ノ退却方法……………九五

第三問題 歩兵第四聯隊ノ退却方法……………九五

第四問題 第一線大隊ハ如何ナル退却法ヲ採ルヤ……………九五

其二 退却攻勢の想定作爲……………九五

イ、退却後兵力轉用に依る攻勢……………九五

想定 (第二十五)……………九五

第一問題 師團ノ退却部署……………九五

一五三 一四七 一三九 一三八 一三六 一三四 一三三 一二六 一二二 一一四 一一一 一〇〇 九五

四

第二問題 收容陣地占領法……………一六〇

第三問題 右地區隊ノ退却方法……………一六二

第四問題 收容隊ノ撤退方法……………一六五

第五問題 伊草村ニ派遣セラレアル師團參謀ノ區處……………一六六

第六問題 歩兵第三聯隊長ノ處置……………一六七

第七問題 歩兵第一旅團長ノ處置……………一六九

第八問題 師團長ノ處置……………一七一

第九問題 十九時ニ於ケル師團長ノ狀況判斷……………一七三

第十問題 前判決ニ置ク師團長ノ處置……………一七六

第十一問題 轉進ニ關スル歩兵第一旅團長ノ處置……………一八三

第十二問題 轉進ニ關スル歩兵第二旅團長ノ處置……………一八六

第十三問題 高坂占領部隊ノ撤退時期及其方法……………一八九

第十四問題 師團ハ爾後如何ニスベキヤ……………一九一

第十五問題 師團長ハ何ヲ爲スベキヤ……………一九三

第十六問題 師團長ノ決心及處置……………一九四

第十七問題 師團長處置アリヤ……………一九八

第十八問題 師團長處置アリヤ……………二〇〇

第十九問題 師團ハ如何ニシテ戰機ノ發展ヲ圖ラントスルヤ……………二〇一

第二十問題 六時ニ於ケル師團長ノ決心……………二〇三

第二十一問題 師團ノ退却方法……………二〇六

ロ、退却後直に反轉して行ふ攻勢……………二一〇

想定 (第二十六)……………二二六

第一問題 六時ニ於ケル師團長ノ狀況判斷……………二二二

第二問題 師團ノ退却部署……………二二四

第三問題 騎兵隊長ノ處置……………二三一

第四問題 收容隊長ノ處置……………二三三

第五問題 左側支隊長ハ爾後如何ニスベキヤ……………二三五

第六問題 右翼隊ノ退却方法……………二三六

五

六

第七問題 九時ニ於ケル左翼隊長ノ處置……………三三九

第八問題 騎兵隊ハ如何ニ爲スベキヤ……………二四〇

第九問題 騎兵隊長ハ如何ニスベキヤ……………二四二

第十問題 十一時ニ於ケル師團長ノ狀況判斷……………二四四

第十一問題 師團ノ攻撃部署……………二四六

第十二問題 師團長處置アリヤ……………二五三

其三 夜間退却……………二五五

想定(第二十七)……………二五九

第一問題 十二時十分ニ於ケル師團長ノ決心……………二六四

第二問題 十四時三十分ニ於ケル師團長ノ決心……………二六七

第三問題 師團ノ退却部署……………二七〇

第四問題 右翼隊ノ退却方法……………二七六

想定作爲及戰術統裁法 第二卷

第十六 追撃中新なる敵に對する戰闘

一 準備研究

所要地圖 二十萬分一 東京 宇都宮
五萬分一 熊谷 川越 青梅 大宮 東京西北部

想定作爲には、先づ利用せんとする地域と研究目的に應ずる狀況とを定め夫より遡つて其狀況を現出する爲に如何に想定を仕組むやを研究するやり方(第一方法)と、先づ研究目的を定め其目的に應ずる地形を捜し求める方法(第二方法)と、地形に適合する想定を作爲し其作戰經過に應じ逐次情況を構成しつゝ、研究を進める方法(第三方法)とある。

第一の方法は、局地が研究目的に適するものを選ぶのであるから、其目的には合するが、全般關係に無理を生じない様研究工夫を要する。

第二の方法は、研究目的に合する地形を捜し求めるのであるから、全般關係に於ても局部に於ても無理を生じない様に爲し得るが、廣範圍の地圖を要する不利がある。そこで一定の限られたる地圖を利用して自由自在に各種想定を作爲し之に依つて指導を爲し而かも無理を生じないで研究效果の多い結果を擧げ得るのは、一に想定作爲者の手腕に待つべきもので、本研究欄に於ては小範圍の地圖を自由に利用して各種の情況を現出することに努めて居る次第である。

第三の方法は、多くは一つの想定に依り連續して各種の研究を行ふ場合に利用せられるもので、其方法宜しきを得れば情況に無理なくして自然の經過を逐うて研究し得るが、其代り其研究事項多くは平凡に終り、深き印象を残す如き研究を爲し得ない不利がある。此方法により全般の情況構成にも無理がなく自然の經過を逐ひつゝ、而かも各問題毎に確乎たる摺み所と適切なる教訓とを與へ得る所に指導統裁法の妙味が存在するのである。

今第一の方法によつて、越生町及其東方隘路に向つて敵を追撃中松山町方面から新なる敵が南下中に在ることを知つて、追撃中の當面の敵に對し處置すると共に新なる敵に對し戰闘を指導することを主なる研究項目として、其想定を作爲することを研究して見よう。

先づ此追撃戰闘に移る前、何れの地點に於て如何なる戰闘が實行された後追撃に移つたかを遡

つて検討する必要がある。之が爲假りに扇町屋附近で會戰が惹起されたものとしてそれが遭遇戰であつたとしたならば、前回(想定第十八)の對抗軍たる南軍を假想すればそれで成立しないことはない。而して北軍は前回研究したのと異なる方法即ち主力を入間川右岸地區に用ひないで正面高萩方面から扇町屋方面に衝き掛つて來て、南軍は之に對し主力を入間川町方面に用ひて戰況有利に發展し北軍は遂に退却を開始し南軍は之に對し追撃に移つたとすれば良ささうである。然し一步踏み込んで、北軍が越生町、今宿以南を退却中に其友軍が松山町より南下する如き情況の下に何故北軍が扇町屋附近に於て遭遇戰を決行したか、即ち近く友軍が到着するならば夫れと合して戰闘するのが至當である、然るに近く到着する友軍を待たないで進んで遭遇戰を決行したことに不合理がある(追撃中新なる敵が現出して之に對する戰闘指導を研究する爲、遡つてこゝまで吟味しないで、追撃に移る前の戰闘を漠然と想定に表はして居るのがよくあるが、それでは戰理に合した想定と謂ひ得ない)。それで北軍としては扇町屋附近を占領して極力南軍を拒止し友軍の來著を待つて居たが、遂に支へ切れないで退却に決したとすれば、合理的となる。然るときは越生町及今宿附近に向つてする追撃は戰場追撃から戰場外追撃に移らんとするか或は尙戰場追撃中である。此時に新なる敵が松山町方面から南下中に在ることを知つて夫れに對する戰闘指導法を研

究するならば、それでよいが、若し縦隊追撃戦に移りたる後新なる敵の現出を知つて之に對する處置法を研究しようとするならば、扇小屋附近よりも南方即ち所澤附近か箱根、崎附近に於て戦後追撃に移つたとせねばならぬ。其何れにするかは全く研究目的に依つて定むべきで、各部隊の連繫困難なる状態にて現況に應じ主として各部隊の獨斷專行に依る戦闘法を研究しようとするには前者により、隊伍も整ひ連繫も或程度まで取り得る情況に於て高級指揮官なり或は各級指揮官なりの決心、處置を研究しようとするには後者を採用すべきである。

そこで、今所澤附近に於て戦後追撃中に在るとき新なる敵兵が松山町方面から南下するものとして、之に對する處置法を研究する爲、想定全般の構成並に追撃戦の状態を逐次研究して見よう。

所澤附近で戦後越生町方面に向つてする追撃を行ふ爲には、單に相對抗する部隊のみを以てしても成立しないことはないが、荒川右岸地區に於て一部隊が作戰するには、矢張荒川左岸地區即ち中山道以東に於て作戰する本軍に協力或は策應することにしなないと、全般關係が不合理である。即ち主力軍は利根川右岸地區を南進する敵に對し東京方面から北進するに方り、主力軍の作戰を容易ならしめる爲一兵團を荒川右岸に進め、其兵團が所澤附近を占領して居た敵を攻撃して

所澤―越生町道に沿ふ地區を追撃中であるとすれば、それで成立する。

次に松山町方面から敵の一部の南下することは、荒川右岸に於て所澤附近を占領して居た敵が我が軍の攻撃に依り退却の餘儀なきに至り、之を支援せんが爲一部隊を熊谷附近から南下させたものと假想すればよからう。之を合理的ならしむる爲には、中山道方面敵本軍の戦況は不利に傾いて居ないことが一の條件である。若し中山道方面敵本軍が不利であるならば、荒川右岸地區の敵の一部隊を犠牲としても本軍方面の戦況不利の位置から挽回せねばならぬ。即ち支作戰たる荒川右岸地區の敵が其戦闘不利の爲本軍方面より之を救援するには、本軍方面が不利に傾いて居ないことが條件でなければならぬ。但し敵本軍方面も不利であるが支作戰方面は更に不利で其儘にして置くとき本軍方面に大なる危害を及ぼす様な場合には、不利なる本軍方面からも一部を支作戰方面に割く場合もあるが、通常本軍方面に餘裕のある場合に支作戰方面に一部を割くことが自然である。

所澤附近の戦後敵は川越方面に退却しないで越生町方面に退却したのは、我が軍の攻撃法にも依つたのであらうが、敵としては本軍より遠く越生町方面に我が軍を誘致せんとしたものであらうと見るのが自然であらう。

追撃部署は、歩兵一聯隊を基幹とする右追撃隊を高萩を経て今宿方面に、同歩兵一聯隊を基幹とする左追撃隊を越生方面に追撃させ、其他は本隊として何れの方面にも向ひ得る隊勢を以て扇町屋を経て其先頭を以て根岸に到着したとき、新なる敵が松山町方面から前進中であることを知つたとして、爾後の研究を進める。

二 想定作爲

以上逐次研究したる所を想定に現はせば次の如くなる。

想 定 (第十九)

一 高崎方面ヨリ利根川右岸地區ヲ南進中ノ敵ニ對シ南軍主力(三師團ヲ基幹トス)ハ東京東部及其以東ノ地區ニ集結ヲ終リ中山道以東ノ地區ヲ北進中ニシテ昨九月二日午後上尾町、杉戸町ノ線ヲ占領セル敵ト接觸セリ

二 荒川右岸地區ヲ前進シ軍主力ノ作戰ヲ容易ナラシムベキ任務ヲ以テ相模川河孟ヨリ北進シタル南軍第一師團ハ所澤附近ヲ占領シアリシ歩兵約三聯隊ヲ基幹トスル敵ヲ二日間ニ互リ攻撃シ本九月三日早朝以來今宿及越生附近ノ隘路口ニ向ヒ敵ヲ追撃中ニシテ十時ニハ右追撃隊ノ先頭ヲ以テ森戸新田附近、左追撃隊ノ先頭ヲ以テ高麗川村堀口附近、本隊ノ先頭ヲ以テ根岸ニ達ス

此時師團長ハ本隊ノ先頭ニ在リテ行進中飛行機ヨリ次ノ通報ニ接ス

1 長徑十二、三軒ヲ有スル敵ノ一縱隊ハ熊谷方面ヨリ南進中ニシテ九時四十分松山町北方東平ニ達セリ

2 今宿方面ノ敵ノ後尾ハ九時五十分大類、越生町方面ノ敵ノ後尾ハ同時毛呂本郷附近ヲ退却中ニシテ其主力ハ越生町附近ニ集合ヲ始メタルモノノ如シ

右通報ハ逐次右追撃隊長及左追撃隊長ニモ通信筒ニヨリ投下セラレ

三 師團ノ編組及追撃部署左ノ如シ

騎兵隊

騎兵第一聯隊(二小隊欠)

越生町ニ向ヒ敵ヲ追撃中

右追撃隊

長 歩兵第一旅團長 少將某

歩兵第一聯隊

戰車隊一中隊

騎兵一小隊

野砲兵第一聯隊第一大隊

工兵一小隊

左追撃隊

長 步兵第二旅團長 少將某

步兵第三聯隊

戰車隊一中隊

騎兵一小隊

野砲兵第一聯隊第二大隊

工兵一小隊

本 隊(同行軍序列)

師團司令部

師團通信隊

野戰高射砲二隊

步兵第二聯隊

野砲兵第一聯隊(第一、第二大隊欠)

工兵第一聯隊(二小隊欠)

步兵第四聯隊

機械化部隊ノ一部

野砲兵第一聯隊聯隊段列

患者收容隊

四 地形其他ニ就テ

1 五萬分一地圖片點線路ハ野砲ヲ通ズ

2 平地並平地ニ近キ高地斜面ノ森林ハ大部伐採セラレ配兵ニ支障ナシ

3 部落建築物ノ構造ハ滿洲ノモノニ同ジ

4 敵軍ノ編制、裝備、素質ハ某國軍ノモノニ類似ス

5 南軍飛行隊ノ飛行場ハ東京ニ在リテ何時ニテモ師團ノ要求ニ應ジ協力セラル

備考 所澤附近ノ戰鬪ニ於テ敵ノ戰場ニ遺棄セシ屍體ハ約千二百ニシテ我が軍ノ死傷合シテ

三 指導統裁法

本情況の如き場合に、師團長の決心或は處置として一同に同一問題を課するよりも演習員を三分して右追撃隊長としての處置、左追撃隊長としての處置及師團長の處置として別々に作業させると、各、全般を判断して處置せねばならぬ所に研究の價値が大である。單に師團長の決心或は處置として問題を課するときは、各作業者は兎に角曲りなりにも師團長として一定方針の下に作業するから、兩追撃隊に命ずることも夫々連繫を考へて、凡て師團長の意圖に合する如く作業として現はすことになる。然るに別々に作業を課するときは、右追撃隊長としては、師團長は此際如何に決心するであらうか、左追撃隊は何を爲すであらうかと夫等を判断せねばならぬ。其判断が最も正確であれば、随つて自己部隊として爲すことも大體正鵠を得た案として生れてくる。然るに多くの作業者は、一部隊長として問題を課せられると、其部隊直接關係のことに没頭し全般の爲正當なる判断を爲し得ないのが通例である。随つて此等別々の作業を繼ぎ合はして見ると、友軍や本軍に對する考慮が不十分である爲、缺陷を生じ易い。此缺陷は各、其位置を異にせる部隊長の實際に當つて考慮せねばならぬことを等閑に附して居た點を明確に自覺し得て、直に實兵指

揮技能演練の資料となり、頗る效果的である。即ち次の如く問題を課して別々に作業させるのである。

第一問題(甲)

十時ニ於ケル右追撃隊長ノ決心及處置

第一問題(乙)

十時ニ於ケル左追撃隊長ノ決心及處置

第一問題(丙)

十時ニ於ケル師團長ノ決心及處置

説明

第一問題(甲)

右追撃隊と松山方面との中間地區は高坂南方高麗川の線であつて、師團主力も恐らく新來の敵に對するであらう。それで右追撃隊長としては高麗川の線を占領して師團の來著を待つか或は其他の地點を占領するかが研究問題である。高麗川の線に向つて前進するときは、獨力戦闘を豫期せねばならぬ。然るときは師團主力をして止むを得ず逐次増加の戦闘を實行せねばならぬ様に仕

向けるかも知れない。之は恐らく師團長の希望する所でないから、其後方適當な地點を占領して師團主力の來著を待つべきである。之が爲坂戸町附近を占領した場合敵が下石井附近を占領したならば、師團主力の行動の自由を制肘せられることになる。夫れで正面稍、過廣となる不利はあるが、右追撃隊長としては此際一部を以て下石井附近を占領し主力を以て坂戸町附近を占領して師團本隊の展開を掩護するのが至當である。即ち

原案

決心

右追撃隊ハ一部ヲ以テ下石井附近、主力ヲ以テ坂戸町附近ヲ占領シテ師團ノ展開ヲ掩護セントス

處置

- 一 森戸新田ヨリ才道木ヲ經テ坂戸町ニ向ヒ轉進ス
- 二 歩兵一大隊、聯隊砲一小隊、野砲兵一中隊ヲ以テ下石井及新町附近ヲ占領セシム
- 三 其他ノ部隊ヲ坂戸町附近ニ集結ス
- 四 決心、處置ヲ師團長ニ報告ス

次に左追撃隊長としての決心及處置即ち

第一問題(乙)

此際左追撃隊長としての決心は、最も困難である。即ち右追撃隊は松山町方面の敵に對するであらうから、左追撃隊長としては今宿及越生町兩方面の敵に對して師團の左側を掩護せねばならぬ。今宿或は越生何れか一方面ならば引續き攻撃して隘路内に壓迫すれば、敵を出させない様にすることが出来るが、一方を攻撃して居ると他の方から背後を衝かれる状態に在る。又兩方面に兵力を分離して攻撃することは、敵の兵力と左追撃隊の兵力との關係上之を許さない。そこで何れかに兵力を集結して兩方面の敵に對する準備姿勢に在ることが必要である。之が爲若し葛貫方面に兵力を集結するときは、今宿方面の敵に對することが困難である。夫故川角村市場附近に主力を集結し各一小部隊を以て大類、川角、小田谷に派遣して警戒に當らせる。即ち

原案

決心

左追撃隊ハ主力ヲ市場附近ニ集結シテ師團ノ左側ヲ掩護セントス

處置

- 一 尖兵中隊及機關銃一小隊ハ小田谷ニ向ヒ前進シ同地ヲ占領シテ警戒セシム

- 二 主力ハ市場ニ向ヒ轉進シ同地ニ集結ス
 - 三 大隊長ノ指揮スル歩兵一大隊(二中隊欠)ヲ川角ニ派遣シ同地ヲ占領シテ警戒ニ任ゼシム
 - 四 歩兵一中隊、機關銃一小隊ヲ大類ニ派遣シ同地ヲ占領シテ警戒ニ任ゼシム
 - 五 決心及處置ヲ師團長ニ報告ス
- 次に師團長としての決心及處置即ち

第一問題(丙)

以上兩追撃隊長の決心及處置の研究に依つて師團長の決心及處置も大體決まつたわけである。即ち師團長としては、今宿及越生町方面に退却した敵に對しては一部を當て、成るべく多くの兵力を以て新來の敵に向つて攻撃すべきである。それで右追撃隊をして一部を以て下石井附近を占領し主力を以て坂戸町附近を占領して本隊の展開を掩護させ、左追撃隊をして兩方面の敵に對し師團の左側を掩護させる。騎兵隊は此際左追撃隊に配屬して同隊の任務達成を容易にさせる方がよい。即ち

原案

決心

師團ハ一部ヲ以テ今宿及越生町方面ノ敵ニ對セシメ主力ヲ以テ松山町方面ノ敵ヲ攻撃セントス

處置

一 右追撃隊ヲシテ主力ヲ以テ坂戸町附近、一部ヲ以テ下石井附近ヲ占領シテ師團ノ展開ヲ掩護セシム

二 左追撃隊ヲシテ今宿及越生町方面ノ敵ニ對シ師團ノ左側ヲ掩護セシム

騎兵隊ヲ左追撃隊長ノ指揮下ニ屬ス

三 師團本隊ハ高萩ヲ經テ坂戸町ニ向ツテ前進ス
次に左の情況を與へる。

情況第一

一 十一時二十分右追撃隊ノ前衛〔歩兵第一聯隊第一大隊、聯隊砲一小隊、騎兵小隊(一分隊欠)、野砲兵第一中隊〕ハ下石井ニ到着シ同地占領ニ著手ス

二 同時右追撃隊本隊ノ先頭坂戸町ニ達シ逐次兵力ヲ集結ス

三 師團本隊ノ先頭ハ正午脚折北端ニ達ス

此時師團長ハ松山町方面ノ敵ノ先頭ハ十一時十分頃高坂村北端ニ達セシコトヲ知ル

右の情況に依り次の問題を課する。

第二問題

師團ハ爾後如何ニ戰鬪ヲ指導セントスルヤ

説明

敵は高坂及其以東の地區に展開し高坂方面或は其以來の地區から南面して攻撃してくるであらう。之に對し師團が主力を以て坂戸以西の地區に展開し東北面して攻撃するときは、今宿及越生方面の敵から背後を衝かれることになるかも知れない。又師團が主力を以て坂戸町附近から北面して攻撃した場合に、今宿及越生方面の敵から左側を衝かれることになるかも知れない。即ち師團の攻撃中に於て今宿及越生方面の兵が勢力を挽回して師團の背後又は左側に進出してくるかも知れない。夫れで師團は之を顧慮して重點を右翼下石井方面に保持して成るべく西北面して攻撃する如く展開正面を定めることが、此際に於ける師團展開の着眼である。之が爲步兵第一旅團を右に、步兵第四聯隊主力を左翼坂戸町方面に展開させれば、展開も迅速であり右翼に重點を成形するにも有利である。

原案

師團戰鬪指導方針

師團ハ一部ヲ以テ今宿及越生町方面ノ敵ニ對セシメ主力ハ下石井北方附近ヨリ坂戸町附近ニ互リ展開シ重點ヲ右翼ニ保持シ西北面シテ攻撃スルヲ要ス

部署

一 軍隊區分

右翼隊

步兵第一旅團

戰車一中隊

騎兵一小隊(一分隊欠)

工兵一小隊

左翼隊

步兵第四聯隊(第三大隊欠)

騎兵一分隊

左側支隊

歩兵第二旅團(第四聯隊欠)

戰車隊一中隊

騎兵第一聯隊(一小隊欠)

野砲兵第一聯隊第二大隊

工兵一小隊

砲兵隊

野砲兵第一聯隊(第二大隊欠)

豫備隊

歩兵第四聯隊第三大隊

工兵第一聯隊(二小隊欠)

二 各部隊ノ任務

1 右翼隊ハ下石井東北側附近ヨリ石渡戸附近ニ互ル間ニ展開シ重點ヲ右翼ニ保持シ高坂村方面ニ向ヒ攻撃ス

2 左翼隊ハ坂戸町附近ニ展開シ高坂村西方山田木方面ニ向ヒ攻撃ス

3 左側支隊ハ今宿及越生町方面ノ敵ニ對シ師團ノ左側ヲ掩護ス

4 砲兵隊ハ主力ヲ以テ坂戸町東側附近、一部ヲ以テ元宿附近ニ陣地ヲ占領シ右翼隊及左翼隊ノ攻撃ニ協力ス

5 豫備隊ハ戸宮—高坂街道ニ沿フ地區ヲ前進ス

但工兵隊ハ砲兵隊ノ陣地占領ヲ援助ス

6 野戰高射砲隊ハ坂戸町附近ニ陣地ヲ占領シテ防空ニ任ズ

第三問題

右翼隊ノ展開方法

説明

右翼隊は歩兵第一聯隊を右第一線、歩兵第二聯隊(第三大隊欠)を左第一線とし、歩兵第二聯隊第三大隊を豫備隊として右翼後に置く。之が爲坂戸町に集結しある歩兵第一聯隊主力は新町附近に移動して直に展開させ、本隊先頭に在る歩兵第二聯隊(第三大隊欠)は元宿、石渡戸間に展開させる。

原案

右翼隊ノ展開方法

- 一 歩兵第一聯隊ヲ右第一線トシ下石井東北側ヨリ新町附近ニ互ル間ニ展開セシム
- 二 歩兵第二聯隊(第二大隊欠)ヲ左第一線トシ元宿、石渡戸間ニ展開セシム
- 三 歩兵第二聯隊第三大隊ヲ豫備隊トシ右翼後ヲ行進セシム

爾後の指導

以上師團各部隊の展開法が決定したので、之に基いて各部隊が夫々所命の位置に就く情況を與へ、敵方に關しては高坂東南側附近或は其南方高麗川の線を其前衛を以て占領し、其本隊が逐次高坂以西の地區に進出することを設想しつゝ、南軍として之を偵知し得る程度に従ひ點々其情況を現はし、我が軍の前進時機、各部隊各兵種の協同動作を逐次研究し、

左側支隊方面に關しては、今宿及越生兩方面より敵が進出して左側支隊として如何に之に對抗するやを研究するのも一方法であるが、他の方法は越生方面から進出しないで今宿方面のみから進出して高坂方面の友軍に協力せんとするに對して、左側支隊が遂に攻勢を取つて之を抑留する策に出る方法を講ぜさせることが、價値ある研究である。即ち敵としては越生方面から六地藏を経て今宿方面に進出したのであるが、左側支隊としては敵が越生方面から進出しないので如何に

なつたのであらうかと、夫れを判斷し、夫れに氣を配りつゝ今宿方面の敵を抑留することが、戰場に於ける一波瀾として面白い研究である。

本想定の主要なる研究項目は

- 一 追撃中新ナル敵ニ對スル攻撃
- 二 情況ノ變化ニ對スル各級指揮官ノ獨斷動作
- 三 退却中ノ敵ノ反轉進出ヲ顧慮シ展開正面ノ採リ方

第十七 追撃中新なる敵の現出に對する戦闘

所要地圖 二十萬分一 東京 宇都宮
五萬分一 熊谷 川越 青梅 大宮 東京西北部

一 準備研究

戰術統裁法として、一度研究した想定と略、類似の想定で其採るべき方策の異なるものを案出して、之に依つて前に研究したものと比較研究するときは、外形の類似を見て其内容を深く吟味しないで輕率な決心、處置を定め或は戰術をして一定の型に陥らしめる弊害を矯正し得るものである。

そこで、今回は前回の想定と略、類似のもので其採るべき方策の異なるものを研究する目的で、其想定作爲竝之が指導統裁法を研究して見よう。

前回は、利根川右岸地區を南下する敵に對し、東京東部から中山道を北進する軍の作戰を容易ならしめる任務を以て相模川河谷を北進したる南軍師團が、所澤附近を占領して居た敵を驅逐して入間川左岸高萩附近に達した時に、退却した敵は越生町附近に集合中で、新なる敵が松山町方面から南下するのに對し、師團は一部を以て越生方面の敵に對せしめ主力を以て新來の敵を攻撃したのであるが、此情況を若干變更して、越生町方面の敵は同地まで退却しないで高麗川左岸葛貫附近の高地を占領中で、又別な新なる約一師團の敵が松山町方面から南下中であることを知つた場合に、高萩附近に達した南軍師團として如何にすべきやを問題にすると、茲に其採るべき方策を異にせざるを得ないであらう。

即ち師團が一部を以て葛貫附近の敵に對せしめ主力を以て坂戸附近に前進して新なる敵を攻撃しようとするれば、葛貫方面の敵が攻勢に轉じた場合師團主力の左側背が直に脅威を受けることになる。そこで比較的多くの兵力を割いて葛貫方面の敵に當らせると、主力方面の兵力が減少して徹底的勝利を得られないことになり、又主力を以て葛貫方面の敵を攻撃するときは、其攻撃奏功

前に松山町方面の敵が南下して師團の右側に迫ることになる。即ち退却中の敵が止つて葛貫附近を占領したことに依つて兩敵を各個に撃破することが出来ない様になつた。そこで師團としては高萩西南方一帯の高地を占領して決戦防禦を爲すか或は一步退いて扇町屋附近を占領して決戦防禦を爲すかとの考案が生れてくる。

高萩西南方一帯の高地は地形錯雜して而も漠然廣範圍に互り一部隊を以て敵の攻撃を支へ得ることが困難である。従つて之を守勢地區とし高萩以東を攻勢地區として師團の兵力を以て利用するには不適當である。又單に高萩西南一帯の高地だけを占領したのでは、徒らに兩方面の敵の合撃を受けるばかりで勝算が乏しい。然らば一步退いて扇町屋附近を占領して決戦防禦を爲す案は如何と云ふに、扇町屋以西を守勢地區として敵が之に相當の兵力を向けねばならぬならば、之に依つて兵力の權衡を得て扇町屋以東の地區に於ての決戦の見込なきにあらざであるが、扇町屋以西の守勢地區は敵は必ず之を攻撃せねばならぬだけの要機を備へて居ないから、此方面に對しては敵は單に監視に止め大部を擧げて入間川右岸地區から攻撃して來たならば、必ずしも有利とは謂へない。然し以上二案共全然成立しないことはない。即ち師團が斯かる情況に遭遇したとしたならば其何れかの方策を採用せねばならぬ。之に依つて前回の想定と比較して其外形が似て居て

も採るべき策必ずしも同一でない」と云ふ例を示すには、其目的を達しられないことはない。唯高萩附近或は扇町屋附近何れを占領するにしても、有利なる決戦防禦の一例であると云ふことが出来ないので、決戦防禦法の研究としては價值が少いと云ふことになる。

次に師團の先頭が高萩附近に達した時に退却した敵が高坂附近を占領中であり、新なる敵が小川町方面から越生町方向に前進中で其先頭が越生町西北方關堀附近に達して居るとの情況とすれば、師團としては一部を高坂方面の敵に當て主力を以て越生町附近の隘路進出に乘じ之を攻撃する策に出るのが至當である。此情況に基いて隘路出口に於ける遭遇戦の展開法竝一部を以て高坂方面の敵に對する處置等相當研究價值はあるが、退却しつつある敵に對し一部を當て主力を以て新來の敵を攻撃すると云ふ全般の仕組みは、前回想定第十九と同じ構想であるから、今研究しようとする目的に合しない。

次に越生町方面の敵が更に南方に進出して師團の先頭が高萩附近に達した時に既に新來の敵が越生町附近に達して居るとすれば、彼我の主力が葛貫附近の高地線に於て衝突することになつて、其勝敗の決するまで高坂方面の敵の一部を以て支へ得るや頗る疑問である。のみならず敵として其友軍が越生附近への進出が本情況の如き状態に於て高坂附近まで退却したことは、不適當

で、師團に窮追され高坂附近まで退却するの止むなきに至つたのならば、致方ないが、然らずば坂戸附近で極力停止することに努力すべきである。退却中の敵が坂戸附近を占領して居るとすれば、葛貫方面も殆ど同一戰場であるから、各個撃破の如きは到底出来ない。敵のことであるから常に完全に戦理に合した情況を現出させる必要もなく、何かの都合で高坂附近を占領したとしても、一面に於て遭遇戦を實行し其間逐次勢力を挽回し來る高坂方面の敵に對する處置法の研究となつて、これ亦研究目的に合しない。

又退却中の敵が坂戸附近を占領中で約一師團の新なる敵が既に葛貫附近に達して居るとすれば、師團は退いて扇町屋附近或は入間川町附近を占領して此兩敵に對するのが至當となる。そこで入間川町附近の占領に關する研究が價值あるものなればそれでよいが、これは最初的情況に於て扇町屋附近を占領する案と大差がない。

そこで敵情は大體同じであつて師團は川越市を右翼の據點として決戦防禦の爲陣地を占領することを主要研究項目として之に適合する想定を作為することを研究して見よう。

所澤附近に於ける戦闘後高萩附近まで追撃した部隊が側方に移動して川越附近を占領することは、特別の條件のない限り不自然であるから、川越附近を経て追撃中同地附近を占領することに

決する如く仕組めば、無理を生じないことになる。之が爲所澤附近の戦闘後川越方面に追撃したとしても成立しないことはないが、敵は何故川越方面に退却したか即ち川越を占領する心算であれば之を棄て、退却することは意味をなさない。又川越を占領する意志がないならば直路高萩を経て北方に退却すべきであつて、然るときは南軍部隊も其方面に追撃することが自然である。そこで南軍は志木町、大和田町附近を占領して居た敵を驅逐して川越附近を経て追撃中であるとするれば、情況に應じ止まつて川越附近を占領することも當然となり、又志木附近の戦闘後距離の關係上北軍は其大部を以て川越附近を占領することが困難であるから一部を以て一時的抵抗を爲し主力は更に北方に向つて退却することが自然となる。之に對し追撃中の南軍が川越西北方地區に達した時に、退却中の敵が高坂附近を占領中で新なる敵が越生町附近に進出して來たとしたならば、何れに對しても各個に撃破することが出來ないから、川越附近を占領して兩敵に對し決戦防禦を爲すことが至當の案と云ふことになる。南軍部隊が川越に達した時退却中の敵が高坂附近を占領中であるとの情況としたならば、實際的でない。即ち今少し近く敵を追撃して居らねばならぬ。之が爲川越を越えて入間川の線位に達した時に敵情を知り得たとしたなれば、一步退いて川越附近を占領することに妙味を生ずるわけである。想定なり情況の作爲に於て恰も占領せんとす

る地點に達したるとき敵情を得るとか或は道路の分岐點に達したるとき右するや或は左するやの決心を求める如き指導法を爲すものがあるが、之は餘りに好都合で、如何にも其の様にこしらへたものらしくて、實際的でない。夫よりも其地點を通過した後に於て決心を爲す必要が起る如く仕組むことは、實際的であり又研究として價値が多いものである。

そこで南軍の一兵團が荒川右岸に沿ひ北進するものとして、全般關係の構成は大體前想定と同じく、利根川右岸地區を南下する敵に對し東京以東に集合したる主力軍が中山道及び其以東の地區を北進するに方り、其作戰を容易ならしめる爲一師團を東京から荒川右岸地區を前進させた、其師團が志木町から大和田町附近に陣地を占領せる敵を驅逐して二縱隊となり之を追撃中、川越西方入間川の線に達した時に、退却した敵は高坂附近を占領中であり別に新なる約一師團の敵が小川町方面から越生町方向に前進中で、其先頭は既に越生町を通過したことを知つたとすれば、大體の結構が成立する。而して師團が川越附近に停止してもよい爲には、本軍も上尾、杉戸の線或は桶川、幸手の線から以北に遽に前進出來ない様な状態とすればよい。

二 想定作爲

以上逐次研究したる所を想定に現はせば次の如くなる。

想 定(第二十)

- 一 高崎方面ヨリ利根川右岸地區ヲ南進中ノ敵ヲ擊破スベキ企圖ヲ有スル南軍(三師團ヲ基幹トス)ハ東京以東ノ地區ニ集合シ既ニ前進ヲ開始セリ
 - 二 荒川右岸地區ヲ前進シ軍主力ノ作戰ヲ容易ナラシムベキ任務ヲ有スル南軍第一師團ハ志木町附近ヨリ大和田町附近ニ互リ陣地ヲ占領シアリシ歩兵八、九大隊ヲ基幹トスル敵ヲ驅逐シ二縱隊トナリ松山町方向ニ之ヲ追擊中ニシテ十月二日九時右追擊隊ノ先頭ヲ以テ川越—高坂街道上入間川ノ線、左追擊隊ノ先頭ヲ以テ川越西方小ヶ谷附近、本隊ノ先頭ヲ以テ砂新田南端ニ達ス此時マデニ師團長ノ知り得タル情況左ノ如シ
 - 1 軍主力ハ大宮町ヨリ粕壁町附近ニ互ル線ヲ占領シアリシ敵ノ一部ヲ驅逐シ本二日桶川町、幸手町ノ線ニ向ヒ前進中ナリ
 - 2 軍飛行機ノ通報ニ依レバ退却セシ敵ハ高坂附近ニ陣地ヲ占領中ニシテ別ニ約一師團ノ敵ハ小川町—越生町道ヲ前進中ニシテ八時三十分越生町北端ニ達セリ
 - 3 我ガ騎兵隊ハ敵ノ騎兵ニ追尾シテ八時坂戸町ニ達セリ
- 三 師團ノ編組及前進區分左ノ如シ

騎兵隊

騎兵第一聯隊(二小隊欠)

右追擊隊

長 步兵第一旅團長 少將某

步兵第一聯隊

騎兵一小隊

野砲兵第一聯隊第一大隊

工兵第一中隊

裝甲自動車隊一隊

左追擊隊

長 步兵第二旅團長 少將某

步兵第三聯隊

騎兵一小隊

野砲兵第一聯隊第二大隊

工兵第一聯隊(一中隊ト一小隊欠)
裝甲自動車隊一隊

本 隊(同行軍序列)

野戰高射砲第一、第二隊(右追撃隊ノ後方ヲ前進)

師團司令部

師團通信隊

歩兵第四聯隊

工兵一小隊

野砲兵第一聯隊(第一、第二大隊欠)

歩兵第二聯隊

野砲兵第一聯隊聯隊段列

患者收容隊

四 地形其他ニ就テ

1 五萬分一圖片點線路ハ野砲ヲ通ズ

2 村落、市街ノ構造ハ滿洲ノモノニ同シ

3 入間川ハ徒涉容易ナリ

4 敵軍ノ裝備及素質共ニ優良ナリ

5 軍ノ飛行場ハ東京代々木ニ在リテ師團ノ要求ニ應ジ一部ヲ以テ直接協力セラルル筈

6 志木、大和田町附近ノ戰鬪ニ於テ敵ノ戰場ニ遺棄シタル屍體約五百ニシテ師團ノ死傷者約七百名ナリシ

三 指導統裁法

以上の想定に基き次の問題を課する。

第一問題

九時ニ於ケル師團長ノ決心

說 明

本情況に於て師團長の爲すべき決心としては、

第一案 一部を高坂方面の敵に當て主力を以て越生町方面の敵を攻撃

第二案 一部を越生町方面の敵に當て主力を以て高坂方面の敵を攻撃

第三案 入間川の線を占領して決戦防禦

第四案 川越附近を占領して決戦防禦

第一案は、越生方面の敵と師團との衝突線は坂戸―高萩街道の線附近であつて、敵は既に隘路を進出し地形上彼我全く同等で、而も敵は新銳の約一師團を持つて居る。而して從來の敵は退却後とは云へ今や高坂附近を占領中で、之に相當の兵力を當てるときは主力方面の兵力を減少し、一部を當てるときは高坂方面の敵は早晚勢力を挽回して彼我主力戦闘中に我が右側背に迫つて來るであらう。然るときは結局師團が不利に陥ることになる。敵の素質劣等であれば當然此案を採るべきであるが、敵の素質決して我に劣らない有爲の敵であるから、此案には同意が出来ない。

第二案は、高坂附近の敵は縦ひ退却後と雖既に陣地を占領しつゝあるのであるから、之に對する攻撃の奏功は第一案の彼我主力の戦闘に比して更に多くの時間を要するものと覺悟せねばならぬ。然るときは高坂方面の敵を攻撃中優勢なる新銳の敵に側背を攻撃され、遂に師團は苦境に立至るであらう。夫故此案にも同意が出来ない。

第三案は、入間川の線を占領して決戦防禦をしようとするのであるが、陣地の兩翼限界なく且つ托すべき據點もなく、結局此線に於て豫め展開して待つ遭遇戦となる。然るときは合したる兩

敵の攻撃を受け地形上特に師團に有利なる點がないから勝算覺束ない。

第四案は、川越を一翼の據點として決戦防禦をやらうと云ふので、合して攻撃し來る優勢の敵に對し必ずしも有利とは云へないが、其他の諸案に比して最も根據ある案で、又軍主力との關係から云つても此際川越附近に止つて決戦防禦を爲すことは軍に不利なる影響を及ぼすことがないから、此案に同意である。但し既に兩追撃隊の先頭が入間川の線まで進出して居るから、之を後退させることは不利の様であるが、其一部は陣地占領の掩護たらしめ其他は後退して陣地を占領するか或は豫備隊となるのであつて、既に前方に進出して居るからとて之に曳きづられて不利なる地點を占領し或は勝算なき無謀の前進をなす如きは指揮官として戒慎せねばならぬ。

原案

決心

師團ハ川越附近ヲ占領シテ決戦防禦ヲ爲サントス

以上の如く決心が決まつて次いで其配備を如何にするやの問題を課する。

第二問題

師團ハ如何ニ陣地ヲ占領スベキヤ

注意 川越町西南方附近入間川町ニ至ル間ノ森林ハ大部伐採セラレ配兵ニ支障ナシ

説明

川越附近に於て高坂及越生方面の敵に對し決戦の目的を以て陣地を占領するには、

第一案 川越市を右翼の據點として入間川右岸大田村、日東村等の各部落縁端を占領し火力發揚に依る決戦防禦

第二案 川越市を右翼の據點として西武鐵道東南側四都野、南大塚、青柳等の各部落端を占領し火力發揚に依る決戦防禦

第三案 概ね第二案と同様の配備にて敵が川越—入間川町道の線より進出に乗じて攻勢を採る案

第四案 川越市を右翼據點として主力を扇河岸附近に集結して敵の四都野附近進出を待つて攻勢を採る案

第五案 川越市を右翼據點として主力を高階村附近に集結し敵の川越南方一帶地區に進出するを待つて攻勢を採る案

等、大體以上の如き諸案があらう。

第一案は攻勢地帯の正面如何にもだだ廣くて、此全線に兵力を配備するときは到る處薄弱となり且敵をして有利に其砲兵を使用せしめるから、我に何等有利の點がない。

第二案は、攻勢地帯を第一案よりも後退し西武鐵道線に沿ふ地區に火力發揮地帯を置き、其火力の發揚に依つて決戦防禦をしようとするので、第一案よりも有利であるが、敵が其重點を我が左翼青柳方面に指向した場合に、右翼據點たる川越市方面からの協力不十分である。

第三案は、概ね第二案の配備で敵が大田村、日東村等の錯雜せる村落を通過し然かも其砲兵の協力不十分なるに乗じ攻勢を採らうと云ふので、有利の一案であるが、敵は夜間を利用して川越—入間川町道の線を確實に占領し其砲兵を第一線近くに招致して十分なる準備の後攻撃して來たなれば、敵の歩砲協力の不十分に乘ずる利益が没却されることになる。

第四案は、川越市を右翼の據點として其近く左翼後に主力を集結して敵の攻撃に對して右翼據點よりの歩砲火の威力の下に主力を以て攻撃に轉じようとするので、これ亦一の案であるが、主力を右翼據點川越市附近に近く位置させることは、其據點より協力を受くるに便利であるが、優勢なる敵により南方から我が左側背を包圍される不利がある。それで約一師團位の敵に對して二、三聯隊を以て防禦するには有力なる一つの案であるが、此際此案にも同意が出来ない。

第五案は、第四案の不利を除かんが爲に、主力を更に南方高階村附近に集結して敵の包圍に對抗すると共に、右翼川越附近の據點よりの砲兵火を以て協力を爲し且つ敵の砲兵を有利に使用させない様にする考案で、此案に同意である。據點の價值ある所以は其據點より攻撃地帯に十分協力し得ることが敵の痛手であつて、一部を據點に當て大部の主力を以て攻勢地帯に對し攻撃することが出來ないで止むを得ず相當大なる兵力を據點の方に向けねばならぬことになつて、茲に防者として攻者に對する兵力の權衡を得るわけである。そこで配備の原案は次の如くなる。

原案

一 右地區隊

1 軍隊區分

- 長 歩兵第一旅團長 少將某
- 歩兵第一聯隊
- 騎兵一小隊
- 工兵一小隊
- 裝甲自動車隊一隊

2 配備

川越市北側ヨリ西側ヲ經テ西南側ニ互ル間ヲ占領シ入間川ノ線ニ警戒部隊ヲ配置ス
左地區隊トノ境界ハ東上線(線上ハ右地區隊ニ屬ス)

二 左地區隊

1 軍隊區分

- 長 歩兵第二旅團長 少將某
- 歩兵第二旅團
- 騎兵一小隊
- 工兵一小隊
- 裝甲自動車隊一隊

2 配備

脇田附近、新宿附近、砂新田附近、藤間附近ヲ一小部隊ヲ以テ占領シ主力ハ新河岸附近ニ集結ス最初右地區隊ニ連繫シテ小ヶ谷、池邊、増形ノ線ニ警戒部隊ヲ配置シ敵兵ノ近迫ニ伴ヒ安生老、四都野、中臺、中福ノ線ニ警戒部隊ヲ配置ス

三 砲兵隊

1 軍隊區分

野砲兵第一聯隊

2 配備

一部ヲ以テ川越西北側ニ陣地ヲ占領シ右地區隊前面ノ敵ニ對セシメ主力ハ川越南側ニ陣地ヲ占領シ主トシテ攻勢地帯ノ正面ヲ側射スル如ク準備セシメ尙一部ヲ以テ左翼藤間附近ニ陣地ヲ占領セシム

四 騎兵隊

1 軍隊區分

騎兵隊第一聯隊(二小隊欠)

2 配備

敵ノ近迫ニ伴ヒ師團ノ左側ヲ警戒セシム

五 豫備隊

1 軍隊區分

歩兵第二聯隊

工兵第一聯隊(二小隊欠)

2 配備

左翼後川崎附近ニ位置ス但工兵隊ハ右地區隊内ノ主要陣地ノ構築、砲兵ノ陣地占領援助、對戰車壕ノ構築等重要工事ニ從事セシム

五 師團司令部

並木ニ位置ス

高射砲隊ハ川越東南側及木野目附近ニ陣地ヲ占領シテ防空ニ任ズ

爾後の指導

以上の如く師團長としての大體配備が決定してこれから愈、實行に着手することになる。そこで先づ師團長の處置として兩追撃隊長に參謀を派遣して兩追撃隊は現在の線に停止し各一部を以て入間川の線を占領して陣地占領の掩護に任せしめ、主力は川越市附近及川越南方新宿附近に集結させ、本隊は砂新田東側附近に逐次集合を命じ、師團長は地形を概観しつゝ、川越市西南端道路出口附近に到り陣地占領に關する師團命令を下達する。

右命令に基き右地區隊及左地區隊長として配備の細部を研究する。

右地區隊は、川越市の北側から西側を経て西南側に互る間を堅固に占領し、約一大隊を豫備として市街南部に控置し、其中一部を警戒部隊として入間川の線を占領させる。

左地區隊長としては、先づ入間川右岸池邊附近から柏原新田附近に互る間を相當有力なる部隊を以て占領させ、敵の小部隊、斥候の進入に對し主力の陣地占領及集結の庇掩に努め、脇田附近から藤間附近に互る陣地を二地區に分ち兩聯隊の各一部(各一大隊)を以て占領させる。斯くするときは將來の攻勢前進に於て兩聯隊共各、建制に復することが出来る。

次に砲兵の配備としては川越市南側附近から攻勢地帯を側射し得る如く然かも西方に對しては十分掩護せられる如く陣地を占領する。

師團通信隊は師團長直屬部隊に向つて夫々通信網を構成し各後方機關も夫々配備に就く。

右地區隊の配備の終るのは十時半乃至十一時の間で、左地區隊の第一線配備を終り主力が集結するの十一時頃となるであらう。

次に敵情に關しては、越生方面の敵は十一時頃其第一線を以て逐次入間川左岸近くに進出し主力は漸次開進の配置に就くであらうが、地形の錯雜せる關係上其位置は容易に判明しない。

高坂方面の敵も越生方面の友軍の進出に伴ひ前進を起し、之と連繫しつゝ入間川の左岸小畔川の線に進出して我が情況を偵察することに努めるであらう。

そこで敵情判断が問題となつて、敵は本日直に攻撃するか或は明拂曉以後攻撃するか、其重點を何れの方向に指向するであらうかは研究問題である。

敵は川越附近の我が右翼據點と其前方の地形の關係上恐らく重點を此方面に向けないで我が左翼方面に向けるであらう。

敵の攻撃時期としては、本日直に攻撃して來るかも知れないが、既に我が陣地を占領しつゝあることを察知すれば、其偵察と準備の爲恐らく明朝の攻撃となるであらうが、師團としては何時でも之に應ずる準備をして居らねばならぬ。

次に師團の攻勢計畫であるが、敵は本日無謀に突進し來るならば、川越西南方地區に於て遭遇戦を實行する覺悟で出撃することもあらう。又敵が慎重なる態度を以て逐次躍進して明拂曉後に攻撃し來る場合には、川越南方地區に於て我が砲兵の有力なる協力火の下に攻勢に轉ずる準備を整へて置く。

指導としては其何れの方法をも採用し得る。即ち明拂曉後の敵の慎重なる攻撃に對する諸準備

を研究して置いて、而して實際に於て敵は本日遭遇戰的に攻撃し來る情況を現出して敵の錯雜地通過後其歩、砲兵の協同不十分なるに乘じ攻撃する場合を研究すると兩者の研究が出来る。

又敵が慎重なる態度を以て逐次其第一線を推進し、我が第一の警戒部隊を撤退するに至るや安生老、四都野、中臺、中福の線に於ける第二警戒部隊の配備、愈々翌拂曉後敵の近迫に伴ひ攻勢移轉の時機看破が問題となり、愈々攻勢に轉ずるや各部隊の展開法が問題となり、遂に最後に師團豫備の用法が問題となる。師團豫備は成るべく南方に用ひ敵の右側を包圍する如く指導する。

以上を以て本想定の作爲及指導法の研究を終るが、特に本想定を提供したる所以は、戰術の應用は兎角型にはまり易くて一想定で研究するや其外形が似て居ると直に同一の決心、處置を採る弊に陥り易い。そこで指導者は常に此事を考へ一想定に就て研究したなれば夫れと類似の想定に於て異なる決心、處置を採る場合を想定して、此兩者を比較研究させたならば、被指導者は自然に其真髓を會得することになる。是一の指導方法であるので、其一例を示した次第である。

本想定之主要研究項目は

- 一 追撃中新ナル敵ノ現出ニ對スル決心
- 二 決戰防禦ノ配備及攻勢移轉

第十八 退却戰鬪の想定作爲

退却戰鬪は、帝國軍として實行すること極めて少く、今次事變に於ても大なる部隊を以て退却したことは一回もない位で、彼の日露戰役に於て稍、大なる部隊を以て計畫的に退却戰鬪を實行したことは萬寶山附近の退却戰鬪だけで、其他は戰線の一部に於て退却の餘儀なきに至つた位である。これは帝國軍本來の特徴と關連して古來退却は敗退と心得退却を以て不名譽とした國民性にも關係して居るが、退却は必ずしも常に敗退を意味するものでなくして、一の戰法である。持久目的を達する爲逐次の抵抗を實施することもあるべく、或は大軍中に於て一部突出したる部隊が全般の關係上後退することもあるべく、敵情に依りては我が國軍と雖退却戰鬪を實施することもあるべく、隨つて作戰要務令にも退却戰鬪の指揮法を示されて居る。但し作戰要務令第二部第十五に

戰鬪ノ經過遂ニ不利ナルニ方リ退却ヲ實行スルハ上級指揮官ノ命令ニ依ルヲ本則トス

とありて、戰鬪の經過不利で戰鬪を斷念して退却するのは上級指揮官の命令に依るを本則とすることを示され、上級指揮官の命令を受け得るに拘らず獨斷退却することは、之を認められて居な

い。但し上級指揮官としては之を命じ得る権能を與へられて居るわけである。随つて戦術の研究に於ても獨立した上級指揮官としては退却の決心を取り得るが、次級指揮官以下は命令がなければ退却を決心し之を實行してはならないのである。

作戦要務令第二部第二百二十一に

退却戦闘指導ノ主眼ハ速カニ敵ト離隔スルニ在リ之ガ爲師團長退却ニ決セバ速カニ後方ノ整理ヲ完了シ成ルベク數縦隊トナリテ併進スベキ部署ヲ定メ云々

とありて、師團長退却に決したなれば速かに斯くせよと示されて師團長は退却の決心を爲すべきことを認められて居る。併し軍内に在る師團長としては勿論軍命令に基くもので、既に退却を命ぜられた後に於ける退却時期の決定とか或は獨立して戦闘する場合の退却の決心と見るべきである。

固より退却は萬止むを得ない場合に實行するもので決して獎勵すべきものではないが、又一面に於て退却即ち敗走と心得退却は爲すべきものでないとの觀念餘り強きときは、一旦退却に移るや敗退と心得先を争つて逃走する如き弊害を生ずるに至るのである。殊に退却中反轉して攻撃を取るときは敵の不意に出て奇功を奏することもあるから、退却は戦法として十分認識する必要がある。

ある。殊に退却戦闘は其指揮最も困難であつて、退却戦闘の指揮が完全に出來る指揮官であれば其他の凡ての指揮も上手であると謂ひ得る。随つて退却戦闘の戦術指導も困難であつて、想定作爲及指導統裁法も研究工夫を要するものがある。以下逐次退却戦闘に關する各種の情況及其指導法を研究しよう。

其一 晝間の隨意退却

イ 攻撃を中止しての退却

一 準備研究

所要地圖 二十萬分一 東京 宇都宮
五萬分一 川越 青梅

退却戦闘の戦術指導は、攻撃防禦何れの想定でも攻撃戦闘或は防禦戦闘に引續き上級指揮官より退却の命令を受くるか或は情況上退却の餘儀なきに至つたとすれば、直に研究が出來るわけである。例へば想定第十九に於て今宿及越生町方面に退却した敵に對し、一部を以て市場附近を占領して師團左側の掩護に任じ主力を以て松山町方面より南下中の敵に對し下石井から坂戸町に互る線に展開して攻撃前進に移るや、松山町方面から南下した敵は案外優勢であつたか、或は今宿

方面より反轉攻勢を取つて來た敵に對し市場附近に在る一部隊では到底之を支へることが出來ないか、或は新なる敵が鴻巣方面から師團の右側背に迫る關係に在るので高等統帥部から一時決戦を避けて所澤附近を占領せよとの命令を受けたとすれば、それで退却戰鬪の研究が出来る。然し師團本隊の先頭が正午脚折北端に達したので、其先頭に在る歩兵第二聯隊が元宿、石渡戸間に展開するには約一時間半を要し、攻撃前進に移るのは如何に早くても十三時半以後となる。然るときは日没を待つて退却するのが至當であつて、晝間強ひて退却する必要がない。それで晝間退却の方法を研究するにはあの情況其儘ではいけない。如何にしても日没まで待てない情況とせねばならぬ。之が爲八時乃至九時頃大部分の展開を終つて居るか或は前夜兩軍接觸して翌朝から戰鬪が開始されて居る情況とせねばならぬ。然るときは所澤附近から追撃前進中とするには拂曉頃高萩附近に達したとの情況とせねばならぬ。又前夜接觸したとすれば追撃後の戰鬪とは別の想定に依らねばならぬ。斯くの如く攻撃戰鬪中或は防禦戰鬪中晝間退却の實行法を研究するには初めから之に適する如く想定なり情況を作爲せねばならぬ。戰鬪經過中夜であらうが晝であらうが最も現況に適した時機を選んで退却戰鬪を實行する方法を研究するならば、如何なる情況からでも指導出來るわけである。

次に晝間退却戰鬪の指導上最も重要な關係を有するものは、收容陣地である。其收容陣地が後方適當なる所にあればよいが、ない場合には退却戰鬪の指導が相當困難で、有ゆる手段を講ぜねばならぬことになる。又理想的のよい收容陣地があれば戰鬪指導は容易であるが、研究價值が少いことになる。それは誰でも著意する所であつて、比較研究や何れを採用すべきかに關し深く頭をひねる必要がないからである。それで初學者に對して指導するには、原則を説明するに好都合で容易に著眼する様な地形を選び、程度高き被教育者に對しては何れを採用すべきやに迷ふ如き複雑困難なる地形を選んで研究させるのが價值あるわけである。

次に戰況は彼我逼迫して所謂戰鬪酣なるに至れば退却實行は困難であるが、彼我尙餘地を存するときは退却容易であることは當然で、研究目的に應じ夫等の情況を決定すべきである。

今茲に高麗川左岸葛貫南方高地から欠ノ上附近に互り陣地を占領して居る敵に對し南軍師團が之を攻撃中退却に決し、其退却戰鬪指導法を研究する目的を以て其想定作爲並指導統裁法の研究をして見よう。

先づ敵陣地を攻撃中退却に決したものと定めたのは、晝間退却を實行せねばならぬ様にする爲である。即ち前夜から攻撃準備を爲し拂曉から攻撃實行に著手した際情況に依り退却せねばなら

ねことにすれば、何としても日没を待たないで直に退却せねばならぬ様になるからである。

南軍師團が高麗川右岸地區を占領せる敵を攻撃中退却せねばならぬことになつた全般の状況を如何に構成すべきやの研究から始めることにする。

全く他に關係のない獨立師團として例へば荒川右岸地區を領有すべき任務を有する南軍師團が高麗川右岸地區を占領せる敵を攻撃中新なる敵が松山町方面から南下して來たので、退いて某地點を占領して決戦防禦をするに決したとしても指導出來ないことはないが、此師團が何故荒川右岸地區を領有する任務を與へられたかとの疑問に對し、將來軍が此方面に作戰する爲先遣されたものとすれば、然らば何故右岸地區のみに先遣されたか、荒川左岸地區即ち中山道方面にも先遣さるべきであるとの疑問を生じ、結局中山道方面と相關聯せなければ合理的とならない。

それで主力軍が中山道方面に作戰するに方り其作戰を容易ならしむる爲一部を荒川右岸地區に進めたとして、此一部が高麗川右岸地區を占領せる敵を攻撃中退却の餘儀なきに至つたことを主力軍と相關聯せしめる爲、例へば主力軍が桶川、久喜町の線を占領せる敵を攻撃中浦和、越ヶ谷の線に退却して再舉を圖るに決し、荒川右岸の一部隊も志木か所澤附近に退却して軍主力に策應すると云ふことにしても成立しないことはない。又多く主力關係を斯くの如くあつさりと簡單に

片付けて一部方面の指導をして居るが、一部の先遣部隊の如きは決戦を避け退却することは屢起るであらうが、數箇師團の軍がさう簡單に之を中止して退却する如きは實際上起ることが極めて稀である。そこで主力軍の動きも實際上起り得る情況でなければ合理的と謂へない。

それで敵は宇都宮及高崎方面から前進したものとしてそれが大宮町から越ヶ谷市附近を経て吉川町附近に互り陣地を占領して居るのに對して、南軍は浦和市から鳩ヶ谷町を経て、草加町東方に互る線に在つて攻撃を準備中、敵の一部が寄居町方面から越生町方面に前進して來たので、軍の第二線に在つた師團をして之を攻撃させたところ、其攻撃中に熊谷方面から敵が南進して來り更に中山道方面に於ても大宮町方面に續々敵が兵力を増加しつゝあるので、軍は浦和市附近の左翼を其西南方松本新田附近荒川の線に後退し、同地より蕨町を経て鳩ヶ谷町に互る線に正面を若干變更し後續部隊の來著を待つに決し、高麗川右岸地區の敵を攻撃中の師團にも一時決戦を避け所澤附近を占領して軍の左翼を掩護すべく命じ、尙其方面の敵の一部が志木町方面に前進し來ることを顧慮して軍から一支隊を同町附近に派遣したとしたならば、漸次合理的に近づぐわけである。即ち軍主力の左翼が浦和町附近に突出して居たので、一時守勢を取る爲其左翼を若干後退し之に連繫する如く荒川右岸の師團を所澤附近に退けたとしたならば、軍主力を輕易に進退させる

様なことなく、支作戰方面の一部隊の行動をも合理的に指導し得るのである。但し以上は全般關係を十分吟味する経緯を述べたので、之を全部想定に現はすのではなく、其中必要なだけを現はせばよいので、それが簡單に想定に歌はれて居ても其眞意は夫れまで検討したものであることが想定に無理を生じない要素である。

小川方向から前進する敵に對し軍の左側を安全ならしめる爲、東京西方地區から前進した師團が高麗川右岸葛貫南方高地より欠、上附近に互り陣地を占領せる敵に對し昨日來攻撃を準備して本日拂曉攻撃を開始し、七時頃第一線部隊は概ね高麗川の線に達した時に長徑十軒内外の敵が熊谷方向より南進中にして、七時には松山町に達する距離に在ることを知つたと云ふ情況で、最高統帥部から其師團は決戦を避け所澤附近に退却して軍の左側を掩護せよとの命令を受けたとして當時の師團の情況が次の通りであると云つて師團全般の情況を指示する。即ち右翼隊は歩兵一旅團を基幹としたもので淺羽から森戸に互る間、左翼隊に歩兵四大隊を基幹としたもので葛貫南方一帯の高地に向ひ攻撃し、歩兵二大隊の豫備隊が最初笠幡附近に位置し後大田、谷から才道木方向に移動中で砲兵の主力は才道木、一部は下鹿山附近に陣地を占領し患者收容隊は才道木、野戰病院は小、谷及柏原村上宿に、輜重の彈藥中隊は的場及高萩附近に位置して彈藥補給の準備中で

あるとの情況とする。此等の配備及位置は全然退却と云ふことを考へないで、攻撃に最も都合のよい隊勢を取つたものとして、退却戰鬪の研究を行ふのである。但し時としては退却戰鬪を指揮する爲故ら不便の隊勢に在る如く示すことはあるが、退却行動に移るに便なる配備に在る様を示す如きは指導上當を得たものでない。部署を爲すに困難なる場合を研究して置けば一般普通の場合には平易に部署し得る様になるのである。

次に地形は此附近一般森林が錯雜して居るので、特に其錯雜せる森林戰を研究するならば兎も角、之を滿洲の地形と假想し部落以外は通視容易なるものとして研究するには、大部伐採されたとしてもよろしく、又小さき桑の畑に變つて居るとしてもよい、何れにしても相當の射界があるものと假想する必要がある。

敵の素質は研究目的に應じて定めるが、能力劣等として之を輕侮するときは弊害があるから、寧ろ相當の能力を有するものとして研究する方が價值大である。但し之が爲常に我が方が萎縮することのない様に注意せねばならぬ。

二 想定作爲

以上逐次研究したる所を想定に現はせば次の如くなくなる。

想 定(第二十一)

一 宇都宮及高崎方面ヨリ前進シ大宮町ヨリ越ヶ谷町附近ヲ經テ吉川町附近ニ互リ陣地ヲ占領セ
ル北軍ニ對シ南軍主力(三師團ヲ基幹トス)ハ浦和市ヨリ鳩ヶ谷町附近ヲ經テ草加町東方地區ニ
互ル線ニ在リテ攻撃ヲ準備中ナリ

二 寄居町方向ヨリ前進スル敵ニ對シ爲シ得レバ之ヲ擊攘シテ軍ノ左側ヲ安全ナラシムベキ任務
ヲ以テ田無附近ヨリ前進シタル南軍第一師團ハ高麗川左岸葛貫南方高地附近ヨリ欠ノ上附近ニ
互リ陣地ヲ占領セル敵ニ對シ昨一日夕以來攻撃ヲ準備シ今十一月二日拂曉以來敵ヲ攻撃中ニシ
テ七時其第一線ハ概ネ高麗川ノ線ニ達セリ

此時師團長ノ知リ得タル諸情況次ノ如シ

イ 軍飛行機ノ通報

長徑約十軒内外ノ敵ハ熊谷方面ヨリ南進中ニシテ七時ニハ松山町ニ達スル距離ニ在リ

ロ 軍司令官ノ命令要旨

1 中山道方面ニ於テハ最近數箇師團ノ敵兵増加シ其一部ハ熊谷方面ヨリ松山町方面ニ前進
中ナリ

2 軍ハ左翼ヲ松本新田附近ニ後退シ増加兵團ノ來著ヲ待チ攻勢ニ轉セントス

3 第一師團ハ決戦ヲ避ケ所澤附近ヲ占領シテ軍ノ左側ヲ掩護スベシ

志木町附近ニハ軍ヨリ別ニ一支隊ヲ派遣ス

三 第一師團ノ編組並攻撃部署左ノ如シ

1 右翼隊

長歩兵第一旅團少將某

歩兵第一旅團

戰車隊一隊

騎兵一小隊

工兵一小隊

淺羽附近ヨリ森戸附近ニ互ル間ニ展開シ市場以北ノ敵ニ對シ攻撃中

2 左翼隊

長 歩兵第二旅團長

歩兵第二旅團(歩兵第四聯隊(第三大隊欠)欠)

騎兵一分隊

工兵一小隊

四日市場ヨリ高麗川村附近ニ互ル間ニ展開シ大寺北側高地ヨリ下川原附近ニ互ル敵陣地ニ對シ攻撃中

3 砲兵隊

野砲兵第一聯隊

野戰重砲兵第一大隊

主力ヲ以テ才道木、下高萩新田間ノ地區、一部ヲ以テ下鹿山附近ニ陣地ヲ占領シ主トシテ右翼隊、一部ヲ以テ左翼隊ノ攻撃ニ協力中

4 騎兵隊

騎兵第一聯隊(一小隊ト一分隊欠)

坂戸町附近ニ在リテ師團ノ右側ヲ警戒中

5 豫備隊

歩兵第四聯隊(第三大隊欠)

工兵第一聯隊(二小隊欠)

笠幡ヨリ太田ヶ谷ヲ經テ才道木方面ニ前進中但工兵一中隊ハ砲兵ノ陣地占領ヲ援助シ尙其位置ニ在リ

6 師團直轄部隊

野戰高射砲第一乃至第三隊

主力ハ才道木附近、一部ハ上鹿山附近ニ陣地ヲ占領シテ防空ニ任ズ

師團通信隊

師團司令部ヨリ各直轄部隊ノ位置ニ通信網ヲ架設セリ

7 師團司令部

高萩ニ位置ス

8 後方諸機關

患者收容隊 才道木

野戰病院 第一ハ小ヶ谷、第二ハ柏原村上宿

彈藥補給ノ輜重 的場及高萩

其他ノ輜重 所澤以南

行李 扇町屋

四 地形及其他ニ就テ

- 1 五萬分一圖實線路(水田中ヲ通過セルモノヲ除ク)ハ野砲ヲ通ズ
 - 2 平地並平地ニ近キ高地斜面ノ森林ハ大部伐採セラレ桑ノ小樹或ハ畑地トナリ配兵通視ニ支障ナシ
 - 3 部落市街建築物ノ構造ハ滿洲ノモノニ同ジ
 - 4 敵軍ノ編制、裝備ハ優良ニシテ素質モ我が軍ニ劣ラズ
 - 5 南軍飛行隊ノ飛行場ハ東京ニ在リテ何時ニテモ師團ノ要求ニ應ジ協力セラル
- 本想定に於て後方諸機關の位置を比較的細部に互リ示したのは退却戰團指揮上大なる關係があるからである。

三 指導統裁法

本情況に於て軍司令官の命令を與へないで、中山道方面の敵兵力の増加及松山方面よりの敵の前進に關する情況を與へて師團長の決心として退却するや或は攻撃を續行するやの問題を出すこ

とは、一つの指導法であるが、決心問題とすれば有ゆる手段を講じて少くも日没を待つ考案を立てる如く努むべきである。それで退却の餘儀なきに至る如き情況を與へて尙且つ踏み止まる様に指導するならば問題としてよいが、本情況の如く退却戰團法指導の目的で退却させる場合には退却を命ずる如くするのは特に我が帝國軍の指導方法として採擇すべきであつて、退却に關する作戰要務令の要求も上級指揮官より命ぜらるゝことを立前として居るのも其意味である。

さて、本想定に基く問題は師團長として如何に處置すべきやを要圖を以て答解させてもよく、又命令を以て答解させてもよい。要圖を以て答解させる場合には實行の順序を明確ならしめる如く要求することが必要である。是れ退却處置としては其實行の順序が最も重要であるからである。

第一問題

師團ノ退却方法

說明

退却の處置としては先づ後方諸機關に退却を命じ、次に收容隊を定め之に收容陣地占領を命ずる。收容陣地は次の如き諸案がある。

第一案 隠谷戸附近

第二案 高萩村附近

第三案 柏原村附近

第四案 入間川町或は扇町屋附近

第一案は、現在太田ヶ谷に向ひつゝある豫備隊を以て占領するに便であるが、稍、右に偏するのと砲兵の射界が不十分である。

第三案は、左翼隊方面に砲兵火力が及ばないのと、第一線より稍、遠く之を占領するまで可なり時間を要する

第四案は、射界は十分であるが距離遠く、收容隊が之を占領するまで第一線が其位置に止まつて居ることは頗る不利である。

第二案は第一線に稍、近き憾はあるが、随つて占領が迅速で其砲兵火も概ね師團正面に及ぼし得る。元來師團全般の爲の收容陣地は其掩護の下に集合し且出發し得せしめる爲であるから、師、團第一線撤退の際收容陣地から必ずしも砲兵を以て之を收容し得る必要なく、第一線部隊は夫々自己の部隊を以て收容すべきであるが、第一線撤退の時機は最も危険で、此機に乗じ敵が突進し

て第一線部隊の退却を困難ならしめるから、出來得れば收容陣地の砲兵から敵第一線の出鼻を叩き得るのがよい。

高萩附近は、主力砲兵が之を占領するにしても一部の砲兵が之を占領するにしても、敵前に於て若干側面行進をせねばならぬ不利はあるが、其後の撤退は容易である。

次に收容隊に何れの部隊を充つべきやであるが、左翼隊の豫備隊が高萩近傍にあれば之を充てゝもよいが、左翼隊長としては其豫備を以て自己の收容に充てるであらうから、多少不便でも師團豫備を之に充て砲兵は下高萩附近を占領しあるものを充てる。

次に行進目標であるが、

作戰要務令に明確に各縦隊に行進目標を示すべきことを要求されて居る。何故特に明確と要求されて居るかと云へば、師團長が部下を掌握するのは此行進目標に依るのである。之を聞き間違へたりすると部隊はとんでもない所に行つて而かも敵は後方からどん／＼追つ掛けてくるので、支離滅裂に陥る虞がある。それで特に之を要求されて居るのである。随つて其目標は誤解の起らない誰も知つて居る明瞭な地點を示すことが緊要である。必ず其處を通過せねばならぬ地點であれば少々第一線から遠くても間違のない地點を選定して指示すべきである。それで此際右翼隊方

面は入間川町、左翼隊方面は扇町屋とすれば明瞭であらう。但し入間川町と入間川と間違を起すかも知れないが、行進目標として延長地區の川を示す筈がないから、町と解するであらう。

次に第一線部隊の退却順序

であるが、第一線は左右成るべく同時に退却するのがよいが、此際右翼隊の方が突出して居るから、右翼隊を先にし次に左翼隊を退却させる。右翼隊の第一次撤退の時機は收容隊の砲兵が概ね陣地に就いた頃を見計つて命ずる。砲兵は收容砲兵が砲兵陣地に就いたならば第一線歩兵よりも先へ撤退させる。但し困難なる所は一部最後まで残すこともある。砲兵としては逐次撤退の方法に依る。

退却地區としては

右翼は高萩―扇町屋道(含まず)以東の地區、左翼隊は其道路を含んで以西の地區から退却させる。

退却戦闘指導の主眼は、速に敵と離隔するに在る。之が爲極端に云へば各個に某地點に向つて退却させればよいのであるが、さうすると全然纏まりがつかない。又退却に決するや第一線部隊を直に撤退させればよいのであるが、後方諸機關を先づ撤退させて第一線の後方に邪魔物が居ない様にして置かねば、之が退路を閉塞して混亂を起す虞がある。本情況に於ては患者收容隊

も野戦病院も傷者を收容して居ないから簡單であるが、これが多數の負傷者を收容して居るときは夫等の處置を爲す爲第一線は依然戦闘を繼續して居らねばならぬ。後方諸機關を撤退させると共に收容隊を命じ、其收容隊が陣地に著いた頃第一線が撤退を始める様にす。而して第一線部隊が行進目標に向つて逐次後退して來たならば、師團長或は幕僚が其附近に待ち受けて次の任務を與へる。成るべく速に敵と離隔する主義から云へば行進目標などを示さないで直に退却目標に向つて退却させればよいのであるが、何故行進目標などを示して其附近に於て掌握する必要があるかと云へば、退却戦闘に於ては退却間全く敵の随意の行動に委せねばならぬ、而して第一線部隊中何れの方が先へに退却し來るか全く豫想がつかない、之が豫想し得るならば豫想に隨つて行動させればよいが、豫想出來ないから、止むを得ず行進目標附近に於て掌握するのである。即ち某部隊が先づ行進目標附近に退却して來たならば其時の情況に依つて第一線に残つて居る部隊が困難なく退却し得るとの見込がつけば其部隊を續いて退却目標に向つて後退させ、若し残つて居る第一線部隊或は收容隊の退却が困難で更に第二の收容を要すると判断した場合には、先に退却して來た部隊を暫く其位置に止め必要に應じ残つて居る部隊を收容させ、或は必要なければ更に退却させる。斯くして最後に退却して來た部隊を止めて收容隊を收容させてそれを後衛と爲し

得れば好都合であるが、第二の收容隊を以て第一の收容隊を收容させ、第二の收容隊を收容させた部隊を以て後衛に任ずることもある。

退却中の部隊が收容隊を援助せんが爲妄に敵に正面して戦闘を挑むときは却て危殆に陥り、敵との離脱益、困難となる不利はあるが、時として友軍退却の危急を救はんが爲果敢な反撃を加ふるを要することがあるので、指揮官としては退却中の部隊を掌握する必要があるのである。

原 案

師團ノ退却方法

- 一 退却目標 所澤附近
- 二 後方諸機關ノ撤退
 - 1 患者收容隊ハ直ニ撤シ入間川町ヲ經テ所澤東南方久留米村ニ退却
 - 2 衛生隊ハ直ニ野戰病院ヲ閉鎖シ第一ハ大田村ヲ經テ、第二ハ入間川町ヲ經テ田無町ニ向ヒ退却
 - 3 行李ハ直ニ久留米村ニ向ヒ退却
 - 4 的場ニ在ル輜重ハ大田村ヲ經テ、柏原ニ在ル輜重ハ入間川町ヲ經テ田無町ニ向ヒ退却

其他ノ輜重ハ上井草ニ向ヒ退却

三 收容隊ノ任命

1 收容隊ノ編組

長 歩兵第四聯隊長

歩兵第四聯隊(第三大隊欠)

騎兵一分隊

野砲兵第一聯隊第二大隊(下高萩新田附近ニ位置セルモノ)

工兵一小隊

2 收容陣地 高萩附近

四 師團通信隊

直ニ通信線ヲ撤シ所澤ニ向ヒ退却

五 第一線諸隊ノ退却

- 1 右翼隊ハ七時四十分退却行動ヲ開始シ森戸新田—高萩—扇町屋道(含マス)以東ノ地區ヲ入間川町ニ向ヒ退却

2 左翼隊ハ八時退却行動ヲ開始シ森戸新田—高萩—扇町屋道(含ム)以西ノ地區ヲ扇町屋ニ向ヒ退却

3 砲兵隊ハ收容砲兵隊ガ高萩附近ニ陣地ヲ占領スルヤ逐次行動ヲ開始シ主力砲兵ハ高萩新田—柏原村道(含ム)以东ノ地區ヲ入間川町ニ向ヒ下鹿山附近ニ在ル砲兵ハ根岸ヲ經テ扇町屋ニ向ヒ退却

4 騎兵隊ハ師團ノ右側ヲ警戒シツツ先ズ入間川町ニ向ヒ退却

5 工兵隊ハ扇町屋ニ向ヒ退却

6 野戦高射砲隊ハ直ニ陣地ヲ撤シ一隊ハ扇町屋ニ到リ防空ニ任ジ主力ハ所澤ニ向ヒ退却

六 師團長

第一線部隊ノ退却運動ニ就キタルヲ認ムルヤ高萩ニ到リ爾後ノ部署ヲ爲ス

以上は大體の部署と其實施順序とであるが之を各別に下達する命令として作業させるのもよい此研究終つて次の問題を課する。

第二問題

收容陣地占領法

説明

收容陣地としての占領法は

第一案 高萩附近を小じんまりと占領するのと

第二案 高萩から隠谷戸附近に互り占領するのと二案ある。

第一案は、陣地其ものは小じんまりしてよいが、敵の主なるものゝ突進して来るのは右翼才道木方面からであつて、隠谷戸附近は忽ち敵の占領する所となり、随つて高萩附近も所要時間保持することが出来ないことになる。

第二案は、正面廣い不利はあるが、隠谷戸附近を相當有力なる部隊を以て占領することは抵抗力を増す所以である。それで

原案

判決

收容隊ハ高萩附近ヨリ隠谷戸附近ニ互り陣地ヲ占領スルヲ要ス

配備

一 歩兵第一大隊(一中隊欠)及聯隊砲ヲ以テ半澤ヨリ隠谷戸ヲ經テ猿谷戸ニ互ル間ヲ占領セシム

- 二 歩兵第二大隊(一中隊欠)ヲ以テ高萩北方ヨリ女影ニ互ル間ヲ占領セシム
- 三 野砲兵第二大隊ハ高萩北部東側ニ陣地ヲ占領セシム
- 四 歩兵二中隊、工兵一小隊ヲ豫備トシテ高萩南側ニ位置セシム
但工兵小隊ハ砲兵ノ陣地占領及撤退援助ノ爲同所ニ在ラシム
- 五 聯隊本部及騎兵分隊ハ高萩中部ニ位置ス

情況第一

- 一 七時十分右翼隊ハ次ノ如キ状態ニ在リ
- 1 歩兵第一聯隊ノ第一線ハ北大塚南方附近ヨリ萱方西方附近ニ互ル高麗川ノ線
- 2 歩兵第二聯隊(第三大隊欠)ハ第一聯隊ノ左翼ヨリ森戸西方附近ニ互ル高麗川ノ線
- 3 右翼隊豫備タル歩兵第二聯隊第三大隊及工兵小隊並戰車隊ハ下新田東北側附近ニ在リ
- 二 七時二十分右翼隊長ハ退却ニ關スル師團命令ヲ受領ス

以上的情況に基き次の問題を課する。

第三問題

右翼隊ノ退却方法

説明

右翼隊としては手つ取り早く第一線部隊が退却を開始し得る如く處置せねばならぬ。否らざれば第一線は益々敵に近迫して敵との離脱困難となる。それで收容陣地は藤金附近がよいのであるが、夫れを占領したる後第一線を撤退するときは稍遅れる虞があるから、脚折西北端附近を占領して第一線を收容させ、其占領終り次第第一線を撤退する如くしたなれば、所期の如く退却し得るであらう。之に歩兵第一聯隊の聯隊砲を一時配屬して收容を容易にする如くする。

原案

右翼隊退却方法

- 一 歩兵第二聯隊第三大隊ニ歩兵第一聯隊ノ聯隊砲ヲ配屬シテ收容隊ト爲シ脚折西北端附近ヲ占領シテ第一線ヲ收容セシム
- 二 收容隊ガ收容陣地ヲ占領シ終ルヤ右第一聯隊ハ萱方南端、高倉南端、半澤北端ノ線(以上ノ諸點ヲ含ム)以東ノ地區ヨリ入間川町ニ向ヒ退却セシム
- 三 左第二聯隊ハ右ト同時ニ前記ノ線以西、森戸新田—高萩—扇町屋道(含マズ)以東ノ地區ヲ入間川町ニ向ヒ退却セシム

四 第一線部隊が藤金、森戸新田ノ線以南ニ退却セバ收容隊ヲ撤シ右縦隊後衛トナリ入間川町ニ向ヒ退却セシム
但シ敵ノ追撃急ナルトキハ先ニ退却シ來リタル部隊ヲ下高萩新田附近ニ停止セシメ收容隊及其他ヲ收容セシム

情況第二

- 一 收容隊砲兵ハ七時四十分高萩ニ到着シ陣地占領ニ著手ス
- 二 收容隊歩兵第一大隊ハ七時四十分隱谷戸ニ到着シ陣地占領ニ著手シ同第二大隊ハ七時五十分高萩ニ到着シ陣地占領ニ著手ス
- 三 七時五十分砲兵隊ハ逐次撤退ヲ始ム
- 四 右翼隊ハ八時稍、前ヨリ第一線撤退ヲ始メ左翼隊ハ八時十分ヨリ第一線撤退ヲ始ム
- 五 我が第一線撤退ヲ始ムルヤ敵全線ニ互リ點々出撃ヲ始メタルモ各方面トモ其行動活潑ナラズ
- 六 八時二十分右翼隊第一線ガ脚折西端、高倉ノ線ニ達セントスルヤ敵ハ全線ニ互リ漸次活氣ヲ呈シ高麗川ノ線ヲ越エテ追撃シ來ル
- 七 九時二十分第一線最後部隊ガ本町、隱谷戸、高萩、四本木以南ノ線ニ達スルヤ敵第一線ハ大

田ヶ谷南端、三ツ木新田、駒寺野新田、高麗川村原ノ線ニ進出ス

八 收容隊砲兵並半澤方面ニ在ル聯隊砲ハ敵第一線ヲ猛射ス

九 野砲兵第三大隊ハ九時三十分扇町屋ニ、歩兵第三聯隊主力ノ先頭ハ九時四十分根岸ニ達ス

此時師團長ハ豊岡町ニ在リ

以上の情況に基き次の問題を課する。

第四問題

師團長處置アリヤ

説明

收容隊に對しては、師團長としては退却する部隊の最後尾が收容陣地の線に達したならば收容隊は其陣地を撤退して行進目標に向つて退却すべきを命じてある筈である。そこで此際師團長として爲すべきことは、今退却して來た部隊を以て收容隊を收容させることである。之が爲め左翼隊長たる歩兵第二旅團長に歩兵第三聯隊、騎兵隊、野砲兵第三大隊、工兵聯隊の主力を指揮させて扇町屋附近を占領して退却中の諸部隊及收容隊を收容し、爾後後衛となつて所澤に向ヒ退却すべきを命じ、其他の部隊は逐次所澤に向つて退却させる。

原案

師團長ノ處置

- 一 歩兵第二旅團長ヲシテ左ノ部隊ヲ指揮シ扇町屋附近ヲ占領シテ退却中ノ部隊及收容隊ヲ收容シ爾後後衛トナリ所澤ニ向ヒ退却セシム
- 歩兵第三聯隊、騎兵隊、野砲兵第三大隊、工兵聯隊ノ主力
- 二 其他ノ部隊ハ逐次所澤ニ向ヒ退却セシム
- 三 幕僚ヲ止メ退却シ來ル部隊ニ逐次命令ヲ傳達セシメ師團長ハ所澤附近ニ先行シテ陣地ノ偵察ヲ爲ス

爾後の指導

所澤附近に於ける陣地占領法を研究し退却し來る部隊を逐次陣地に就かしめ爾後敵の攻撃に對する攻勢移轉を以て本想定の研究を終る。

本想定ノ主要研究項目は

- 一 晝間攻撃ヲ中止シテノ退却戰鬪ノ指揮法
- 二 退却實施ノ順序及收容陣地ノ決定

ロ 防禦よりの晝間退却

今回は防禦から晝間退却を行ふ戰鬪指導の爲の想定作爲並其統裁法を研究して見やう。

所要地圖

二十萬分一 東京、宇都宮
五萬分一 川越、熊谷

一 準備研究

地圖を大體現在研究しつゝある川越附近に限定して、防禦から退却戰鬪を實施する爲、前回想定の攻者を防勢に立たせたとして高萩西南方上鹿山附近から高萩附近を経て其東方隱谷戸附近に互る線を占領して小川及松山方面から前進して來た敵を拒止しつゝある際、全般の情況及上級指揮官の命令に基いて退却に決したとしたならば、それで研究出來ないこともなく、又相當研究價値もあるが、其收容陣地は扇町屋或は根岸附近であつて、砲兵を扇町屋附近に於て陣地を占領させ歩兵は其掩護の意味に於て根岸附近を占領することにならう。さうすると比較的其決定が容易で、隨つて研究價値が少いわけで、今少し收容陣地の決定に苦しむ様な地域を選定して其想定作爲を試みよう。

單に五萬分一川越の地圖一枚内に於ても川越から其西南方地區に互る線を占領して松山方向か

ら前進して来た敵を拒止しつゝあつたとしても、或は高萩附近を南面して占領して居たとしても或は前回想定の對抗軍を取つて高麗川左岸の陣地を占領して居たとしても、夫より退却運動に就く戦闘指導法の研究が出来るが、今茲には收容陣地の決定に相當研究價值のある、川越西北方小畔川の線を占領して東京方面から前進した敵を拒止しつゝある際、退却に決したとして防禦から退却する戦闘指導法を研究する想定を作為することにする。

北軍として小畔川の線を占領するのは川越附近まで前進出来なかつた情況とせねばならぬ。随つて陣地の設備に多くの時間がなく、一時防勢に立つたものとなるわけである。

小畔川の線を占領して防禦中退却の餘儀なきに至つた情況を構成するに、師團の先遣支隊位とすると、簡單であるが、小部隊の支隊では正面廣く漠然たる小畔川の線を占領することが不自然であり、且小支隊であれば退却することも容易であるから、其戦闘指導も左程困難でない。そこで退却戦闘指導の相當困難なる師團位の兵力とすれば、自然中山道方面に作戦する主力軍に策應する一部となる。

そこで中山道方面に作戦する主力軍が東京方面から荒川右岸地區を前進する敵に對し一師團位の兵團を其方面に派遣したとして、それが退却するに至るのは如何なる情況に基くか、單に主力

軍が敵と相對して居て、夫れが退却運動に就くから一部に之に連繫して退却せよと命じたとする、假りに主力軍が鴻ノ巣、加須町の線に在つて敵と戰鬥中遂に退却の餘儀なきに至り、熊谷及其北方地區に向つて退却するに決し、小畔川の線を占領して居る部隊に熊谷西南方地區に向つて退却せよと命じたとしても成立しないことはない。然し軍主力は夜暗を待つて退却することが出来ないかと言へば、これは特別の情況でない限り軍としては日没まで待つてないことはない。さうすれば小畔川占領部隊も日没を待つてないかと云ふことになる。これは當面の敵情上日没を待つてないとして主力軍が日没を待つて退却するのに今から其意圖を小畔川占領部隊に示すことは過早に我が企圖を暴露する基であり、之が爲如何なる不利に陥るかも知れない。又軍の退却の意圖を示さなければ小畔川占領部隊に熊谷西南方地區に向つて退却せよと命ずることが出来ない。それで軍の退却の企圖を現はさないで小畔川占領部隊を後退させるには、松山町より以北に退却させることは出来ない。そこで松山町附近に向つて退却させるとすると、小畔川の線から距離が近過ぎて或は纏まらねるかも知れない。然しこれは少々距離が近過ぎて其困難に打克つて之を集結することが、之亦部隊運用の研究である。又小畔川の線を正午頃から退却するとすれば、松山町附近に達するのは日没頃となるから、同地附近の占領は左程困難ではない。

次に小畔川占領部隊をして當面の敵情上退却の餘儀なきに至らしむるには、其右側背に有力なる敵が近迫しつゝある情況とすれば、日没を待てないで退却せねばならぬことになる。

該部隊の兵力は、師團の一箇聯隊を缺いたもの即ち三聯隊師團とすればよからう。其任務は東京方面から荒川右岸地區を前進する敵に對し鴻ノ巢、加須町の線に於て對戦中の軍の右側を掩護し爲し得れば之を撃破する目的で川越に向ひ前進中川越市を敵に先んじて占領する見込なく小畔川の線を占領するに至つたとして、

其配備は下小坂附近を歩兵一大隊を以て占領し小堤附近から吉田南側を経て天沼新田南端附近に互る間を歩兵一旅團を以て占領し、砲兵の一部は下小坂附近及小堤附近、主力は吉田附近に配置し、聯隊長の指揮する歩兵二大隊を豫備として上廣谷附近に位置させる。

敵の第一線は十一時頃平塚、上戸、的場北端、大町北端の線に進出しありて、新なる敵は所澤方面から入間川町を経て柏原村方向に前進中で、十一時には上宿に達する距離に在る。

此時軍司令官から其師團は決戦を避け松山町附近に退却して同地附近を占領すべき命令を受けたとして、退却戦闘の指導法を研究する。

地形に關しては前想定同様平地並平地に近き高地斜面の森林は大部伐採せられ、桑の小樹或は

畑地となり配兵、通視に支障なきものとし、

敵軍の編制、裝備も我に劣らないものとして研究をする。

二 想定作爲

以上逐次研究したる所を次の如く想定に現はす。

想 定 (第二十二)

- 一 高崎方面ヨリ前進シタル北軍主力(三師團ヲ基幹トス)ハ東京方面ヨリ前進シタル敵ト中山道以東鴻ノ巢町、加須町ノ線ニ在リテ對戦中ナリ
 - 二 東京方面ヨリ荒川右岸地區ヲ前進中ノ敵ニ對シ軍ノ右側ヲ掩護シ爲シ得レバ之ヲ撃破スベキ任務ヲ有スル北軍第一師團ハ熊谷附近ヨリ南進シ川越西方小畔川左岸地區ヲ占領シテ敵ノ攻撃ニ對戦中ニシテ十二月一日十一時敵ノ第一線ハ平塚、上戸、的場北端、大町北端ノ線ニ達セリ
- 此時師團長ノ知り得タル諸情況次ノ如シ

イ 軍飛行機ノ通報

長徑約七、八軒ノ敵ハ所澤方面ヨリ入間川町ヲ經テ柏原方向ニ前進中ニシテ十一時ニハ其先頭上宿ニ達スル距離ニ在リ

ロ 軍司令官ノ命令要旨

1 軍正面ノ敵ハ逐次増加ノ景況ニ在リテ荒川右岸地區ニ於テモ敵ノ一部田無附近ヨリ所澤方向ニ前進中ナリ

2 第一師團ハ決戦ヲ避ケ直ニ松山町附近ニ向ヒ退却スベシ
爾後ノ行動ニ關シテハ追テ命令ス

三、第一師團ノ編組並防禦部署左ノ如シ

1 右地區隊

長 歩兵第一旅團長 少將某

歩兵第一旅團(第一、第二聯隊)

戰車隊一隊

騎兵一小隊

工兵一小隊

2 左地區隊
天沼新田南端附近ヨリ吉田南側ヲ經テ小堤、下小坂中間ニ互ル間ヲ占領

歩兵第三聯隊第一大隊

騎兵一分隊

工兵一小隊

右地區隊ノ左翼ヨリ下小坂北端ニ互ル間ヲ占領

兩地區隊ノ搜索、警戒ノ區域ハ小堤裏北端、鯨井北端、今成北端ヲ連ヌル線(線上ハ右地區隊ニ屬ス)トス

3 砲兵隊

野砲兵第一聯隊

一部ヲ以テ下小坂及小堤附近(下小坂一中隊、小堤ニ二中隊)、主力ヲ以テ吉田附近ニ陣地ヲ占領ス

4 騎兵第一聯隊(一小隊ト一分隊欠)

太田ヶ谷附近ニ在リテ師團ノ右側ヲ警戒ス

5 豫備隊

歩兵第三聯隊(第一大隊欠)

工兵第一聯隊(二小隊欠)

上廣谷附近ニ位置ス

6 師團直轄部隊

野戰高射砲第一乃至第三隊

主力ハ五味ヶ谷、一部ハ戸宮附近ニ陣地ヲ占領シ防空ニ任ズ

7 師團通信隊

師團司令部ヨリ各直轄部隊ノ位置ニ通信網ヲ架設セリ

8 師團司令部

關間新田ニ位置ス

9 後方諸機關

患者收容隊 五味ヶ谷

野戰病院一箇 坂戸町

彈藥補給ノ輜重 坂戸町及塚越

其他ノ輜重 宮前、大麻生間

行李

松山町

四 地形及其他ニ就テ

1 五萬分一圖實線路(水田中ヲ通過セルモノヲ除ク)ハ野砲ヲ通ズ

2 小畔川ハ下小坂ヨリ下流ハ徒涉シ得ズ

3 平地並平地ニ近キ高地斜面ノ森林ハ大部伐採セラレ桑ノ小樹或ハ畑地トナリ配兵、通視ニ支障ナシ

4 部落、市街建築物ノ構造ハ滿洲ノモノニ同ジ

5 敵軍ノ編制、裝備ハ優良ニシテ素質モ亦我が軍ニ劣ラズ

6 北軍飛行隊ノ飛行場ハ高崎ニ在リテ何時ニテモ師團ノ要求ニ應ジ協力セラル

三 指導統裁法

以上の想定に基き次の問題を課する。

第一問題

師團ノ退却部署

説明

退却部署としては先づ後方諸機關に退却を命じ次に收容隊を定め之に收容陣地占領を命ずる。
患者收容隊、野戦病院共に傷者を收容して居ないから、撤收容易である。若しも多數の傷者を收容して居るときは其處理に數時間を要することを考慮せねばならぬ。随つて第一線の撤退は多少不利でも所要時間を抵抗させて其間に後方諸機關の撤退を行ひ、凡そ其見透しのつく頃第一線に撤退を命ずる。此際後方諸機關を何れまで退却させるかは、松山町附近に於て抵抗する場合を顧慮し差當り夫れに應ずる爲と中山道上を避け其西南地區に位置させることを著眼として其位置を決定する。即ち

患者收容隊は宮前に

野戦病院は小原

坂戸及塚越に在る輜重は御正に

其他の輜重は小前田、兒玉町間に

行李は大麻生、武川間に

夫々退却させる。

次に退却目標と行進目標

退却目標は軍司令官から命ぜられて居る通り松山町である。

行進目標は高坂村にすべきか松山町にすべきかが研究問題である。行進目標は通常收容陣地の掩護下に集結(必要以外には一地に集合するのではない)し次の行動に移らしめる爲の掌握地點である。本情況に於ける退却目標は極めて近く松山附近であるから、途中で一旦掌握して更に松山町に向つて行進させる必要なく、最初から松山町を行進目標として差支ない様であるが、收容隊を高坂以南に位置させた場合夫れを收容する必要の起ることもあるから、一旦高坂を行進目標とするのが至當である。但し高坂を通過しない部隊には別に示せばよい。

次に收容陣地と收容部隊との決定である。

收容陣地としては次の三案がある。

第一案 高坂附近

第二案 塚越附近

第三案 坂戸町附近

第一案は、收容陣地其者が堅固で爾後の退却にも容易であるが、第一線より遠くして之を占領させる爲に多くの時間を要し、時機を失する虞がある。

第二案は、師團の一部隊の退却する方面であつて、全般の收容の爲には左方に偏し適當でない。

第三案は、稍、右に偏し收容隊爾後の退却も第一案の如く容易ではない。然し師團の主力の退却する方面であつて、敵も亦此方面に重點を指向するであらうから、夫れを支へる爲にも此案が適當である。

次に收容部隊であるが

收容部隊の歩兵は上廣谷附近に在る豫備隊の歩兵第三聯隊(第一大隊欠)を充て、砲兵は小堤附近に在るのを充てるか或は吉田附近に在る主力から引き抜くかは、研究問題である。小堤附近に在る砲兵は本道に近く撤退容易であるが、二中隊の内一中隊を引き抜いたのでは、兵力少く、二中隊全部を同時に撤退するときは一時に此方面の砲兵が無くなつて敵の前進を支へることが困難である。それで主力吉田方向から一大隊を引き抜いて收容隊の砲兵に充當する。

之に工兵の一部と傳騎を配屬すればよい。

次に第一線部隊の退却時機及退却地域であるが、

退却時機は、夜暗を待てないならば、成るべく早いのはよいが、後方諸機關の撤退が出来ないで

第一線部隊の退却行動を妨げ後方から敵が急追する様な状態となつれば頗る不利である。それで退却開始に至るまでは第一線の状態には何等の變化を起さしめず、愈、退却を開始するや全線一舉に而かも最も迅速に撤退するを要する。敵が防禦をして居る場合には攻者が退却行動に就ても防者は直に突進することは多少困難であるが、防者の退却に際しては攻者は其儘の隊勢で前進すればよいのであるから、追撃動作に移ることも極めて迅速であることを覺悟せねばならぬ。

第一線兩地區隊は、現在の隊勢の儘退却させるのであるが、道路網の關係は高坂村に於て兩道路が合一するを以て、第一線兩地區隊及砲兵が共に高坂村に進入するときは、茲に混雜を惹起する虞があるから、爲し得れば左地區隊を高坂村を通過させない様にするのがよい。之が爲左地區隊は下石井村から天神橋を通過して越邊川左岸に移り古凍を経て松山町東方地區に向つて退却させるのがよい。之は兵力一大隊であるから容易に實行し得る。

右地區隊は小堤、新町の線(含む)以西の地區から先づ高坂村に向つて退却させる。

下小坂に在る砲兵一中隊は左地區隊と共に、其他の主力は坂戸町を経て高坂に向ひ退却させる。

騎兵隊は、師團の右側を警戒しつゝ、今宿を経て菅谷方向に退却させる。

工兵隊は一部を以て砲兵の退却を援助し主力は先づ高坂に向つて退却させる。

野戰高射砲隊は、直に陣地を撤し高坂及松山町に到り防空に任せしむ。
師團長は第一線の退却を認めたる後高坂村に到り退却し來る部隊を部署する。
以上逐次説明したる諸件を部署として現はせば次の如くなる。

原 案

師團ノ退却部署

- 一 退却目標 松山町附近
- 二 行進目標 高坂村
但シ左地區隊ハ松山町東方地區
- 三 後方諸機關ノ撤退
 - 1 患者收容隊ハ直ニ高坂、松山町ヲ經テ宮前ニ向ヒ退却
 - 2 衛生隊ハ直ニ野戰病院ヲ閉鎖シ高坂、松山町ヲ經テ小原ニ向ツテ退却
 - 3 坂戸及塚越ニ在ル輜重ハ松山町、小原ヲ經テ御正ニ、其他ノ輜重ハ小前田、兒玉町間ニ向ツテ退却
 - 4 行李ハ大麻生、武川間ニ向ツテ退却

四 收容隊ノ任命

1 收容隊ノ編組

長 歩兵第三聯隊長 大佐某

歩兵第三聯隊(第一大隊欠)

騎兵一分隊

野砲兵第一聯隊第二大隊(吉田附近ニ位置セルモノ)

工兵一小隊

2 收容陣地

坂戸町附近

五 師團通信隊

直ニ通信線ヲ撤シ松山町ニ向ヒ退却

六 第一線諸隊ノ退却

- 1 右地區隊ハ十一時四十分退却行動ヲ開始シ小堤、新町ノ線(含ム)以西ノ地區ヲ高坂ニ向ヒ退却

- 2 左地區隊ハ十一時四十分退却行動ヲ開始シ下石井村、天神橋、古凍ヲ經テ松山町東方高地南脚ニ向ヒ退却
- 3 砲兵隊ハ收容砲兵隊ガ坂戸町附近ノ陣地ニ就クヤ(十一時五十五分ト豫定ス)逐次行動ヲ開始シ坂戸町ヲ經テ高坂ニ向ヒ退却
但シ在下小坂中隊ハ左地區隊ト共ニ退却セシム
- 4 騎兵隊ハ師團ノ右側ヲ警戒シツツ今宿ヲ經テ菅谷附近ニ向ヒ退却
- 5 工兵隊ハ一部ヲ以テ砲兵ノ退却ヲ援助シ主力ハ松山町ニ向ツテ退却
- 6 野戦高射砲隊ハ直ニ陣地ヲ撤シ高坂及松山町ニ到リ防空ニ任ズ
- 7 師團長ハ第一線部隊ノ退却運動ニ就キタルヲ認ムルヤ高坂村ニ到リ爾後ノ部署ヲ爲ス
次に收容隊ノ陣地占領法に關シ左の問題を課する。

第二問題

收容隊ノ陣地占領法

説明

師團の退却を察知するや敵が其主力を以て突進し來る方面は鐵道線路及其兩側地區で、柏原村

方面に前進中の敵が將來進出する方面は坂戸町南側或は西南側方面であらう。随つて坂戸方向に於ける配備は此判斷に基き決定する。即ち歩兵一大隊を以て片柳新田南側を占領させ、歩兵一中隊を以て下淺羽南側を占領させ、聯隊砲は坂戸南側に、砲兵大隊は坂戸南側及東側に於て藤金、脚折方面及下廣谷、五味ヶ谷方面を射撃し得る如く陣地を占領させ、比較的多くの豫備隊即ち歩兵大隊の一中隊を缺いたものを坂戸町北側附近に位置させる。

原案

收容隊ノ陣地占領

- 一 歩兵第二大隊ヲ以テ片柳新田東側ヨリ南側ヲ經テ坂戸停車場南方附近ニ互ル間ヲ占領セシム
- 二 歩兵一中隊ヲ以テ下淺羽南側附近ヲ占領セシム
- 三 聯隊砲ハ坂戸町南側附近ニ陣地ヲ占領セシム
- 四 野砲兵大隊ハ坂戸町南側及東側ニ於テ藤金、脚折方面及下廣谷、五味ヶ谷方面ヲ射撃シ得ル如ク陣地ヲ占領セシム
- 五 工兵隊ヲシテ砲兵ノ陣地占領ヲ援助セシム
- 六 歩兵第三大隊(一中隊欠)ヲ豫備トシテ坂戸町北側ニ位置セシム

六 收容隊長ハ坂戸町中央十字路ニ位置ス

情況第一

一 右地區隊長ハ步兵第一聯隊ヲ以テ吉田東側ヨリ天沼新田南側ニ互ル間、步兵第二聯隊(第三大隊欠)ヲ以テ小堤附近ヲ占領シ步兵第二聯隊第三大隊ヲ豫備トシテ上廣谷南側附近ニ位置セシメアリ

二 十一時十五分右地區隊長ハ上廣谷東側ニ於テ退却ニ關スル師團命令ヲ受領ス
以上の情況に基き右地區隊長の退却方法を問題として課する。

第三問題

右地區隊長ノ退却方法

説明

右地區隊長としては最も迅速に退却部署をせねばならぬ。之が爲豫備隊を以て直に現在地に於て上廣谷南側附近を占領させ、左翼方面步兵第二聯隊は聯隊の豫備を以て第一線を收容させる。而して右步兵第一聯隊は五味ヶ谷東側、石渡戸東側の線(含まず)以西の地區から、左步兵第二聯隊は其以東の地區から何れも高坂村に向つて退却させ、右地區隊長としては、同地に到り退却し

來る部隊を掌握し更に爾後の部署をする。

原案

右地區隊長ノ退却方法

- 一 豫備タル步兵第二聯隊第三大隊及步兵第一聯隊ノ聯隊砲並工兵小隊(收容隊長ハ步兵第二聯隊第三大隊長)ヲシテ上廣谷南側附近ヲ占領シテ第一線ヲ收容セシム
- 二 步兵第一聯隊及戰車隊ハ五味ヶ谷東側、石渡戸東側ノ線(含まズ)以西ノ地區ヨリ高坂村ニ向ヒ退却セシム
- 三 步兵第二聯隊(第三大隊欠)ハ五味ヶ谷東側、石渡戸東側ノ線(含む)以東、小堤東側、新町東側ノ線(含む)以西ノ地區ヲ高坂村ニ向ヒ退却セシム
- 四 騎兵小隊ハ步兵第一聯隊ノ右側ヲ警戒シツツ高坂村ニ向ヒ退却セシム
- 五 旅團長ハ第一線ノ退却ヲ認メタル後坂戸ヲ經テ高坂村南端ニ到リ退却シ來ル部隊ヲ部署ス

爾後の指導

第一線部隊退却行動を開始するや敵が直に追撃前進に移り、坂戸町附近に於ける收容陣地に對し攻撃し來り、之に對し師團長としては先づ高坂附近に退却し來つた步兵第二聯隊(第三大隊欠)

及野砲兵第三大隊をして高坂附近を占領して收容隊を收容させ、次いで退却し來る部隊を逐次松山町に向つて退却させる。

次いで松山町附近に於て師團は如何なる隊勢を取るべきやが問題となり、各一部を以て根古屋附近及松山南側附近を占領し、主力は松山町北側附近に集結して敵の突進に對しては何時でも反撃を爲し得る隊勢を取ることが價値ある研究問題である。

本想定の主要研究項目は

- 一 防禦ヨリ晝間退却戰闘ヲ實行スル指揮法
- 二 退却實施ノ順序及收容陣地並行進目標ノ決定

ハ 遭遇戦後の晝間退却

今回は遭遇戦後晝間退却を行ふ戰闘の爲想定作爲並其統裁法を研究しよう。

所要地圖

二十萬分一 東京、宇都宮、長野
五萬分一 川越、青梅

一 準備研究

遭遇戦後の退却戰闘指導の想定を作爲するに方り、其地域を現在使用しつゝある地圖に制限し

ても如何様にも仕組むことが出来る。例へば南北兩軍が坂戸町附近に於て衝突し北軍として熊谷方向に退却するにしても又南軍として所澤或は八王子方向に退却するにしても研究が出来る。又高麗川の線に於て衝突後小川町方向に退却する北軍として或は所澤方向に退却する南軍としても研究が出来る、又川越南方地區に於て衝突後松山方向に退却する北軍としても所澤或は府中方向に退却する南軍としても研究が出来る、又川越西南方入間川の線に於て衝突後小川方向に退却する北軍或は東京方向に退却する南軍としても研究が出来る。

今茲に南北兩軍が扇町屋附近で衝突したとして、南軍が八王子方向に退却するものとしたならば、扇町屋南方には山口貯水池及村山貯水池を含む錯雜地があつて、退却には相當困難である。此困難なる所が即ち研究價値の存する所である。それで南北兩軍が扇町屋附近に於て遭遇戦を惹起し情況上南軍が退却するに至る想定を作爲し、之に依つて退却戰闘の指導法を研究することにする。

先づ南北兩軍が扇町屋附近に於て衝突し、南軍が退却の餘儀なきに至るのは、全般の情況を如何に構成すればよいかの研究から始めることにする。

今假りに中山道以東に作戰する主力軍に策應する任務を以て八王子附近から北進した南軍一兵

團が、松山方向から南下した敵と扇町屋附近に衝突し、主力軍も東京以東の地區から北進して敵と大宮町、粕壁町の線附近で衝突して決戦に至らないで退却に決したか、或は相當交戦後東京以東の地區に退却することになり、之に策應する扇町屋附近の一兵團も退却に決したとしたなれば、成立しさうであるが、主力軍が退却するからとて扇町屋附近の一兵團が直に退却せねばならぬこともなく、又扇町屋方面の兵團が當面の敵情上退却の餘儀なきに至つたとすれば、敵が此方面に相當大なる兵力を用ひたのであるから、主力軍方面の敵を牽制したわけで、それだけ主力軍が退却の餘儀なきに至つたとすれば不自然であり、敵は兩方面に於て絶對多數を占めたとすれば、夫れ程優勢な敵に對して南軍は兩方面に於て何故攻勢を取つたかとの疑問を生ずる。これも兩方面共彼我衝突するまでは全く敵の兵力が判らなかつたとすれば夫れまでであるが、苟も初めて攻勢前進を起すに方り其方面に使用し得る敵の兵力の最大限を豫期しなかつたことは不用意であるし、結局退却戦の情況を構成せんが爲主力軍と一部とがそこまで出て行つたと云ふことになつて、正しく戦理に合したものと謂へない。

そこで敵軍は東北地方から宇都宮附近に集合中にして之に對する西軍は長野地方から利根川上流地區に向つて前進中で、其作戦を容易ならしむべき任務を有する西軍一兵團が甲府方面より前

進して行田又は熊谷附近から南下した敵と扇町屋附近に於て衝突し、更に敵は其方面に兵力を増加しつゝあるので西軍兵團は一時決戦を避け八王子附近に退却するに決したとしたなれば、漸次合理的となる。即ち敵は此際内線に立つて一部を以て八王子方面に進出した我軍に當て主力を以て高崎及前橋附近に進出する西軍主力に對し作戦するか或は一部を高崎方面に當て相當大なる兵力を以て八王子附近に進出した西軍の一部を先づ撃破するの策に出るであらう。後者の場合に八王子方面に進出した兵團は成るべく多くの敵を其方面に牽制抑留することに依つて利根川上流軍地區への主力軍の進出を容易ならしめ得るのであるから、敵は相當大なる兵力を八王子方面の西軍に向けることも合理的であり、又西軍兵團としては成るべく多くの敵兵力を八王子方面に牽制して之を抑留すると共に、成るべく損害を受くることなく保全して居て、敵が其大部を擧げて利根川上流地區に使用せんとする場合には進んで之を攻撃して本軍の進出を容易ならしめることが至當で、隨つて優勢の敵に對しては扇町屋附近に於ける決戦を避けて八王子方面に退却することが合理的となるわけである。

次に扇町屋附近に於て衝突したる時刻を何時頃とすべきや、假りに退却に決した時刻を十二時頃として夫より遡つて展開後如何なる程度まで戦闘が進捗したかを顧慮せねばならぬ。展開後未

だ交戦に至らないで諸情況上退却に決したとすれば、十二時頃展開終つたとすれば宜しく、約二時間戦闘を交へたとすれば十時に展開終つたとすれば宜しい。十時に展開終る爲には其長徑十四五軒とすれば七時頃其先頭が扇町屋附近に達したとせねばならぬ。之が八王子附近から前進したとすれば二時頃八王子附近を出發したことになる。これも必要とあれば二時頃出發するのは決して無理でないからそれでよろしい。更に交戦時間が長かつたとするには前夜彼我接觸展開して今朝から戦闘が開始されたと設想してもよろしい。

南軍の兵團を一師團として歩兵一聯隊を基幹とする左縦隊を以て箱根ヶ崎を経て前進し、其他の主力を右縦隊として所澤を経て前進し、松山方向から南下した敵と扇町屋附近に於て衝突するに方り左縦隊であつた歩兵第三聯隊を以て善藏新田西北四又路附近から扇町屋を経て其西方高地に互り展開し、歩兵第一旅團を以て善藏新田附近から南入會を経て下水野附近に互り展開し、歩兵第四聯隊を豫備として北岩岡附近に控置し、敵は下新田附近から入間川町南方地區を経て黒須西方地區に互り展開し、右翼方面は歩兵重火器戰鬥が開始されて居る情況に於て敵第一線の兵力は少くも一師團を下らない上に更に歩兵三、四大隊と思はるゝ敵が下奥富（入間川町東北方約三軒）附近から堀兼村方向に移動中である情況の下に師團長としての決心を問題として課し、此情

況に於て退却するや否やを研究し、更に情況を與へて相當困難なる情況下に退却戰鬥の指導法を研究させる。

地形は大體前想定と同様とし、敵の素質は相當優良なものとして研究することにする。但し敵の素質常に我と同等位として研究するときは遂に夫れが習慣となつて、實際の場合に支那兵の雜軍の如き敵に對しても我と同等に考へて慎重なる態度を取る弊に陥り易く、又敵の素質を劣等として研究するときは稍、有爲なる敵に對して不覺を取ることがあるから、戰術指導者としては此點に留意し、敵の素質に應じて我の取るべき策の異なる點を被教育者に十分理解を與へることが、戰術指導上注意を要する一事項である。

二 想定作爲

以上逐次研究したる所を想定に現せば次の如くなる。

想 定(第二十三)

- 一 東軍ハ東北地方ヨリ宇都宮附近ニ集合中ニシテ西軍主力(四師團ヲ基幹トス)ハ長野地方ヨリ上毛平地ニ向ヒ前進中ナリ
- 二 軍主力ノ作戰ヲ容易ナラシムベキ任務ヲ有スル西軍獨立第一師團ハ甲府方面ヨリ東進シ一月

十日二縱隊トナリ所澤及箱根ヶ崎ヲ經テ北進シ行田附近ヨリ松山町ヲ經テ南進セシ敵ト扇町屋附近ニ於テ遭遇戰ヲ惹起シ十二時敵ノ第一線ハ入間川町東南下新田附近ヨリ入間川町南方附近ヲ經テ黒須西方地區ニ互ル線ニ在リテ師團ノ第一線ハ下水野附近ヨリ南入會、扇町屋附近ヲ經テ其西方高地ニ互ル線ニ展開シ既ニ右翼方面ニ於テハ步兵重火器戰鬪開始サレ處々砲聲モ轟ク此時マデニ師團長ノ知り得タル情況次ノ如シ

1 敵主力軍ハ今日早朝足利市、熊谷市ノ線ヲ發シ西進セリ又宇都宮、大宮間ハ鐵道輸送行ハレツツアリ

2 西軍ノ二箇師團ハ明十六日午前中ニ前橋、高崎ノ線ニ進出スル筈

3 當面敵ノ第一線ハ步兵十二、三大隊ヲ下ラザルモノノ如ク尙步兵約三、四大隊ハ十一時三十分頃下奥富(入間川町東北方約三軒)附近ヨリ堀兼村方向ニ移動ヲ開始セリ

三 獨立第一師團ノ編組並其配置左ノ如シ

1 右翼隊

長 步兵第一旅團長少將某

步兵第一旅團(第一、第二聯隊)

戰車隊一隊

騎兵一小隊

工兵一小隊

下水野附近ヨリ善藏新田附近ニ互ル間ニ展開

2 左翼隊

長 步兵第二旅團長少將某

步兵第三聯隊

騎兵一分隊

工兵一小隊

右翼線ノ左翼ヨリ扇町屋附近ヲ經テ其西方高地ニ互ル間ニ展開

兩翼隊ノ戰鬪地域ハ藤澤村役場、善藏新田西端、廣瀬東端、高萩東端ヲ連ヌル線(線上ハ右翼隊ニ屬ス)

3 砲兵隊

野砲兵第一聯隊

- 4 主力ヲ以テ南入會附近、一部(第三大隊)ヲ以テ扇町屋附近ニ陣地ヲ占領ス
騎兵第一聯隊(一小隊ト一分隊欠)
- 4 堀兼村附近ニ在リテ師團ノ右側ヲ警戒ス
- 5 豫備隊
- 步兵第四聯隊
- 工兵第一聯隊(二小隊欠)
- 6 北岩岡附近ニ在リ但シ工兵隊ハ其一部ヲ以テ砲兵ノ陣地占領ヲ援助シツツアリ
師團直轄部隊
- 野戰高射砲第一乃至第三隊
- 主力ハ藤澤附近、一部ハ扇町屋附近ニ在リテ防空ニ任ズ
- 7 師團通信隊
- 師團司令部ヨリ各直轄部隊ノ位置ニ通信網ヲ架設シツツアリ
- 8 師團司令部
- 北野新田東南端ニ在リ

- 9 後方諸機關
 - 患者收容隊 林新田
 - 野戰病院 一箇ハ所澤(第一)、一箇ハ二本木(第二)
 - 彈藥補給ノ輜重 所澤及箱根ヶ崎
 - 其他ノ輜重 八王子、上柵田間
 - 行李 八王子ニ集合
 - 四 地形其他ニ就テ
 - 1 五萬分一圖上ノ實線路ハ野砲ヲ通ズ
 - 2 平地並平地ニ近キ高地斜面ノ森林ハ大部伐採セラレ桑ノ小樹或ハ畑地トナリ運動通視ニ支障ナシ
 - 3 部落、市街建築物ノ構造ハ滿洲ノモノニ同シ
 - 4 敵軍ノ編制、裝備ハ優良ニシテ素質モ亦我軍ニ劣ラズ
 - 5 西軍飛行隊ノ飛行場ハ上田市ニ在リテ師團ノ要求ニ應ジ協力セラル
- 三 指導統裁法

以上の想定に基き次の問題を課する。

第一問題

十二時ニ於ケル師團長ノ決心

説明

師團當面の敵の兵力は其第一線に於て十二、三大隊を下らざる様であり、更に三、四大隊の敵が下奥富から堀兼村方向に移動中であるので、其兵力少くも一師團半位ある様である。そこで今より決戦を避けて退却に就く案と依然攻撃を續行する案とあらう。統裁法としては演習員は何等かの徴候により退却戦闘を指導することを想像して所謂演習判断を以て決心をすることが往々あるから、其弊を矯正する爲にも本問題の如きを提供する必要がある。即ち本情況に於ては退却など考へる必要は毫もない。彼我兵力の若干の差の如きは退却の理由とはならない。師團の豫備隊を以て其準備を爲すべきである。

(100)

原案

決心

師團ハ豫定ノ如ク攻撃ヲ決行セントス

説明

次いで退却の餘儀なきに至る情況を與へる。其伏線として大宮まで敵が鐵道輸送を續行して居ることを想定中に示して置いたが、其敵が大宮—古市場街道を前進中で十一時其先頭が古市場に達したとしたならば、十二時には龜久保附近に達して居る。其兵力を一旅團位としたならば現在の師團の豫備隊を以ては堀兼村方向に移動中の敵に當らせ得るだけで、新なる敵に對する餘力がない。而して其敵の戦場に現出するのは一時間後に迫つて居るから、今直に退却の決心をして其處置を取らねばならぬ。此情況を與へ問題としないで情況中退却に決したとして退却に關する處置を次の問題をして課する。即ち

情況第一

- 一 十二時十分師團長ハ騎兵將校斥候ヨリ次ノ報告ヲ受領ス
歩兵六、七大隊ヲ基幹トスル敵ノ一縱隊ハ大宮—古市場道ヲ急進中ニシテ十一時其先頭古市場ニ達セリ
- 二 前報告ニ基キ師團ハ決戦ヲ避ケ直ニ八王子附近ニ向ヒ退却スルニ決ス

第二問題

(101)

師團退却ノ爲ノ處置

但シ命令ヲ以テ現ハスベシ

説明

此際師團が何れの方向に退却するやが先決問題である。所澤方面と箱根ヶ崎方面との兩方面に退却し得るならば退却實行が比較的容易であるが、第一線部隊の所澤方面への退却は恐らく不可能であらう。即ち後方諸機關の退却處置を爲し第一線が退却行動に就いてもよい様になるのは、今より早くも四、五十分乃至一時間を要するであらう、然るときは既に龜久保附近に達して居る敵は下富附近に達し得る状態で、此敵の方が先へ所澤に到着し得る。又此敵の一部若は大部は直路所澤に向ひ前進して我が退路を遮斷することに努めるであらう。それで第一線部隊の所澤方面への退却は到底出来ない。夫故師團の大部は箱根ヶ崎方向に退却せねばならぬ。これが本退却實行の最も苦しい所である。

退却部署の順序として先づ、
後方諸機關を撤退させる。即ち

患者收容隊は、箱根ヶ崎を経て八王子東方大和田へ

野戦病院 所澤に在るものは八王子東側へ、二本木に在るものは八王子北側へ

彈藥補給中の輜重は八王子、上栲田間に

其他の輜重は千木良以西に

夫々退却させ、

行李は現在地に在らしめる。

次に退却目標と行進目標であるが、

退却目標は既に決した八王子附近

行進目標は間違を生じない最も明瞭な地點がよいから、此際箱根ヶ崎村を適當とする。

次に收容陣地と收容隊の決定である。

收容隊に充つべき師團豫備隊は右翼後北岩岡附近に在るので、是れ亦最も不便である。之をして例へば二本木附近を占領させるとしたならば、同地まで約八軒あるから少くも一時間と十分位は要する。夫れが陣地に到着した頃第一線を撤退させようとする、其間益々敵の近迫を受けて退却困難となる。夫故取敢へず砲兵を收容陣地に就かせ、それが陣地に到着した頃第一線を撤退させる様にするより致方ない。何れに在る砲兵を收容砲兵とするを適當とするかと云へば、收容陣地

を二本木附近とすれば扇町屋附近の砲兵は最も近いが、同方面の砲兵を全部同時に撤退することは不利である。又南入曾附近の主力砲兵は一部を抜き抜くには都合がよいが、距離は稍、遠い。併し二軒位の差は時間にしては約十分であるから、大した問題ではない。それで第一線戦團に影響の少い主力砲兵から抜き抜くことにする。歩兵は豫備隊を充てるが、其到着を待たないで第一線を撤退することにする。但し所澤方面は警戒の爲一部を其方面に退却させる必要がある。即ち歩兵一大隊に聯隊砲を配屬して所澤附近を占領して一時師團の右側を警戒し、後日野臺に向つて退却させ、其他の聯隊主力を收容隊とする。即ち

收容陣地は 二本木附近

收容部隊は 歩兵第四聯隊長の指揮する

歩兵第四聯隊(第一大隊と聯隊砲欠)

騎兵一分隊

野砲兵一大隊(南入曾附近に在るもの)

工兵一小隊

歩兵第四聯隊の一大隊及聯隊砲は所澤附近を占領して右側の警戒に任ず

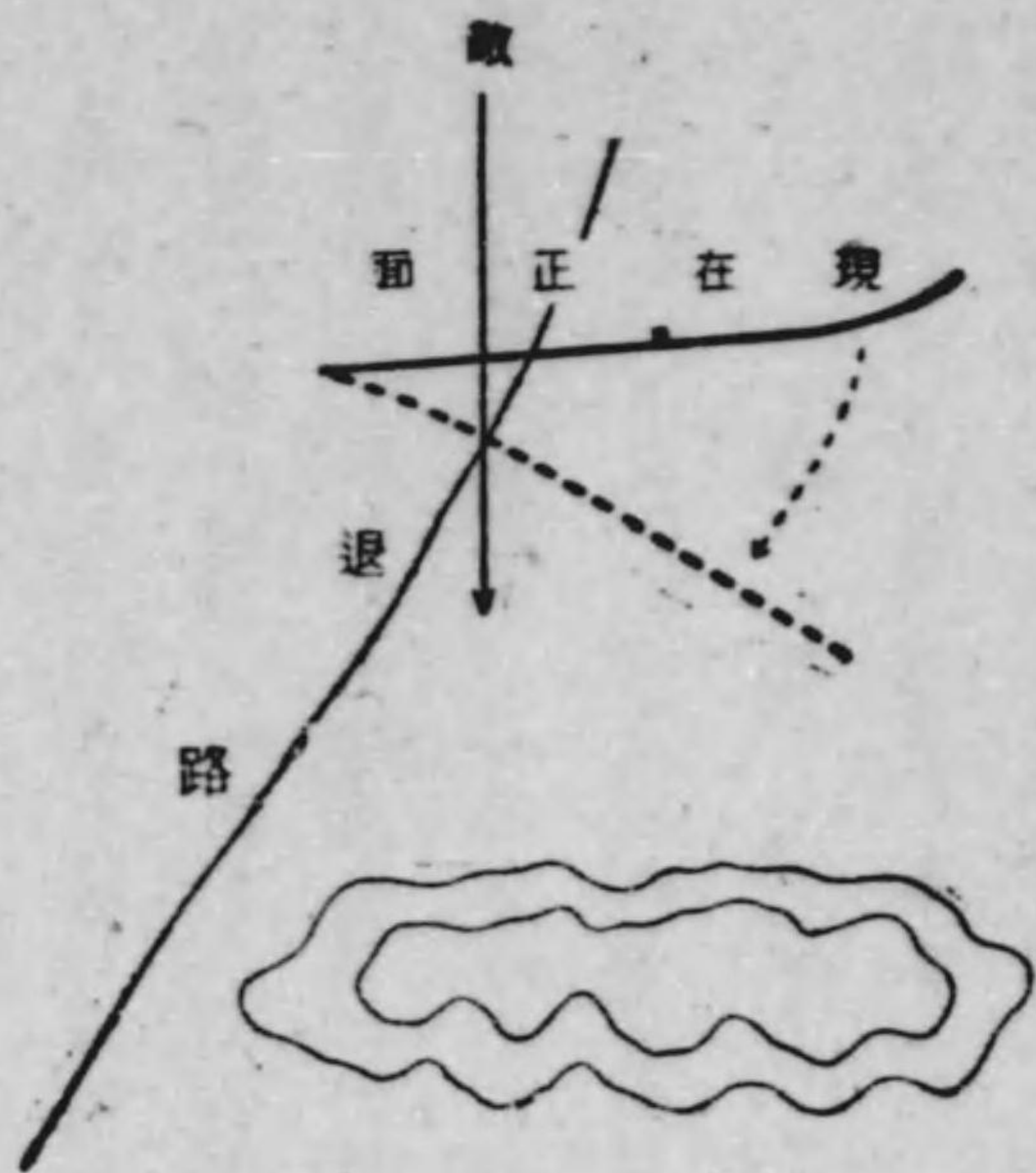
次に第一線部隊の退却方法である。

第一線部隊は全線同時に退却出来れば最もよいのであるが、夫れが出来ない場合即ち戦況、地形等の關係に依り某部隊をして比較的長く敵を抗拒せしめることを要することがある。此場合全線同時に撤退させたなれば、左翼方面の敵の突進に依つては右翼方面が退却出来ない様になるかも知れない。即ち圖に示す如く現在の正面から斜方向に退却するのであるから、全線同時に退却したなれば右翼方面は村山貯水池附近の錯雑地に壓迫されて退却が出来ないことになる虞がある。

それで先づ右翼から撤退させ次いで左翼に及ぶ様にして、理想的に云へば點線で示す如く退路と直角の正面となつて退却出来ればよいのである。

兩翼隊の退却地域は、善藏新田、二本木を連ぬる線(線上は右翼隊に屬す)とする。

砲兵隊は、收容砲兵が陣地に著くや南入曾—二本木道及扇町屋—二本木道を先づ箱根ヶ崎に向つて退却させる。



高射砲隊は、交互に後退し第一線附近、收容陣地附近、拜島附近に於て逐次防空に任じさせる。
騎兵隊は、敵と接觸を保持しつつ、右側を警戒し逐次退却せしめる。
工兵隊は、一部を以て砲兵の退却を援助し主力は先づ箱根ヶ崎に向ひ退却させる。
師團長は第一線部隊の退却を認めたる後箱根ヶ崎に到り退却し來る部隊を部署する。
以上逐次決定したる處置を命令を以て現はせば次の如くなる。

原案

退却部署の命令

1 後方諸機關ニ與フル命令

獨立第一師團命令 一月十日十二時十五分
北野新田東南端

- 一 當面ノ敵ハ少クモ歩兵十五、六大隊ヲ下ラザルモノノ如ク又歩兵六、七大隊ヲ基幹トスル敵ノ一縱隊ハ大宮—古市場道ヲ急進中ニシテ十一時其先頭古市場ニ達セリ
- 二 師團ハ今ヨリ八王子附近ニ向ヒ退却セントス
- 三 患者收容隊ハ直ニ閉鎖シ箱根ヶ崎ヲ經テ八王子東方大和田ニ向ヒ退却スベシ
- 四 衛生隊ハ直チニ野戰病院ヲ閉鎖シ八王子北側ニ向ヒ退却スベシ

- 五 所澤及箱根ヶ崎ニ在ル輻重ハ八王子、上柵田間ニ、其他ハ千木良以西ニ退却スベシ
- 六 行李ハ現在地(八王子)ニ在ルベシ
- 七 予ハ暫ク現在地ニ在リ後箱根ヶ崎ニ到ル

師團長 某 中 將

傳達法 命令受領者ニ口達筆記セシム

2 收容隊ニ與フル命令

獨立第一師團命令 一月十日十二時二十分
北野新田東南端

一 前命令ニ同ジ

- 二 步兵第四聯隊長ハ左記部隊ヲ指揮シ收容隊トナリ二本木附近ヲ占領シテ師團ノ退却ヲ收容スベシ

步兵第四聯隊(第一大隊及聯隊砲欠)

騎兵一分隊

野砲兵一大隊(南入曾附近ニ在ルモノ)

工兵一小隊

但野砲大隊ハ成ルベク速ニ陣地ニ就クベシ

四 歩兵第四聯隊第一大隊長ハ部下大隊、聯隊砲及騎兵一分隊ヲ指揮シ右側衛トナリ所澤―八王子道ヲ退却スル後方諸部隊ノ退却ヲ掩護スベシ
騎兵隊ト連絡スベシ

五 予ハ暫ク現在地ニ在リ後箱根ヶ崎ヲ經テ日野臺ニ到ル

傳達法、歩兵第四聯隊長ニハ參謀ヲシテ傳達セシメ其他ニハ命令受領者ニ口達筆記セシム

3 第一線諸隊ニ與フル命令

獨立第一師團命令 一月十日十二時二十分
北野新田東南

一 前命令ニ同ジ

二 師團ハ今ヨリ八王子附近ニ向ヒ退却セントス

歩兵第四聯隊長ノ指揮スル同聯隊主力、騎兵一分隊、野砲兵一大隊、工兵一小隊ハ收容隊トナリ二本木附近ヲ占領シテ師團ノ退却ヲ收容ス

歩兵第四聯隊第一大隊及同聯隊砲ハ右側衛トナリ所澤―日野道ヲ退却ス

騎兵隊ハ師團ノ右側ヲ警戒シツツ府中方向ニ退却ス

三 右翼隊ハ十三時第一線部隊退却行動ヲ開始シ善藏新田、二本木ヲ連ヌル線(含ム)以東ノ地區ヲ箱根ヶ崎ニ向ヒ退却スベシ

四 左翼隊ハ十三時十分第一線部隊退却行動ヲ開始シ善藏新田、二本木ヲ連ヌル線(含マズ)以西ノ地區ヲ箱根ヶ崎ニ向ヒ退却スベシ

五 砲兵隊ハ收容隊ガ其陣地ニ就クヤ逐次現陣地ヲ撤シ箱根ヶ崎ニ向ヒ退却スベシ

六 高射砲隊ハ交互ニ退却シ現第一線附近、收容陣地附近及拜島附近ニ於テ防空ニ任ズベシ

七 工兵隊ハ一部ヲ以テ砲兵ノ退却ヲ援助シ主力ハ箱根ヶ崎ニ向ヒ退却スベシ

八 予ハ暫ク現在地ニ在リ後箱根ヶ崎ニ到ル

師團長 中 將 某

傳達法 各隊命令受領者ニ口達筆記セシム

4 通信隊ニ與フル命令

獨立第一師團命令 一月十日十二時二十五分
北野新田東南

一、一

- 二 前命令ニ同ジ
- 三 通信隊ハ直ニ通信線ヲ撤シ箱根ヶ崎ニ向ヒ退却スベシ
- 四 予ハ暫ク現在地ニ在リ後箱根ヶ崎ニ到ル

師團長 某 中 將

傳達法 通信主任參謀ヨリ通信隊長ニ口達ス
5 騎兵隊ニ與フル命令

獨立第一師團命令 一月十日十二時三十分
北野新田東南端

- 一 前命令ニ同ジ
- 二 師團ハ今ヨリ八王子附近ニ向ヒ退却セントス
歩兵第四聯隊長ノ指揮スル同聯隊主力、騎兵一分隊、野砲兵一大隊、工兵一小隊ハ收容隊トナ
リ二本木附近ヲ占領シテ師團ノ退却ヲ收容ス
歩兵第四聯隊第一大隊及同聯隊砲ハ右側衛トナリ所澤―日野道ヲ退却ス
第一線諸隊ハ十三時ヨリ退却ヲ開始スル筈
- 三 騎兵聯隊ハ師團ノ右側ヲ警戒シツツ府中方向ニ退却スベシ

(110)

- 特ニ右側衛ト連絡スベシ
- 四 予ハ箱根ヶ崎ヲ經テ日野臺ニ到ル

師團長 某 中 將

傳達法 筆記シタルモノヲ送付ス

情況第二

- 一 右翼隊ハ歩兵第一聯隊ヲ以テ下水野ヨリ上新田ニ互ル間、歩兵第二聯隊(第三大隊欠)ヲ以テ
其左翼ヨリ善藏新田ニ互ル間ニ展開シ歩兵第二聯隊第三大隊及戰車隊ヲ豫備隊トシテ北田東北
側ニ控置シ右翼隊長ハ北田西部十字路ニ在リ
- 二 十二時四十五分右翼隊長ハ退却ニ關スル師團命令ヲ受領ス
- 三 下新田西方一帶ニ對シ我が砲兵ハ猛烈ナル砲撃ヲ爲シツツアリ又敵ノ砲兵ハ入間川町方面ヨ
リ北入曾東側及西側附近ニ向ヒ砲撃シツツアリテ彼我ノ機關銃聲漸次激烈ノ度ヲ加ヘツツアリ
以上の情況に基き次の問題を課する。

第三問題

右翼隊ノ退却部署

(111)

説明

此際我が第一線の退却徴候を敵に察知されたなれば、敵は恐らく猛烈に突進し来るであらう。それで最初から逐次に收容することを計畫せねばならぬ。之が爲現在の豫備隊を以て北田北側附近を占領させ、其占領終るや第一線部隊に退却を命じ右翼聯隊の先づ退却し來りたる部隊を以て三ヶ島新田附近を占領させて北田附近の收容隊を收容し、爾後先づ二本木南側に向つて退却させる。即ち

原案

右翼隊長ノ退却部署

- 一 豫備タル歩兵第二聯隊第三大隊及戰車隊ヲ以テ北田北側附近ヲ占領シテ第一線ノ退却ヲ收容セシム
- 二 右收容隊ガ配備ニ就クヤ歩兵第一聯隊ハ上新田、上藤澤、北中野ノ線(含ム)以東ノ地區ヲ二本木南側ニ向ヒ退却セシム
但シ大隊長ノ指揮スル歩兵約半大隊ヲ三ヶ島新田ニ殘置シ右翼隊長ノ直轄ト爲サシム
- 三 歩兵第二聯隊(第三大隊欠)ハ右聯隊ニ連繫シ上新田、上藤澤、北中野ノ線(含マズ)以西善藏

新田、二本木ノ線(含ム)以東ノ地區ヲ二本木ニ向ヒ退却セシム

- 四 右翼隊長ハ三ヶ島新田ニ到リ退却シ來ル部隊中直轄部隊ト爲スベキ大隊ニ三ヶ島新田附近ノ占領ヲ命ジ其占領終ルヤ北田北側占領ノ收容隊ニ退却ヲ命ジ其部隊ガ扇町屋―所澤道以西ニ退却スルヤ三ヶ島新田占領部隊ニ二本木南側ニ向ツテ退却ヲ命ジ其退却ヲ認ムルヤ右翼隊長ハ二本木ニ到リ退却シ來ル部隊ヲ逐次箱根ヶ崎ニ向ツテ退却セシメ師團長ノ部署ヲ受ク
- 五 以上ノ如ク豫定スルモ敵ノ突進状態ニ依ツテハ一部隊ヲ以テ逆襲セシメ其機ヲ利用シテ離脱ヲ圖ルコトアリ

爾後の指導

左翼隊の退却方法も研究し、次いで師團長が箱根ヶ崎に到り、退却し來る部隊を部署し後衛を設け收容隊を收容して多摩川右岸高地に向つて退却させる。

右側衛は所澤附近を占領するや古市場方面の敵の先頭近く前方に現出すべく爾後日野臺に向つて退却する。

以上を以て退却戰鬪の指導法を終るが、退却後に於て好機を捉へ攻勢に轉ずる情況を構成し退却は決して敗退ではない將來大に伸びんとする一階段であるとの趣旨を十分教育することが必要

である。之が爲日野臺上に於て思ひ切つた決戦防禦を爲すのも可であり、又敵が多摩川の線に近く近迫したる際夜暗を利用して師團主力を以て左翼秋留方面に移動して翌朝敵の右側に向ひ攻勢に轉ずること、又嘗て想定第四に於て指導した如き方法を以て退却後積極的行動に出づることも指導上著眼すべきである。

本想定の主要研究項目は

- 一、遭遇戦後晝間退却戦闘ノ指導法
- 二、狀況困難ナル場合ニ於ケル第一線部隊ノ退却法

ニ 遭遇戦後に於ける困難なる退却

所要地圖 二十萬分一 宇都宮、東京
五萬分一 川越、青梅、大宮、東京西北部

一 準備研究

今回は、遭遇戦後更に困難なる情況に於て晝間退却する方法を研究する爲の想定作爲及其指導方法を研究して見よう。

遭遇戦後退却の餘儀なきに至る想定を仕組むのに、其想定たるや架空的でなくして如何にも實

際に起りさうな情況を構成するには、何かそこに一つの據るべきヒントを掴まねばならぬ。それで我が國軍として相當大なる部隊を以て退却戦闘を實施したのは、日露戦に於ける彼の萬寶山附近の退却戦闘である。萬寶山附近で山田旅團が何故退却せねばならぬ様になつたかと云へば、全般の線よりも山田旅團が遙かに突出したからである。彼の時に山田旅團を退却させないで何等か他に施すべき方法がなかつたかとの研究は別問題として、戦線に於ける斯の如き一部の突出は、其儘放置すると其部隊は全く敵の包圍に陥つて收拾することの圖案ない結果に陥るから、其突出した線を後方に退けて全般の隊勢を整へる必要が生ずる。斯かる場合を設想して現在使用しつゝある地圖に於て之に適する地點を見出して之を想定作爲の端緒とする。

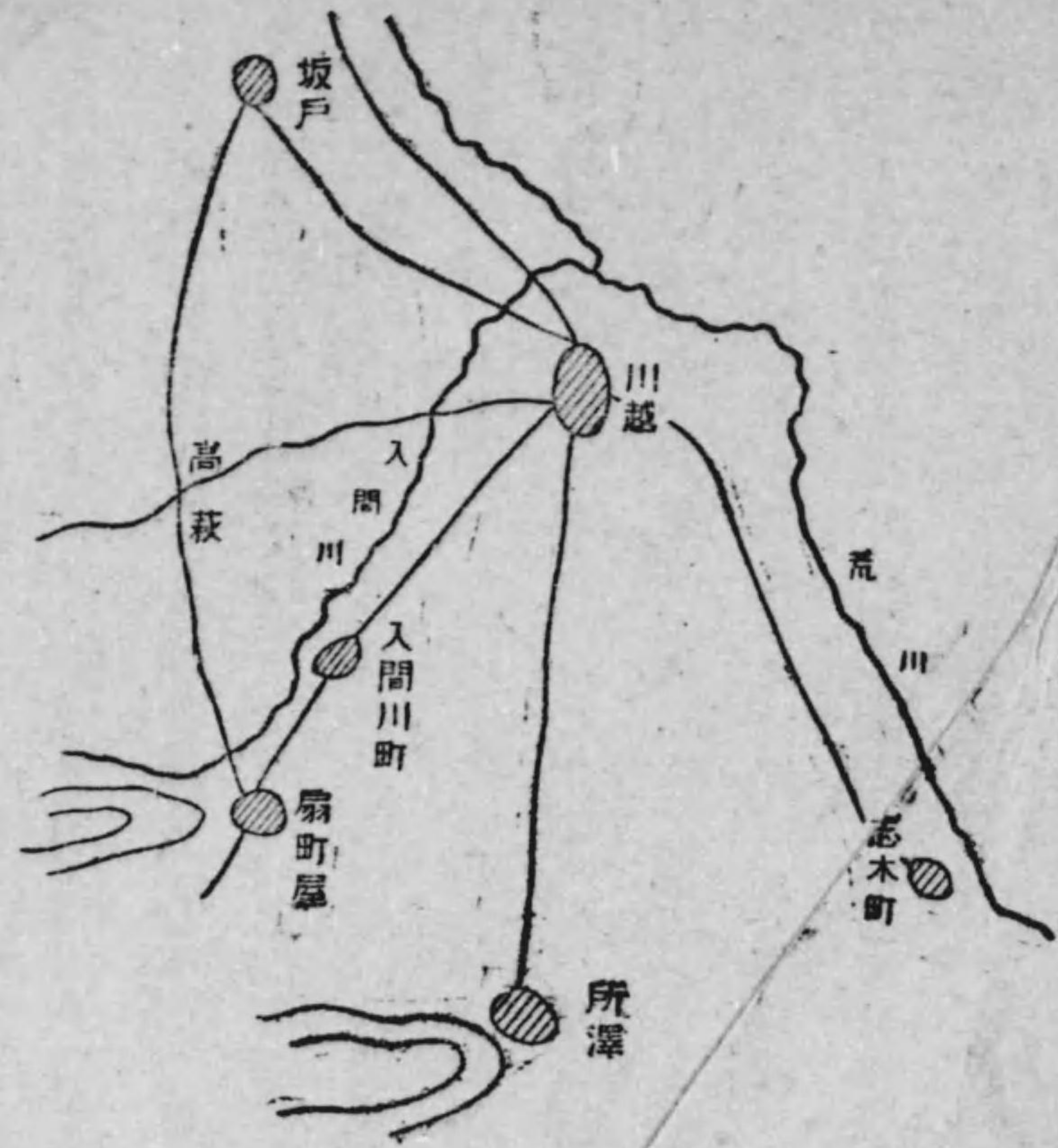
之が爲、何れの地點に於ても、兩軍衝突して其一方軍の一部が突出した爲に夫れを後退させるとしたなれば成立しさうであるが、全般の地形が之に適するや否やを吟味せねばならぬ。例へば南北兩軍が越生町、坂戸町、伊草の線に於て衝突して北軍の一部中央部が高萩附近まで進出し、其左右兩方面が越生町及伊草方面に於て戦況進展せず、茲に於て中央部高萩附近に突出した部隊を後退させるとしたなれば成立しないことはない。然し北軍の右翼方面が越生南方地區に在つて之に對する南軍が高麗川右岸高地附近に在りとしたなれば、高萩附近に進出した部隊が敵の此部

隊に對して大なる脅威を與へて居る。見様に依つては高萩附近に進出した部隊は越生附近の友軍と相待つて高麗川右岸の敵の背後に迫つて居るのであるから、高萩附近の北軍は退却する必要はない、此儘生存して居りさへすれば高麗川右岸の敵は自然に敗退せざるを得ない關係になる。それで突出した一部は、不利の隊勢に陥つたのでなくして、有利の隊勢に在るとも謂ひ得る。之に對して其突出したる一部隊を退却させることを合法的ならしめる爲め高萩方面の敵が優勢で突出したる北軍の一部は將に其包圍に陥らんとしつゝあるとすれば、成立しないことはない。然るときは其兵力たるや三、四大隊位の一部とせねばならぬ。即ち地域の關係上一師團位とすると高麗川右岸の敵の後方連絡線を全く遮斷して居ることになるから、小なる部隊とせねばならぬ。小なる部隊とすれば退却は左程困難でない。即ち前方に進出したる一部を後退させるのである。それで斯かる場合に於ける小部隊の退却法を研究しようとするならばこれで成立する。然しそれならば強ひて斯くの如き左右關係を設けなくて、師團より先遣したる一支隊の退却戦法の研究とか或は有力なる前進部隊の退却の方法研究に依つて前方に在る一部の退却方法の研究は出来ないことはない。茲に一師團に近き相當大なる部隊が遭遇戦後困難なる退却方法を研究しようとするには適しないことになる。約言すれば此研究目的の爲に高萩附近と高麗川附近との地域が狭過ぎると

云ふことになる。

それでは更に廣い地域を求めて其處に於て兩軍が衝突して一方軍の一部が突出した様にすればよいかと云へば、白紙戦術ならばそれでもよいが、實際の地形に當てはめるには夫れが自然に起り得る様な結構でなければならぬ。凡そ限られたる地域内に於て構成せんとする想定眼目が決まつて、之を當てはめて而かも其地形が其想定を構成せんが爲に出來て居る如く感ぜらるゝ様に仕組むのが、全く想定作爲者の手腕に依るもので、結局戦術眼から來るのである。

そこで川越附近の地形を見ると、圖に示す如く所澤、川越間の臺地は入間川と荒川



とに依つて包まれ北方に突出して居る。それで志木町、扇町屋の線に於て南北兩軍が衝突したる

場合に、志木町方面は兩軍共大なる兵力を使用しないで北軍は扇町屋方面に主力を用ひ南軍は所澤—川越街道方面に比較的多くの兵力を用ふることは有り得ることである。其場合志木町方面に於ては兩軍共兵力大差なく戦闘交綏し、扇町屋方面に於ては南軍は辛うじて其附近を保持しあり、所澤—川越街道方面に於ては南軍の戦況有利に發展し川越南方地區まで押しつけたが、相當有力なる敵が坂戸方面から川越方向及川越、入間川町中間地區方面に向つて前進しつゝある情況としたならば、川越附近に突出した部隊が將來戦機の發展見込なく、而も時刻の経過と共に益々苦境に陥ることになるから、そこで志木町、扇町屋の線まで後退させて戦線の整理、立直しをやらうとしたならば、川越南方地區まで進出したる部隊は直に後退せねばならぬことになつて、茲に研究目的に合致することになる。而して南軍の兵力は二師團半位の軍であつて、扇町屋方面には一部を缺きたる師團、所澤—川越街道方面には完全なる師團、志木町方面には旅團を用ひ、扇町屋方面の師團から缺いだ一部を軍豫備として所澤方面に控置し、敵は若干優勢の心算にて遭遇戦を決行したのであるが、事實は扇町屋方面に一師團半位、川越方面には一師團、志木町方面には一旅團位を用ひ、約一師團近い第二線兵團を坂戸附近に持つて居たものとすれば、南軍の突出部隊を後退させることは合理的となる。然らば遡つて夫れ程の優勢の敵に對して何故遭遇戦を決

行したかとの疑問を生ずるが、敵の兵力は何時も衝突前にさうはつきり判明するものでなく、若干優勢であらうと思ふたのが豫想外に優勢であることも屢々起り、又國軍としては相當有爲なる敵に對しても一倍半乃至二倍の敵に對して常に攻勢を採る如く指導せねばならぬ、現に支那事變に於て敵軍の素質上常に數倍の敵に對して攻勢を採つて居るが、其中に於ても豫想外の優勢なる敵に對抗し随分苦戦に陥つて居るものもある。

彼我兵力の關係を以上述べた如く設想して、其關係に於て如何に遭遇戦を指導するやは別問題であつて、此南軍のやり方を理想的と云ふのでなくして、變化極りなき部署法中これも一方法であつて、退却戦闘の情況を構成せんが爲に甚しく不合理なる部署法を採つたのでないと云ふ程度であることは勿論である。

荒川右岸地區に於ける軍の狀況は、前述の如くであるとして、次に全般關係を如何にするやの研究を要する。即ち荒川右岸のみに於て南北數師團の軍が作戰することは、何等かの條件がなければ不合理である。例へば荒川左岸地區は中立地帯で兩軍共兵力を使用してはならぬとすれば成立しないことはないが、然らば北軍は熊谷附近荒川右岸に進出するまでは何れを通過したかと云へば、荒川左岸中山道方面であらう、随つて荒川左岸地區を中立地帯とすることは不合理であ

る。それで南北兩軍共荒川左岸地區にも兵力を用ふるとすれば、既に今まで屢々研究した如く荒川左岸即ち中山道方面は主作戰地であつて、荒川右岸地區は支作戰地である。其支作戰地區に二乃至三師團の軍を用ふるのであるから、中山道方面は更に大なる兵力を用ふることになる。そこで四、五箇師團の一軍と二、三師團の一軍が相併んで荒川兩岸地區を北進して敵と遭遇戦を惹起したものとすれば、全般關係が成立する。

即ち東北地方及長野方面から兩毛及武藏西北部に集中したる北軍に對し、東京、八王子間の地區に集合したる南軍は其第一軍(五師團を基幹とす)を以て荒川左岸地區より、第二軍(二師團半を基幹とす)を以て荒川右岸地區より北進して、二月十日朝より概ね野田町、越ヶ谷町、浦和市、志木町、扇町屋の線に於て衝突し、十二時頃第二軍方面に於ては混成第五旅團は志木町附近に於て稍、優勢の敵に對し、第一師團方面は有利に進展して川越南方地區に敵を壓迫し、第三師團(歩兵一聯隊欠)は扇町屋附近に於て優勢の敵に對し辛うじて之を支へつゝある状態で、軍豫備の歩兵一聯隊は所澤附近に在る。此時更に約一師團の敵は坂戸方面より東南方に移動中なることを知り、第二軍司令官は川越南方地區に進出した第一師團を富岡附近に後退させて軍の隊勢を整備するに決したとしたなれば、全般關係は成立する。

次に第一師團の隊勢の細部であるが、之は防禦配備とか或は攻撃部署を爲したる當初の如く、師團長の許で詳細に判るものでなくして、極めて其概要を知り得るのが自然であるが、大凡の位置を示すに止め、軍隊區分は當初の區分に依つて其細部まで判明して居るわけであるから、之は想定上明確に示すべきである。

地形及建築物は滿洲のものと同様と假想し、敵軍の素質は概ね某國軍に類似のものと設想して研究するのがよからう。

二 想定作爲

以上逐次研究したる所を基礎として想定を作爲すると次の如くなる。

想定 (第二十四)

一、東北地方及長野地方ヨリ兩毛地方並武藏西北部ニ集中シタル北軍ニ對シ東京、八王子間ノ地區ニ集合シタル南軍ハ其第一軍(五師團ヲ基幹トス)ヲ以テ荒川左岸地區ヨリ、其第二軍(二師團半ヲ基幹トス)ヲ以テ荒川左岸地區ヨリ北進シ二月十日朝概ネ野田町附近ヨリ越ヶ谷町、浦和市、志木町、扇町屋ノ線ニ於テ衝突シ第二軍方面ノ十二時頃ニ於ケル情況左ノ如シ

1 混成第五旅團ハ志木町附近ニ於テ稍、優勢ノ敵ト衝突シ戰鬪交綏ス

2 川越——所澤街道方面第一師團ノ戰況ハ有利ニ進展シ川越南方地區ニ敵ヲ壓迫中ナリ

3 第二師團(歩兵第八聯隊欠)ハ扇町屋附近ニ於テ優勢ノ敵ニ對シ辛ウジテ之ヲ支ヘツツア

4 騎兵第二旅團ハ入間川町東南方地區ニ在リテ第一、第二師團間ノ警戒ニ任ズ

5 歩兵第八聯隊ハ軍豫備トシテ所澤ニ在リ

6 第二軍司令部ハ所澤町ニ在リ

二、第二軍司令官ハ約一師團ノ敵ガ坂戸町附近ヨリ東方及東南方ニ移動中ニシテ十二時ニハ其先頭既ニ入間川ノ線ニ達スル距離ニ在ルコトヲ知り第一師團ヲ富岡附近ニ後退セシメ軍ノ正面ヲ
規正スルニ決ス

三、十二時ニ於ケル第一師團ノ態勢及其編組左ノ如シ

1 右翼隊

長 歩兵第一旅團長 少將某

歩兵第一聯隊

戰車一小隊

騎兵一分隊

所澤——川越街道(含マズ)以東ノ地區ヨリ敵ヲ攻撃シ目下第一線ハ大仙波新田附近ニ達
セル筈

2 左翼隊

長 歩兵第二旅團長 少將某

歩兵第二旅團(第三、第四聯隊)

新ニ増加セル歩兵第二聯隊第一大隊

戰車一中隊

騎兵一小隊

工兵一小隊

所澤——川越街道(含ム)以西ノ地區ヨリ敵ヲ攻撃シ目下其第一線ハ安生老、豊田本附近
ニ達セル筈

3 砲兵隊

野砲兵第一聯隊

4 一部ハ砂新田、中臺、南大塚附近ニ進出シ主力ハ上松原及中新田附近ヲ前方ニ進出中
騎兵第一聯隊(一小隊ト一分隊欠)

師團ノ左翼ニ在リテ的場方向ニ前進中

5 豫備隊

歩兵第二聯隊(第一大隊欠)

工兵第一聯隊(一小隊欠)

富岡村ヨリ中新田方向ニ前進中

但工兵ノ一部ハ砲兵ノ陣地變換ヲ援助シツツアリ

6 師團直轄部隊

野戰高射砲第一乃至第三隊

主力ハ砂久保附近、一部ハ富岡附近ニ在リテ防空ニ任ズ

7 師團通信隊

前方ニ移動中

8 師團司令部

中福ニ在リ

9 後方諸機關

患者收容隊

所澤飛行場北端附近ニ患者集合所ヲ開設

衛生隊

所澤南端附近ニ野戰病院一箇ヲ開設

彈藥補給ノ輜重

所澤北側附近ニ在リテ其一部ハ北方ニ前進中

其他ノ輜重

府中——原町田間

行李

小川

四、地形其他ニ就テ

1 五萬分一圖上ノ實線路ハ野砲ヲ通ズ

- 2 戰場一般ノ森林ハ大部伐採セラレ桑ノ小樹或ハ畑地トナリ運動、通視ニ支障ナシ
 - 3 部落、市街ノ構造ハ滿洲ノモノニ同ジ
 - 4 敵軍ノ編制、裝備ハ某國軍ニ類似ス
 - 5 南軍飛行隊ノ前進飛行場ハ座間ニ在リテ師團ノ要求ニ應ジ協力セラル
- 以上の想定に基き次の問題を課する。

第一問題

師團ノ退却方法

説明

想定に敵情に關して詳しく示さないのは、本情況に於て之より以上到底知り得ないからである。即ち第一線部隊の到達して居る概略の位置が判明すればよい方であつて、當面の敵情に關しては夫れに依つて判斷することが實際的である。往々敵情が判らなかつたり、或は之が時機に適合せぬのを云々するものがあるが之は實戰を知らぬもの言である。

さて師團は其戰況有利に發展して今や其第一線は川越南側に敵を壓迫しつゝあつて、其他の諸

部隊も第一線に追隨進出しつゝある。此時に方り約一師團の敵が近く入間川の線に近迫しつゝあるので、此際師團の一刻の猶豫は益、敵との離脱困難なる状態に陥ることを覺悟せねばならぬ。そこで前進中の各部隊を止め速かに軍の統制線内に退却せねばならぬ。

之が爲如何にして第一線を退却させ如何にして之を收容するかが先決問題である。師團退却の爲最も考慮を要する敵は、當面の敵よりも新に入間川の線に現出しつゝある敵である。正面に於て逐次壓迫した敵は相當の打撃を受けて居り、之が反轉して攻撃に轉ずるには相當の時間を要するが、新來の敵は恐らく師團の左側背に向つて殺到し來るであらう。而して第一線の退却が遅くなればなる程此危険が益、増大する。夫れでこれに對する處置を第一にせねばならぬ。之が爲中新田方向に前進しつゝある豫備隊を之に充つべきであるが、之をして西部鐵道線を越えて前進させると、遭遇戦を惹起するから、青柳から丸山に互る其中間部落を占領させ最も手近に在る砲兵を之に加へる。

次に、第一線の退却行動開始と後方諸機關の關係であるが、此際師團が富岡附近を占領する爲には、幸ひ後方諸機關は夫れ以南に在るから、第一線を直に後退させることが出来る。

次に行進目標を何れにするか、之を決定するには、退却後大體何れの線を占むべきやを願慮

し、夫れに便なる如く行進目標を決定すればよい。師團の退却後占むべき線は、大體志木町と扇町屋との中間にて中富から下富を経て北田附近に互る線であらう。此線に退却させるに、富岡村附近と云へば地圖上に二箇所同名が現はれて居るから、何れであるか誤解を生じ易い、それで下富と云へば大凡間違なからう。而して本情況に於ては退却目標と行進目標と一致する場合である。

退却處置の順序としては、通常先づ後方諸機關に退却を命じ然る後第一線諸隊に退却を命ずるのであるが、此場合最も前方に進出して居るのは、所澤飛行場の北端附近に在る患者收容隊であるから、收容隊の任命、第一線の退却處置をした後でも差支ない。

砲兵は、第一線に進出せるものは其位置に在つて第一線歩兵の退却を收容し、歩兵が其線に達する前に退却させ、中新田附近を前進中の砲兵を收容隊に屬し、上松原附近を前進中の砲兵は直に下富附近に向つて退却させる。

第一線兩翼隊は從來の前進地區を下富に向つて退却させる。

騎兵隊は師團の左側を警戒すると共に收容隊に協力させる。

前方に進出する高射砲隊は直に所澤に向つて退却させる。

通信隊は直に下富に向つて退却させる。

師團長は、第一線の退却を認め收容隊に退却を命じたる後、下富に到り、退却し來る部隊に次の任務を與へる。

本退却戰團の指導は、收容隊を以て新なる敵に對抗せしめ其他を退却させることが特種の研究著眼である。

原 案

師團の退却方法

一 退却目標及行進目標

退却目標 富岡村附近

行進目標 下富

二 收容隊ノ任命

1 收容隊ノ編組

長 歩兵第二聯隊長

歩兵第二聯隊(第一大隊欠)

騎兵一分隊

野砲兵第一聯隊第三大隊(中新田附近前進中ノモノ)

工兵一小隊

2 收容陣地

青柳附近ヨリ加佐志附近ニ互ル地區

三 第一線諸隊ノ退却

1 右翼隊ハ直ニ所澤—川越街道(含マズ)以東ノ地區ヲ下富、中富間ノ地區ニ向ヒ退却

2 左翼隊ハ直ニ所澤—川越街道(含ム)以西ノ地區ヲ下富、北田間ノ地區ニ向ヒ退却

3 砲兵隊中砂新田、中臺、大塚附近ニ進出シアル砲兵ハ現陣地ニ於テ第一線ノ退却ヲ收容シ第一線歩兵隊ガ該線通過以前ニ陣地ヲ撤シ下富ニ向ヒ退却

主力砲兵ハ收容隊ニ屬スルモノヲ除キ其他ハ下富ニ向ヒ退却

4 騎兵隊ハ師團ノ左側ヲ警戒シツツ堀兼ニ向ヒ退却

5 工兵隊ハ一部ヲ以テ砲兵ノ退却ヲ援助シ主力ハ下富ニ向ヒ退却

6 野戰高射砲隊中砂久保附近ニ在ルモノハ直ニ所澤ニ向ツテ退却シ富岡附近ニ在ルモノハ

依然其位置ニ在リテ防空ニ任ズ

四 師團通信隊

直ニ下富ニ向ヒ退却

五 後方諸機關ニ對スル處置

1 患者收容隊ハ所澤西北端ニ向ヒ退却セシム

2 彈藥補給ノ爲前方ニ進出シアル輜重ハ所澤南側ニ退却セシム

3 其他ノ輜重、衛生隊、行李ハ夫々現在地ニ在ラシム

六 師團長

第一線ノ退却ヲ認メ收容隊ニ退却ヲ命ジタル後下富ニ到リ退却シ來ル諸部隊ヲ部署ス

次に第一線部隊の何れかの情況を示して其退却方法を問題として課する。兩翼隊何れでも可なるも、左翼隊の方が退却困難であるから、其方面の退却方法が研究として價值がある。

情況第一

左翼隊長ハ南大塚東南端ニ於テ十二時二十分退却ニ關スル師團命令ヲ受領ス當時左翼隊長ノ知レル情況次ノ如シ

- 1 右歩兵第三聯隊ハ安生老附近ニ達シ野田新田附近ニ在ル敵ヲ攻撃中ナリ
- 2 左歩兵第四聯隊ハ豊田本附近ニ在リテ小室、小ヶ谷附近ニ在ル敵ヲ攻撃中ナリ
- 3 戦車中隊ハ野田新田附近ノ敵ニ向ヒ攻撃前進中ナリ
- 4 歩兵第二聯隊第一大隊及工兵小隊ハ左翼隊豫備トシテ南大塚ニ在リ
- 5 野砲兵一中隊ハ南大塚ニ陣地ヲ占領シ左翼隊ノ攻撃ニ協力シツツアリ
- 6 的場方向ニ前進セシ騎兵隊ハ敵ノ壓迫ヲ受ケ池邊方向ニ後退中ナリ

以上の情況に基き次の問題を課する。

第二問題

左翼隊ノ退却方法

説明

左翼隊は當面の敵を野田、小ヶ谷の線に壓迫しつゝあるが、新なる敵が的場方面に進出して來た、此時に於て、師團から下富附近に向つての退却命令が到着した。此際左翼隊の一刻の遅延は益、其退却を困難ならしめる。そこで第一線兩聯隊には即刻退却を命ぜねばならぬ。而して之が

收容を如何にすべきやである。左翼隊としても當面の敵の反撃よりも的場方面から進出し來る新なる敵の方が我が退却を一層困難ならしめる處がある。そこで豫備たる歩兵第二聯隊第一大隊に左翼第四聯隊の聯隊砲を附して收容隊となし、之をして大袋新田附近を占領して左翼隊の退却を收容させる。普通の退却に在りては收容隊が收容陣地に到着した頃第一線を撤退させるが、此場合に於ては收容隊の陣地占領を待つことなく第一線聯隊を直に退却させる。即ち

原案

左翼隊ノ退却方法

一 第一線兩聯隊ハ直ニ攻撃ヲ中止シ下富ニ向ツテ退却セシム之ガ爲

1. 歩兵第三聯隊及戦車中隊ハ所澤—川越街道(含ム)以西、豊田新田東端、中新田東端ノ線(含マズ)以東ノ地區ヲ下富ニ向ヒ退却セシム
- 2 歩兵第四聯隊ハ豊田新田東端、中新田東端ノ線(含ム)以西ノ地區ヲ堀兼ニ向ヒ退却セシム
- 3 歩兵第四聯隊ノ聯隊砲ヲ歩兵第二聯隊第一大隊ノ指揮ヲ受ケシム
- 4 歩兵第二聯隊第一大隊長ハ部下大隊及歩兵第四聯隊聯隊砲ヲ指揮シ收容隊トナリ大袋新

田附近ヲ占領シテ主トシテ的場方面ノ敵ニ對シ左翼隊ノ後退ヲ收容セシム

5 左翼隊長ハ第一線ノ退却ヲ認メタル後收容隊ニ退却ヲ命ジ次イデ下富ニ到リ歩兵第三聯隊ヲ掌握シ堀兼ニハ旅團副官ヲ派遣シテ歩兵第四聯隊ヲ區處セシム

情況第二

- 一 歩兵第四聯隊ハ第二大隊ヲ右翼トシテ豊田本東側ヨリ小室方向ニ向ヒ、第三大隊ヲ左翼トシテ豊田本西部ヲ小ヶ谷ニ向ヒ攻撃前進中ニシテ第三大隊、聯隊砲及聯隊本部ハ豊田本南側ニ在リ十二時三十分退却ニ關スル左翼隊命令ヲ受領ス
- 二 騎兵第一聯隊主力ハ池邊附近ヲ占領シテ的場方向ヨリ前進スル敵ヲ拒止シツツアリ

以上の情況に依り次の問題を課する。

第三問題

歩兵第四聯隊ノ退却方法

説明

第一線兩大隊には直に攻撃を中止して中新田附近に向つて退却させるが、收容隊を設くるや否

や、設くるとせば其兵力を如何にするやが研究問題である。今や的場方向から新銳の敵が前進中に在つて、之に對し騎兵隊が池邊附近を占領して之に當つて居るが、敵は優勢であるから、騎兵隊は直に驅逐されるであらう。そこで豫備たる歩兵一大隊を騎兵隊に増援して收容に任せさせるか、或は其他の方法を採るかである。歩兵一大隊を増加するときは、騎兵と協力して相當抵抗力を増大するが、其代り該大隊は敵に近迫され、或は退却出来ないことになるかも知れない。愈々退却に決するや、一兵でも多く無事に豫定地點に引上げることが必要である。然るに第一線の二大隊を退却せしめんが爲に一大隊が犠牲となつて退却出来ないことになつたれば、結局敵に致されたことになる。併し又一面から言へば、抵抗力薄弱なる騎兵に一任して何等之に支援を與へないことは、協同動作上から言つても良くない。そこで歩兵一中隊を騎兵の支援として派遣し、池邊附近を占領して第一線の退却を容易ならしめ、爾後騎兵隊と共に退却させる、尙聯隊砲は直に歩兵第二聯隊第一大隊長の指揮下に入らしむ。

原案

歩兵第四聯隊ノ退却方法

- 一 第一線大隊ハ直ニ攻撃ヲ中止シテ先ヅ中新田ニ向ヒ退却セシム

- 二 歩兵第一大隊ノ一中隊ヲ池邊ニ派遣シテ騎兵隊ヲ支援シテ聯隊ノ左側ヲ警戒セシム
- 三 聯隊砲ハ歩兵第二聯隊第一大隊長ノ指揮ヲ受ケシム
- 四 其他ノ部隊ハ大塚新田、青柳ヲ經テ中新田ニ向ヒ退却ス
- 五 聯隊長ハ第一線兩大隊ノ退却ヲ認メタル後中新田ニ到リ後部隊ヲ集結シテ堀兼ニ到ル

次に左の問題を課する。

第四問題

第一線大隊ハ如何ナル退却法ヲ採ルヤ

説明

大隊長としては、第一線中隊を同時に退却させるときは、當面の敵が直に殺到して來るから、第一線に若干部隊を残置し、其掩護に依り其他の部隊を退却させ、逐次之を集結する。

原案

第一線大隊ノ退却法

- 一 第一線大隊ハ第一線中隊ノ各一小隊ヅツヲ残置シ其抵抗ニ依リ他ノ部隊ヲ逐次退却サセ之ガ

敵ト若干離脱シタルトキ第一線残置部隊ニ退却ヲ命ズ

- 二 歩兵砲及機關銃ヲ以テ残置部隊ヲ支援シ之ヲ残置歩兵ヨリ稍先ンジテ退却セシム

情況第三

- 一 野田附近ヨリ豊田本附近ニ互ル第一線大隊ガ退却行動ヲ開始スルヤ間モナク今城附近ヨリ小室附近ヲ經テ小ヶ谷附近ニ互ル敵ハ反轉攻撃前進ヲ開始ス

- 二 十三時池邊附近ヲ占領シアリシ騎兵隊ハ遂ニ抵抗ヲ斷念シ大塚新田ヲ經テ南大塚方向ニ退却ス

- 三 十三時二十分池邊附近ニ進入シタル敵ハ大塚新田附近ノ左翼隊收容隊ニ向ツテ攻撃シ來ル此時第一線部隊ノ大部ハ南大塚、砂久保ノ線以南ニ退却セリ

- 四 十三時三十分左翼隊長ハ收容隊ニ對シ退却ヲ命ズ

- 五 十三時三十分藤倉及下奥富方面ヨリ前進シタル敵ハ青柳附近ヨリ加佐志附近ニ互ル師團收容隊ニ向ツテ攻撃シ來ル

- 六 十三時五十分師團長ハ收容隊ニ對シ退却ヲ命ズ

- 七 斯クテ師團ハ大ナル損害ヲ受クルコトナク豫定ノ地點ニ集結シ得タリ

爾後の指導

以上逐次集結したる後中富附近から下富附近を経て北田附近に互り陣地を占領する方法を研究するのにも一方法である。又退却指導に於て日東村藤倉より下奥富附近に向つて殺到し來つた敵は、其進出案外早くして、師團の大部は尙青柳、中福の線以北に在るものとして、收容隊が如何にして任務を達成するやの研究、更に加佐志南方に溢出し來る情況を與へて收容隊は遂に逆襲に依つて師團主力の退却を容易ならしめることを研究するのも、一方法である。

本想定の研究項目は

一、遭遇戦後困難ナル退却

二、側面ニ現出シタル敵ニ對スル收容方法

其二 退却攻勢の想定作爲

退却攻勢とは、假りにつけた名稱であつて、退却中反轉して攻勢に轉ずるか或は退却後隊勢を整へ攻勢に轉ずるのであつて、奈翁は此戦法を得意とし、マレンゴに於て退却中俄に反轉して大捷を博し、更にアルコール附近に於ても退却し來つた部隊を集結しアデーージュ川の下流から渡河し敵の背後に向つて突進し戰勢を輓回して居る。歐洲大戰に於てマルヌ河畔に於ける佛軍の攻

勢も退却攻勢の一種である。それで今回は其の想定作爲並に指導法を研究しよう。

イ 退却後兵力轉用ニ依ル攻勢

所要地圖

二十萬分一

東、宇都宮

川越、大宮、熊谷、幸手

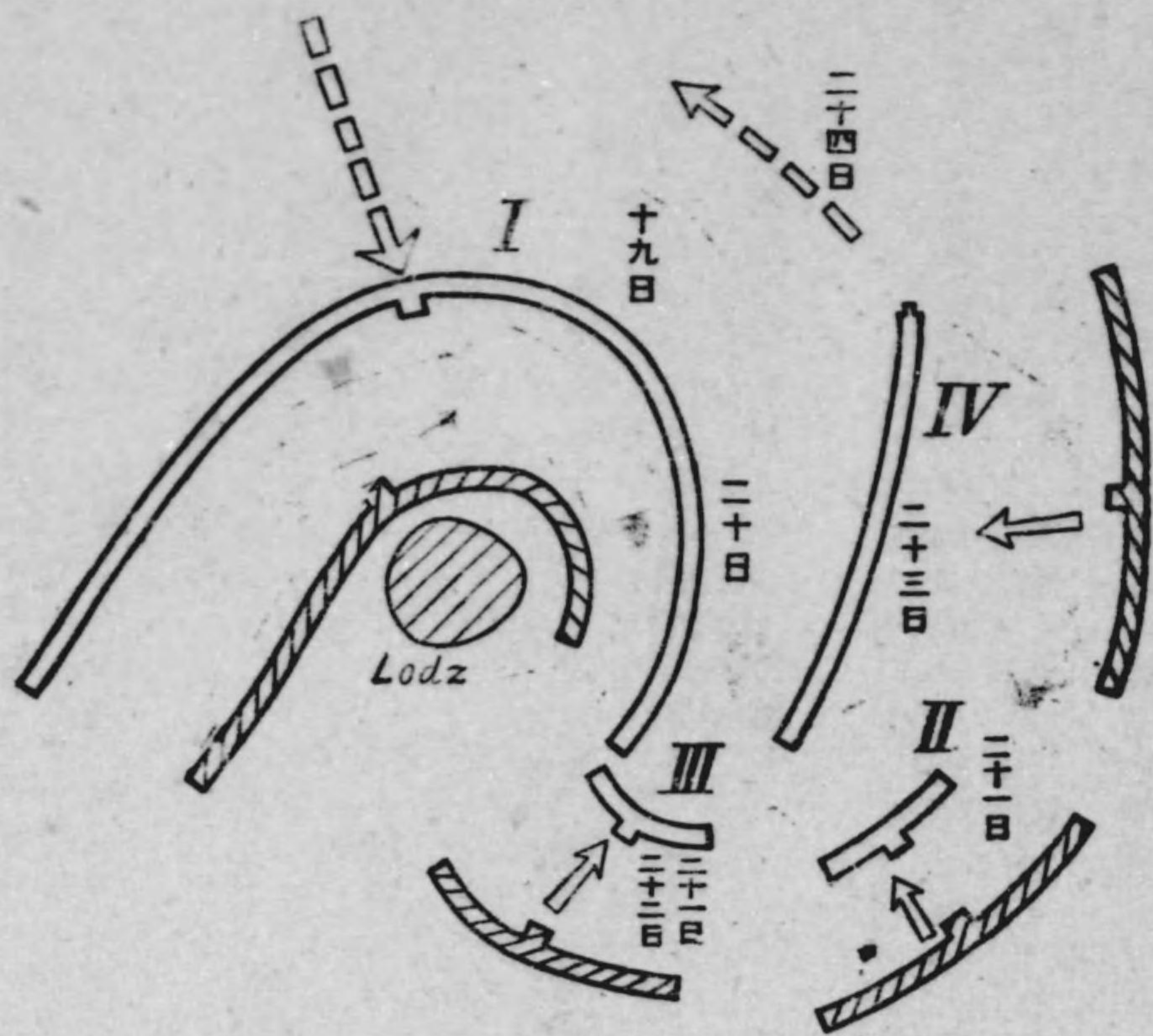
一 準備研究

退却攻勢の想定を作爲するに方り先づ其大體構成を如何にすべきやに關しては、其骨子を戰例に求めるのが最も良い。そこで其戰例として歐洲大戰ロツズ附近の戰鬪に於ける獨軍の採つた退却攻勢の經過の概要を述べて、夫れから本想定作爲の端緒を抽出しようと思ふ。

千九百十四年十月一般圖の如く露獨兩軍はワイクセル河河畔に於て相峙中露軍が攻勢に轉じたので獨軍は國境方面に向ひ退却を開始し、露軍は之に對し追撃に移つた。獨の第九軍はトルン方向に退却したが、追撃し來る露軍の右翼に向つて攻勢に轉ずるに決し、其兵力をトルン西南方地區に集結して露軍の右側に向つて決然攻勢に轉じ、露軍をロツズ附近に於て殆ど包圍した。

之に對し東方及び東南方より前進したる露軍は、獨軍の左翼に向ひ攻撃を開始し、反對に獨軍を包圍するに至つた。此際獨第九軍の左翼にあつた軍團は露軍に包圍されたが飽くまで攻撃を續行し容易に退却の決心をしなかつた。

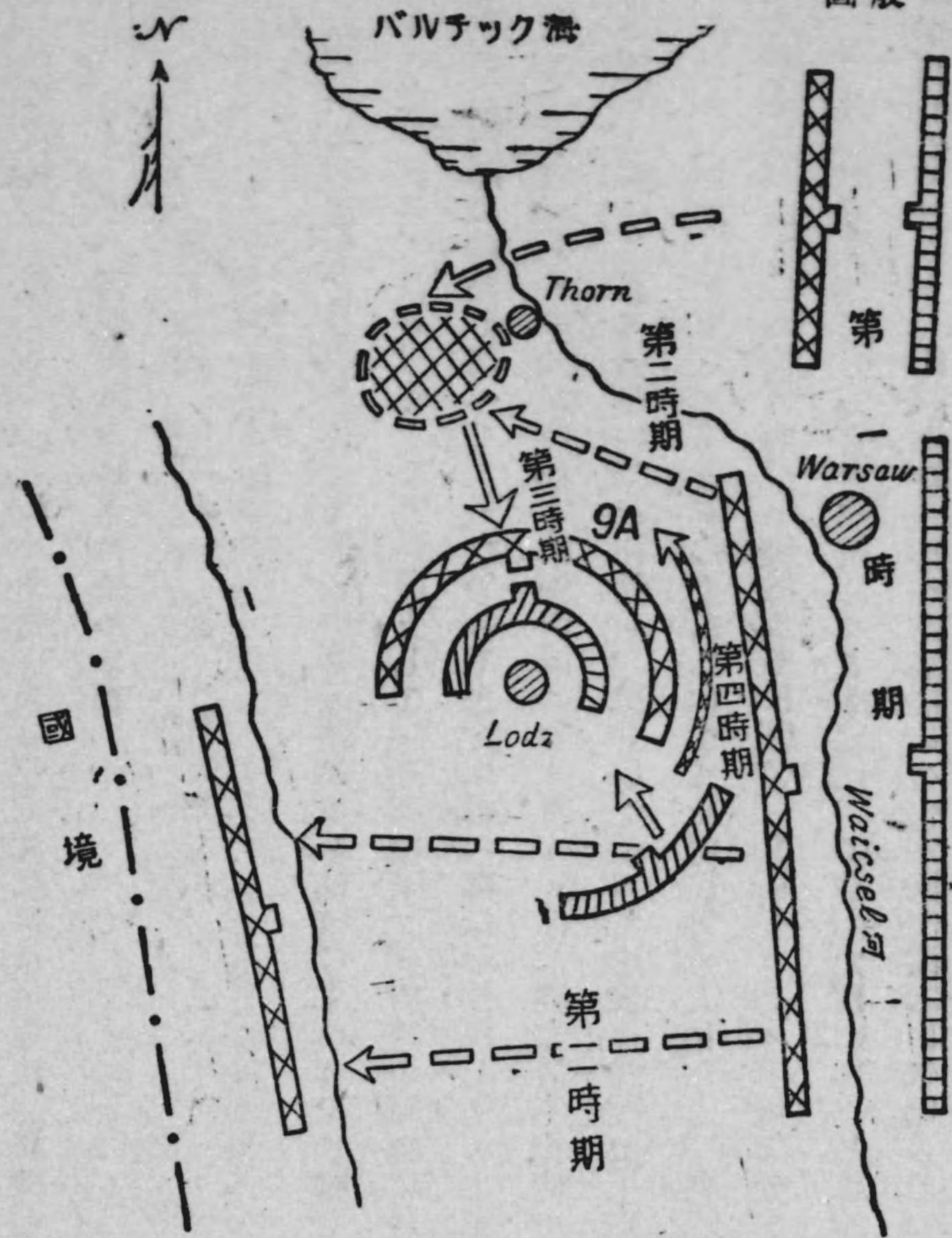
「ズツロ」附近戰圖經過圖



示
 ×
 I
 II
 III
 IV
 時期
 考

獨軍
 露軍
 備考

一般圖



獨軍
 露軍
 備考

第一時期へ對
 戰中
 第二時期へ退
 却追撃中
 第三時期へ獨
 軍ノ攻勢
 第四時期へ獨
 軍ノ退却

獨軍はロツズ附近戰鬪經過圖に示す如く、十九日ロツズの敵に對し包圍を開始し、二十日に至り略、完成するに至つたが、此際三方面から露軍の包圍攻撃を受けたので、經過圖Ⅱに示す如く一部を以て之に當て依然攻撃を續行して居たが、二十一日に至り遂に其左翼は經過圖Ⅲに示す如く之を屈撓して露軍を防支するの止むなきに至つた。然も尙ロツズ附近の露軍に對し攻撃を續行するの決心を變更しなかつた。二十三日に至り獨軍は殆んど四面に敵を受け如何とも爲す能はざるに至り、始めて退却に決し、二十四日に至り東方に血路を開き經過圖に示す如く無事退却することを得た。而して此困難なる退却に於ても、獨軍部隊相互間は無線を以て連絡しつゝ、而も一門の火砲をも敵手に委することなく患者、材料、輜重の如き戰鬪部隊の中間に位置させて退却を完了した。之を日露戰役に於ける我が萬寶山附近の退却と比較したなれば、我が軍の方に大に遜色がある。

(142)

由來我國軍は退却戰鬪の指揮法は極めて拙劣である。之は退却戰を實施した經驗に乏しく、退却戰を直に敗退と混同し易く、又飽くまで攻撃が主であつて退却は萬止むを得ない場合に實施するので決して輕舉に實施してはならぬ國軍の特徴にも依るのであるが、ロツズ附近に於て露軍の包圍を脱して獨軍が殆ど完全に退却し得たのは、獨軍指揮官の指揮の優秀と部隊の訓練精到に歸する。

すべきであつて、我國軍としては好參考資料と思ふ。

此經過を其儘仕組んでも想定となるのであるが、異なる地形に於て凡ての仕組及經過を其儘あてはめようとする、其處に無理を生ずるから、大體ロツズ附近の戰鬪經過を織り込んで、現在研究しつゝある附近の地形にあてはめて、全般の結構及經過を定めるのがよい。

それで今假りに北軍の本軍は利根川と荒川との間野田町、越ヶ谷町、浦和市の線に於て南軍主力と相對峙し、其一部は荒川右岸志木町、大和田町の線附近に於て南軍の一部と相對峙して居たが、北軍主力は栗橋町、鴻ノ巣町の線附近に後退するに方り荒川右岸に在る北軍の一部を松山町附近に後退させ機を見て攻勢に轉じさすとしたなれば、成立しないことはない。然し北軍主力は何故野田町、浦和市の線から栗橋、鴻ノ巣の線に退却するかとの反問に對して、敵の兵力が優勢であつて野田、浦和の線に於て決戰をしたのでは見込がないから栗橋、鴻ノ巣の線に後退したとしたならば、然らば栗橋、鴻ノ巣の線に於て如何にして勝算があるかと云へば、茲に確たる理由はない。若し増援隊の到着するに依つて後方に退いてこれと合して決戰をしようと云ふならば、現在の線に於て其増援隊の到着を待てないことはなからう。それは相當大なる軍に於て一日や二日待てない筈がない。夫れで本軍が野田町、浦和市の線を棄てて栗橋、鴻ノ巣の線に後退するこ

(143)

とは確たる根據なく、結局荒川右岸に於ける一部が松山附近に後退して機を見て攻勢に轉せんとする状況を仕組まんが爲に斯の如く設想したと云ふことになる。此種の想定作爲方法を採るのが多いのであるが、之は一部の戦闘指導法を研究せんが爲に主力の進退を輕率に決めたものであつて、戦理に合した想定と謂ひ得ない。

夫れでは主力軍が情況上退却の餘儀なきに至つたとすればどうかと云へば、それは隨意退却でないから、果して栗橋、鴻ノ巢の線に於て止まり得るや否や疑問であつて、隨つて荒川右岸の一部に最初から松山附近に後退して機を見て攻勢に轉ぜよと云ふ如き任務を與へることは、不適當となる。それで前例の露、獨軍の如き或は獨佛國境戰の如き情況にて退却の餘儀なきに至り、其途中適當なる情況を與へて反擊させるとしたなれば簡単に成立する。其場合に在りては退却中の状態と追擊中の敵情を合理的に示して夫に依り決心させることにすればよいのである。

然し退却の餘儀なきに至つたとしないで、其退却をも合理的ならしむる爲如何に構想すればよいかを研究して見よう。

之が爲主力軍から一部隊を前方に出し其掩護の下に主力は後方に集中し、近く前進を起さんとするとき、敵の方が集中状態迅速で先に攻勢を取る徴が表はれたので、前方に出したる一部隊を

引き上げることになり、夫れと連繫して荒川右岸地區の一部を進出させてあつたのを後退させるとしたなれば、漸次自然的となる。而して主力方面に於ては一部を前方に出したのであるが、荒川右岸地區に於ては該方面に作戰させる部隊の大部を最初から前方に出したからとて、決して不合理ではない。即ち支作戰たる荒川右岸地區には、最初から有力なる部隊を其方面に進めて十分なる地歩を占めて主力に協力させることが有利であるから、其大部を擧げて前進させて居たが、主力軍の方から前方に派遣してある一部隊を引き上げるので、夫れに連繫して荒川右岸に在る部隊を後退させることは合理的である。

そこで主力軍の方から前方に出す部隊を何れの地點まで出すかは、荒川右岸の部隊を何れまで出すかに依つて決まつて来る。而して荒川右岸部隊を何れまで出すかは爾後の戦闘指導上の都合と作戰上の要求と兩者から之を決する。

荒川右岸の部隊が敵と遭遇戦を惹起するか或は將に遭遇戦が起らんとするならば、何れの地點でもよいが、軍主力が尙集中中であつて、其一部が前方に在つて其集中を掩護して居る場合に、之と連繫して居る荒川右岸の部隊が單獨遭遇戦を惹起するには、當面の敵に對し極めて有利の情況に在るか、或は是非共單獨攻撃を要する場合であつて、其戦闘が開始されんとするか或は戦闘

中に俄に退却するを要するのは、何か特別の情況突發しない限りは不合理である。それで該部隊が要地を占領して居たのが敵情上其地に於ける決戦を避けることにしたなれば、自然的となる。之が爲には該部隊は川越附近を占領して居たとすればよからう。

次に川越附近を占領して居た部隊が本軍方面の情況と當面の敵情上松山附近に後退するものとして、松山附近に於て積極的に攻勢を取る爲には、そこに何等かの情況を必要とする。即ち川越附近から松山附近に後退して同地附近に於て攻勢が取れる位ならば、何故川越附近から退却したかと云ふことになる。そこで川越附近占領部隊を一師團から一聯隊を缺いたものとして其殘餘の一聯隊を該師團長の指揮に入れ、それが熊谷か深谷附近に在つて當夜中位に師團長の許に復歸し得る様にしたなれば、川越附近からの退却も、新に指揮下に復歸された部隊が到着と共に攻勢に轉ずることも自然的となる。

次に川越附近からの撤退を何時頃から開始する如くするかは決定は、松山附近に退却後其日中に攻勢を取るならば、拂曉頃から退却を開始するを適當とし、又松山附近への到着を日没頃として其夜中に隊勢を整へ攻勢の準備をする様に仕組むには、川越附近の撤退を晝頃とすればよからう。

以上逐次研究した所に依つて、全般の構成は、東京附近に集合中の敵に對して北軍は栗橋、鴻ノ巢の線に集中中であつて、其一部を以て上尾、杉戸、寶珠花の線を占領して主力の集中を掩護させて居た所、我軍より先に東京附近に集中を終りたる敵は既に前進を起したので、上尾、寶珠花の線と占領させて居た一部を引上げると共に、荒川右岸川越附近を占領して居た師團に對し松山附近に後退し軍主力の戰鬪に策應させる如くしたなれば、成立する。而して川越附近占領師團の後方諸機關は、之に應ずる如く配置し、同師團の退却戰鬪指導法から研究を始め、退却後攻勢に轉ずる方法及其後の情況として師團當面の敵が益々増加してロッズ附近に於ける獨軍の退却の如き困難なる情況下に於ける退却方法を研究する目的で、逐次情況を進めて如何に指導するやを研究しよう。

二 想定作爲

以上逐次研究したる所を想定に現はせば次の如くなる。

想定 (第二十五)

一 長野地方ニ根據ヲ有スル北軍主力(四師團ヲ基幹トス)ハ一部ヲ以テ上尾町、杉戸、寶珠花町ノ線ヲ占領シ主力ハ鴻ノ巢町、栗橋町ノ線ニ集中中ナリ

二 荒川右岸地區ヲ前進シ軍主力ノ作戰ヲ容易ナラシムベキ任務ヲ有スル北軍第一師團(步兵第四聯隊欠)ハ川越南側豊田本附近ヨリ大仙波附近ニ互リ陣地ヲ占領シ荒川右岸地區ヲ北進セシ約一師團半ノ敵ハ其第一線ヲ以テ古市場附近ヨリ藤間附近ヲ經テ青柳附近ニ達セリ

三 第一師團長ハ川越西側今成ニ在リテ三月一日十三時軍司令官ヨリ次ノ命令ヲ受領ス

北軍命令 三月一日十二時
熊谷軍司令部

1 敵ノ第一線ハ本一日朝浦和市、越ヶ谷町、野田町ノ線ヲ發シ北進シ第一師團正面ニ於テモ昨夜有力ナル敵兵團浦和市方面ヨリ荒川右岸志木町方面ニ移動セシコト確實ナリ

2 軍ハ敵ノ前進ニ伴ヒ上尾、寶珠花ノ線ニ在ル一部ヲ撤退シ鴻ノ巢、栗橋町ノ線ニ於テ決戦ヲ企圖ス

3 第一師團ハ即時川越附近ノ陣地ヲ撤シ松山町附近ニ後退シ軍ノ右側ヲ掩護シ機ヲ見テ攻勢ニ轉ズベシ

步兵第二旅團司令部及步兵第四聯隊ヲ師團長ノ隷下ニ復歸ス本一日十七時深谷町ヲ出發シ得ル筈

4 予ハ熊谷市ニ在リ

四 第一師團ノ編組並防禦部署左ノ如シ

1 右地區隊

長 步兵第一旅團長 少將某

步兵第一旅團(第一、第二聯隊)

騎兵一小隊

工兵第一中隊(一小隊欠)

豊田本西南側ヨリ豊田新田ヲ經テ新宿附近ニ互ル間ヲ占領シ大袋ヨリ大袋新田ヲ經テ砂久保附近ニ互ル線ニ警戒部隊ヲ配置ス

2 左地區隊

長 步兵第三聯隊長 大佐某

步兵第三聯隊(第三大隊欠)

騎兵一分隊

工兵一小隊

軍司令官 某 大 將

右地區隊ノ左翼ヨリ大仙波ニ互ル間ヲ占領シ砂新田ヨリ南田島ニ互ル間ニ警戒部隊ヲ配置ス

兩地區隊ノ搜索、警戒ノ境界ハ脇田西端、砂久保東端、三角東南端ヲ連ヌル線（線上ハ右地區隊ニ屬ス）

3 砲兵隊

野砲兵第一聯隊

一部ヲ以テ松郷附近、主力ヲ以テ野田新田、脇田間ノ地區ニ陣地ヲ占領ス

4 騎兵第一聯隊（一小隊ト一分隊欠）

霞關村附近ニ在リテ師團ノ右側ヲ警戒ス

5 豫備隊

歩兵第三聯隊第三大隊

戰車第一中隊

工兵第一聯隊（第一中隊欠）

今成ニ位置ス

6 師團直轄部隊

野戰高射砲第一乃至第三隊

主力ハ安生老、一部ハ小仙波附近ニ在リテ防空ニ任ズ

7 師團通信隊

師團司令部ヨリ各直轄部隊ノ位置（騎兵隊ヲ除ク）ニ通信網ヲ架設セリ

8 師團司令部

今成ニ在リ

8 後方諸機關

患者收容隊

小久保

野戰病院 一箇

落合

彈藥補給ノ輜重

下小坂及南山田

其他ノ輜重

小原——大麻生間

行李

松山町

五、地形及其他ニ就テ

- 1 五萬分一圖實線路ハ野砲ヲ通ズ
- 2 入間川、高麗川、槻川及市ノ川ノ水深ハ圖ニ在ル通り
- 3 平地並平地ニ近キ高地斜面ノ森林ハ大部伐採セラレ桑ノ小樹或ハ畑地トナリ配兵、通視ニ支障ナシ
- 4 部落、市街建築物ノ構造ハ滿洲ノモノニ同ジ
- 5 敵軍ノ編制、裝備及素質ハ某國軍ニ類似ス
- 6 北軍飛行場ハ高崎ニ在リテ師團ノ要求ニ應ジ協力セシメラル

三 指導統裁法

以上の想定に基き次の問題を課する。

第一問題

師團ノ退却部署

説明

師團當面の敵は、一箇師團半位あつて、更に昨夜荒川右岸に移つた敵兵力は不明であるが、之を合すると二箇師團内外ある様である。師團が退却を開始するや一部は川越東側、主力は川越西側地區から追撃し來るであらう。其判断の下に凡ての部署を定むべきである。

目下死傷者を生じて居ないから患者收容隊及衛生隊の撤退が比較的容易である。退却順序としては先づ後方諸機關に退却の命令を與へ、收容隊を決定し、收容陣地を示し、次に第一線部隊に退却時機、退却地區、行進目標を示して退却運動に就かせる。

收容隊には、豫備隊たる歩兵第三聯隊第三大隊を當てるのが當然であるが、兵力も稍、少く、指揮官も大隊長であつて、之に諸兵種殊に砲兵をも指揮させる師團の收容隊としては、好適とは謂へないが、目下左地區隊長たる歩兵第三聯隊長を當てることも出來ず、右地區隊長たる歩兵第一旅團から抽くことも出來ず、之は止むを得ない。但し收容隊に配屬する砲兵大隊長が歩兵大隊長より先任であれば、砲兵大隊長を收容隊長にするのがよからう。收容隊の編組は、歩兵第三聯隊

第三大隊、騎兵一分隊、野田新田附近に在る野砲兵一大隊、工兵一小隊とする、

收容陣地は次の諸案があらう。

第一案 下小坂附近

第二案 伊草附近

第三案 寺山附近

第一案は、收容隊爾後の退却は容易であるが、入間川右岸地區に對して砲兵火力を十分に及ぼすことが出来なう。

第二案は、遠きに失し、收容陣地に就く爲多くの時間を要するのと、主力の退却集合を十分掩護することが出来なう。

第三案は、爾後の退却稍、困難なる不利はあるが、砲兵の良射界を有し主力の退却を收容し其集合、出發を掩護するに適して居るから、此案に同意する。

退却目標は命ぜられた松山町附近であるが、

行進目標を何れにすべきやは研究を要する。其案としては、

第一案 伊草附近

第二案 下小坂、中小坂附近

第三案 塚越附近

第四案 坂戸附近

第五案 高坂附近

第一案の伊草附近は、左地區隊の爲にはよいが、右地區隊の爲には一方に偏して適當でない。

第二案の下小坂、中小坂附近は、右地區隊の一部は必ず通過すべき所であるから、必ずしも不適當ではないが、鯨井附近に退却する部隊は中小坂に行くよりも下廣谷の方に行く方が將來の退却の爲捷路である。夫故主力が一旦下小坂か中小坂に集まらねばならぬとなると、退却の爲迂路を取るようになる。

第三案の塚越附近は、師團主力の退却の爲には必ず通過すべき所であるから、之を示しても悪くはない。唯其地名明瞭を缺く爲に各隊に明確に理解させるに不便がある。

第四案の坂戸町は、明瞭なる地點で誤解を生じない點から云へば良いのであるが、西方に偏して主力の退却の爲迂路を取るようになる。

第五案たる高坂附近は、第一線より遠く收容隊を更に收容する爲には不便であるが、それは他

に方法を講ずるとして、高坂は必ず通過すべき地點であることと、明瞭なる地點である爲、部隊を掌握するには便である。關係位置から云へば、下廣谷か塚越附近がよいのであるが、行進目標は何の爲に示すかと云へば部隊掌握の爲である。而して其地點で掌握して更に退却目標に向つて退却するのであるから、部隊の掌握に便であれば、少々後方遠きに失しても弊害が少ない。但し收容隊を更に收容する必要の起つた時に各隊が遠く後方に退却して居ては不便であるから、之に對する處置は考へて置かねばならぬ。此際行進目標は下廣谷と示したとして、各部隊は下廣谷を圖上で捜すことや或は地方人に聞くにしても一寸判り難いので、一度び間違つて他の方面に行つたなれば、全く掌握出来ない結果に陥る不利があるが高坂と云へば明瞭であるから、其方面に部隊を向けしむればよいのである。但し左地區隊の爲には先づ伊草を目標とするのがよい。即ち行進目標は主力は高坂、一部は伊草。

第一線部隊の退却 左地區隊は川越—伊草—松山道(含ム)以東の地區より伊草村に退却せしめ、右地區隊は川越—寺山道(含ム)以西及越邊川右岸地區を先づ高坂に向ひ退却させる。而して第一線撤退の時期は後方諸機關の撤退及收容隊の陣地に就く時期を見計ひ概ね一時間後の十四時位でよからう。砲兵の一部は左地區隊と共に、主力は右地區隊と共に退却させる。騎兵隊は師團

の右側を警戒させ、工兵隊は一部を以て砲兵の退却を援助し、主力は高坂に向ひ退却させ、野戦高射砲隊は直に陣地を撤し高坂及松山町に到り防空に任せしむ。

後方諸機關の撤退 之は先に處置すべきであるが、小久保に在る患者收容隊は松山に、落合に在る野戦病院は松山北方冑山に、下小坂及南山田に在る輜重は熊谷南方吉岡村に、行李は村岡に退却せしめ、小原、大麻生間に在る輜重は其儘位置せしむる。

師團長は第一線の退却を認め後收容隊の退却に關する處置を爲し、後高坂に到り退却し來る部隊を部署する。

以上逐次説明したる諸件を部署として現はせば次の如くなる。

原 案

師團ノ退却部署

- 一 退却目標 松山町附近
- 二 行進目標 主力ハ高坂村、左地區隊ハ伊草
- 三 後方諸機關ノ撤退
 - 1 患者收容隊ハ直ニ撤シ松山町北端ニ退却

- 2 衛生隊ハ直ニ野戰病院ヲ閉鎖シ松山北方青山ニ向ヒ退却
- 3 下小坂及南山ニ在ル輜重ハ熊谷南方吉岡村ニ向ヒ退却其他ノ輜重ハ現在ノ儘
- 4 行李ハ村岡ニ退却

四 收容隊ノ任命

- 1 收容隊ノ編組
長 歩兵第三聯隊第三大隊長 某少佐
歩兵第三聯隊第三大隊
騎兵一分隊

野砲兵第一聯隊第一大隊(野田新田附近ニ在ルモノ)

工兵一小隊

2 收容陣地

寺山附近

五 師團通信隊

直ニ通信線ヲ撤シ松山町ニ向ヒ退却

六 第一線諸隊ノ退却

- 1 右地區隊ハ十四時退却行動ヲ開始シ川越—寺山道(含ム)以西及越邊川右岸地區ヲ先ヅ高坂ニ向ヒ退却セシム
 - 2 左地區隊ハ十四時退却行動ヲ開始シ川越—伊草—松山道(含ム)以東ノ地區ヲ先ヅ伊草ニ向ヒ退却セシム
 - 3 砲兵隊ハ十三時四十分陣地ヲ撤シ松郷附近ニ在ルモノハ川越—伊草—松山道ヲ先ヅ伊草ニ向ヒ、野田新田附近ニ在ルモノハ川越—下小坂—高坂道ヲ先ヅ高坂ニ退却セシム
 - 4 騎兵隊ハ師團ノ右側ヲ警戒シツツ主力ヲ以テ今宿—菅谷道、一部ヲ以テ越生—小川町道ヲ退却セシム
 - 5 工兵隊ハ一部ヲ以テ砲兵ノ退却ヲ援助シ主力ハ高坂ニ向ヒ退却セシム
 - 6 戰車隊ハ下小坂ヲ經テ高坂ニ向ヒ退却セシム
 - 7 野戰高射砲隊ハ直ニ陣地ヲ撤シ高坂及松山町ニ到リ防空ニ任ゼシム
- 七 師團長ハ第一線ノ退却運動ニ就クヲ認ムルヤ收容隊ノ位置ニ到リ其退却ヲ命ジタル後高坂村ニ到リ退却シ來ル部隊ヲ部署ス但シ伊草ニハ一參謀ヲ派遣シ區處セシム

第二問題

收容陣地占領法

説明

收容隊の歩兵の兵力一大隊で砲兵も一大隊である。それで歩兵は砲兵の掩護隊の様になるが、それでよいので、砲兵火力を以て極力敵の前進を阻止し、歩兵線に近迫せられるに至つたならばそれを撤して第二の收容をさせる様にするのがよい。此場合砲兵は南山田と寺山との中間地區に配置し、歩兵二中隊及機關銃主力を以て寺山の南端を占領し、歩兵一中隊、機關銃一小隊を以て南山田を占領し、歩兵砲は南山田に配置し、歩兵一中隊を豫備として寺山北側に置く。

原案

收容隊ノ陣地占領

- 一 歩兵二中隊、機關銃隊(一小隊欠)ヲ以テ寺山南端ヲ占領
- 二 歩兵一中隊、機關銃一小隊、歩兵砲ヲ以テ南山田ヲ占領

- 三 砲兵大隊、南山田ト寺山トノ中間地區ニ陣地占領

- 四 歩兵一中隊ヲ豫備トシテ寺山北側ニ置ク

但工兵小隊ハ砲兵ノ陣地占領ヲ援助シ共ニ行動セシム

- 五 大隊長ハ寺山北側ニ位置ス

次に右地區隊方面の情況を示し其の退却法を問題として課する。此の情況は次の問題を研究する爲のものであり、此情況に依つて如何様なる研究も出来るのであるから情況は其要旨に合せねばならぬ。

情況第一

- 一 右地區隊ハ歩兵第一聯隊ヲ以テ豊田本西側附近ヨリ豊田新田ヲ經テ安生老南側ニ互ル間ヲ占領シ歩兵第二聯隊(第三大隊欠)ヲ以テ安生老東側附近ヨリ新宿南側附近ニ互ル間ヲ占領シア

兩聯隊ノ境界ハ安生老東側、四都野東側、中福十字路ノ線(線上ハ右聯隊ニ屬ス)トス

- 二 歩兵第二聯隊第三大隊、工兵中隊ヲ豫備トシテ小ヶ谷ニ位置セシム

三 右地區隊長ハ田面澤村役場ニ位置シアリテ十三時四十分退却ニ關スル師團命令ヲ受領ス

第三問題

右地區隊ノ退却方法

説明

右地區隊も亦、地區隊自ら收容隊を設け之に依つて第一線の退却を收容させる。其收容隊には豫備隊たる歩兵第二聯隊第三大隊を充つべきであるが、其陣地を何れにするやが問題である。即ち

第一案 小ヶ谷附近

第二案 上寺山附近

第三案 下小ヶ谷附近

の三案ある。

第一案は、收容隊の配備に就くことは早い、直に敵に肉薄される不利がある。

第二案は、距離稍、遠く、收容隊が其位置を占領するまでに多くの時間を要する不利がある。

第三案は、豫備隊の現在位置より比較的近く、射界も良好にして第一線を收容するに適し、爾後の退却も比較的容易である。夫故此案に同意である。

而して其配備は、第一線に餘り多くの歩兵を配置することなく主として機關銃を以て之に當てる如くする。即ち機關銃隊を二分して下小ヶ谷西端及同東側を占領させ、歩兵砲を同村南側に配置し、歩兵一中隊を同村西南端、一中隊を東側に配置し其他を同村北側に集結する。

右聯隊と左聯隊との退却地區は、安生老東端、下小ヶ谷東端、鱸井東端の線（線上は右聯隊に屬す）、夫より以北は中小坂より塚越を経て高坂に通ずる道路を境界とし以東を第二聯隊、以西を第一聯隊とする。

原案

右地區隊ノ退却方法

一 收容隊及收容陣地

豫備タル歩兵第二聯隊第三大隊ヲ收容隊トシ下小ヶ谷附近ヲ占領シテ第一線ノ退却ヲ收容セシム

二 第一線聯隊ノ退却

兩聯隊共十四時其第一線ヲ撤退シ安生老東端、下小ヶ谷東端、鯨井東端ヲ連ヌル線（線上ハ歩兵第一聯隊ニ屬ス）及其以北ハ中小坂―塚越―高坂道ヲ境界トシ其以東ノ地區ヲ歩兵第二聯隊、其以西ノ地區ヲ歩兵第一聯隊ヲ夫々高坂ニ向ヒ退却セシム

三 右地區隊長ノ行動

第一線兩聯隊ノ退却ヲ認ムルヤ下小ヶ谷ニ到リ收容隊ノ退却ヲ區處シ次イデ兩聯隊ノ境界線ヲ經テ高坂ニ到リ退却シ來ル部隊ヲ部署ス

次に左の情況を與へる。

情況第二

- 一 十三時十分ヨリ同四十分ニ至ル間ニ師團長ハ後方諸機關、收容隊及第一線諸隊ニ夫々退却ニ關スル命令ヲ下達ス
- 二 收容隊ハ十三時五十分寺山附近ニ到着シ收容陣地占領ニ著手ス
- 三 後方諸機關ハ退却命令到達スルヤ逐次撤退ヲ開始ス
- 四 第一線諸隊モ夫々師團ノ退却命令ニ從ヒ退却運動ニ就ク

- 五 十四時第一線部隊撤退ヲ始ムルヤ敵ノ全線ニ互リ活氣ヲ呈シ其第一線ハ逐次前進ヲ開始シ敵砲兵ハ我が第一線處々ニ向ツテ砲撃ヲ爲ス
- 六 十四時三十分師團長ハ第一線ノ退却ヲ認メ今成ヲ去リ十四時四十五分寺山收容隊ノ位置ニ到ル

次に情況に應ずる次の問題を課する。

第四問題

收容隊ノ撤退方法

説明

將來收容隊を下小坂方向に退却させるか或は北方伊草方向に退却させるかは、研究問題である。下小坂方面に退却する爲には、南山田附近にある部隊の如きは著しく側面運動をせねばならぬ。此間敵が入間川に近く突進して來たなれば、益々退却困難となる。之に反し北方に向つてする退却は、落合橋附近に於て越邊川を通過せねばならぬ不利はあるが、收容隊陣地正面から退却するには自然の方向であつて、落合橋附近の通過は一部を以て福田附近を占領して其掩護に依り

退却すること必ずしも困難でない。夫故北方に退却させるのがよい。

原案

收容隊ノ撤退方法

判決

收容隊ハ北方伊草村方向ニ退却セシムルヲ要ス

次に左の情況を與へる。

情況第三

- 一 十五時十分松郷附近ヨリ退却セシ野砲兵第二大隊ハ其先頭ヲ以テ伊草村ニ到着ス
- 二 十五時二十分元左地區隊ノ先頭伊草村ニ到着ス

次に左の問題を課する。

第五問題

伊草村ニ派遣セラレアル師團參謀ノ區處

説明

舊左地區隊及砲兵隊に對し爾後の行動に關し如何なる任務を與ふべきや、收容隊を北方伊草村方向に退却させることも師團參謀として既に承知して居る筈である。夫れで歩兵第三聯隊長をして其一部及砲兵大隊を以て收容隊を收容すべきことを命じ、後松山町東側に向つて退却させる。先に右地區隊を一舉に高坂に向つて退却させたのは、師團長として收容隊を將來北方に退却させ其收容は歩兵第三聯隊にやらせる豫定であつたからである。

原案

歩兵第三聯隊長ニ與フル任務

歩兵第三聯隊長ハ部下ノ一部及野砲兵第二大隊ヲ指揮シ收容隊ヲ收容シ爾後松山町東側ニ向ツテ退却スベシ

第六問題

歩兵第三聯隊長ノ處置

説明

歩兵第三聯隊長は、主として砲兵を以て收容隊の退却を收容し、歩兵は大隊長の指揮する二中隊を一時伊草村南端に止め、其他は松山町東側に向つて退却させる。

原案

歩兵第三聯隊長ノ處置

- 一 歩兵第三聯隊第二大隊(二中隊欠)ヲシテ伊草村南端ヲ占領セシム
- 二 野砲兵第二大隊ヲシテ下伊草東側ニ陣地ヲ占領シテ收容隊ノ退却ヲ收容セシム
- 三 爾餘ノ諸隊ハ松山町東側ニ向ツテ退却セシム
- 四 聯隊長ハ收容隊ノ收容終レバ歩兵第三聯隊第二大隊(二中隊欠)及野砲兵一中隊ヲ後衛トシテ松山町東側ニ向ヒ退却セシム
- 五 聯隊長ハ收容隊ノ收容終レバ聯隊主力ニ追及ス

次に左の情況を與へる。

情況第四

- 一 十四時右地區隊ノ收容隊ガ下小ヶ谷ヲ占領スルヤ第一線兩聯隊ハ退却ヲ開始ス

- 二 右地區隊長タル歩兵第一旅團長ハ第一線ノ退却ヲ認め十四時二十分小室ヲ發シ下小ヶ谷ヲ經テ十四時四十分上戸北端ニ到ル
- 三 十四時五十分歩兵第一聯隊ノ先頭タル歩兵第一大隊ハ上戸ニ達ス
- 四 小室、小ヶ谷方面ニ當リ盛シニ機關銃聲ヲ聞ク

次に左の問題を課する。

第七問題

歩兵第一旅團長ノ處置

説明

右地區隊の收容隊を下戸に於て收容させるか或は小堤に於て收容させるかが問題である。下戸は餘り下小ヶ谷に接近して居て、直に敵に肉薄される不利がある。それで一部を小堤に止めて收容隊を收容させる。而して第一線部隊の大部下小ヶ谷の收容隊の線内に退却したる時收容隊に退却を命じ、小堤の收容隊を後衛とし其他は高坂に向つて退却させる。

原案

歩兵第一旅團長ノ處置

- 一 歩兵第一聯隊第一大隊及同聯隊ノ聯隊砲ヲ小堤ニ止メ同地ヲ占領シテ下小ヶ谷ノ收容隊ヲ收容セシム
- 二 第一線ノ諸隊ガ下小ヶ谷ノ收容隊ノ線内ニ退却シタルトキ收容隊ニ退却ヲ命ズ
- 三 小堤ノ收容隊ハ爾後後衛トナリ高坂ニ向ヒ退却セシム
- 四 其他ノ諸隊ハ高坂ニ向ヒ退却セシム
- 五 旅團長ハ下小ヶ谷ノ收容隊ノ退却ヲ認メタル後部隊ニ追及ス

次に左の情況を與へる。

情況第五

- 一 師團長ハ收容隊長ニ歩兵第三聯隊ハ其一部ヲ以テ伊草村附近ヲ占領シテ收容隊ヲ收容スルコトヲ通報シ右地區隊ノ大部入間川左岸地區ニ移リ左地區隊ノ後尾石田、南山田、寺山ノ線ヲ通過セバ收容隊ハ陣地ヲ撤シ伊草村ニ向ヒ退却シ歩兵第三聯隊長ノ指揮下ニ復歸スベキコトヲ命

ジ十五時三十分寺山ヲ出發シ十七時高坂村ニ到着ス

- 二 野砲兵第一聯隊(第一、第二大隊欠)ハ既ニ高坂村ニ到着シアリ
- 三 十七時十分歩兵第二聯隊(第三大隊欠)ハ其先頭ヲ以テ高坂村ニ到着ス

次に左の問題を課する。

第八問題

師團長ノ處置

説明

師團が將來松山町附近に於て陣地を占領するか、或は機を見て攻勢に轉ずるにしても、先づ一部を以て高坂附近を占領し師團の集結並陣地占領を掩護せしめる必要がある。又逐次退却し來る部隊を收容する爲にも高坂附近を占領する必要がある。之が爲先づ退却し來りたる歩兵第二聯隊(第三大隊欠)に野砲兵一大隊を屬して同地附近を占領させる。

原案

師團長ノ處置

- 一 歩兵第二聯隊長ニ左記部隊ヲ指揮セシメ高坂附近ヲ占領シテ退却シ來ル部隊ヲ收容シ松山町附近ニ於ケル師團ノ集結ヲ掩護セシム
- 歩兵第二聯隊(第三大隊欠)
- 野砲兵第一聯隊第三大隊
- 工兵一小隊
- 二 其他ノ部隊ハ到着スルニ從ヒ逐次松山ニ向ツテ退却セシム

次に左の情況を與へる。

情況第六

- 一 十八時師團ノ大部ハ高麗川以北ニ退却シ高坂占領部隊ハ該地附近ヲ占領シ歩兵第三聯隊ハ一部ヲ以テ根岸南端ヲ占領シアリ
- 二 十九時迄ニ師團長ノ知り得タル諸情況次ノ如シ
- 1 師團當面ノ敵ハ川越—伊草道、川越—高坂道、川越—坂戸道ヲ我ニ向ヒ追撃シ來リ其主力

ハ坂戸、塚越間ノ地區ニ在ルモノノ如シ

- 2 歩兵第二旅團司令部及同第四聯隊ハ十七時深谷ヲ出發シ深谷—小原—松山道ヲ松山ニ向ヒ急進中ナリ

- 3 軍主力方面ニ於テハ敵ノ前進ニ伴ヒ上尾町、杉戸町、寶珠花ノ線ヲ占領シアリシ一部隊ハ鴻ノ巢、栗橋町ノ線ニ向ヒ撤退中ナリ

次に左の問題を課する。

第九問題

十九時ニ於ケル師團長ノ情況判斷

説明

本情況に於て師團は軍の右側を掩護し機を見て攻勢に轉ずべき任務を如何にして達成するか問題である。之が爲めには

第一案 高坂附近に於て攻勢防禦を爲すか

第二案 松山附近に於て攻勢防禦を爲すか

第三案 松山附近に於て攻撃を準備し敵の高坂以北に進出するを待つて攻勢に轉ずるか
或は其他の方法があるかが研究問題である。

第一案の高坂附近を守勢地帯とし根岸方面を攻勢地帯として決戦防禦を爲すことは、必ずしも不可能ではない。然し之に依つて二倍以上の敵に對し確たる勝算の基礎何れにありやと言へば、的確なる根據がない。

第二案の松山東方地區を守勢地帯とし、松山方面を攻勢地帯として決戦防禦を爲すことは、是れ亦不可能ではない。之に依る勝算は市川の障礙を利用し得て守勢地區が比較的堅固であると云ふことであつて、他に方法がなければ有力なる一案である。

第三案の敵の高坂以北に進出するのに乗じ攻勢を採る案は、敵の不統一なる進出に乗ずることが出来たなれば勝算なきにしもあらずであるが、敵が本夜中に高坂附近を占據し十分なる準備の後明拂曉後攻撃して來たなれば我が準備せる地域に於て遭遇戦を惹起することに依りて多少の利はあるが、是れ亦勝算確實と謂ひ得ない。師團が晝間高坂以北に兵力を集結し得たる際、敵が各方面から連繫なく近迫して來たことを看破し、直ちに攻勢を執つて日のある間に成果を收め得る見込があるならば、慥に有力なる案であるが、既に日没となりて此機動を許さないから、敵は本

夜中に十分なる準備を爲して明朝恐らく松山附近の我が陣地に向つて攻撃し來るであらう。然るときは敵は既に兵力を十分展開しありて、之に對し正面から不期遭遇戦を求めるだけであるから勝算確實と謂ひ得ない。

茲に於て出題者は次の案を提供する。即ち、

第四案 師團は一部を當面の敵に當て主力を以て本夜中に今宿及越生町方面に轉進し明拂曉敵の左側背に向つて攻撃するのである。

此案は、奈翁のアルコール附近の戦團、獨軍のトルン方面よりロツズ附近に向つて攻撃したのと同一趣旨であつて、唯此場合之を實行し得るや否やが問題である。敵も其方面に相當の注意を拂つて居ることは豫期せねばならぬが、夜暗を利用する此轉進は決して不可能ではない。之が爲には菅谷附近から今宿及越生町兩方面に進出路があつて、我が騎兵隊は目下其方面に後退して居て之に對し敵騎兵の追躡して居ることは當然であるが、目下坂戸以東の地區に我に近く追躡して來て居る敵歩兵を此方面に向けることは、特別の事情なき限り實現性が少いと見てよからう。之が全く敵の不意に乗ずる手段であつて、一度今宿、越生附近に進出し得たなれば、敵の不意に乗じ其側背に向つてする攻撃は彼我兵力の差を補ふに十分である。但し此間松山附近を我が一部

が保持し得るや否やが問題であつて、残置部隊を多くすれば攻撃に用ふる兵力が減少し残置部隊の兵力を少くすれば保持困難となり、松山附近を敵に奪取されたなれば軍主力の右翼が直に脅威を受けることになる。其兵力を何程とし如何なる手段に依つて之を保持させるやが、本案成立上重大なる關係を有するもので、其研究は次の問題に譲る。それで本情況判斷としては、

原 案

師團長ノ情況判斷

判 決

師團ハ一部ヲ以テ松山附近ヲ占領セシメ主力ヲ以テ本夜中ニ今宿及越生町方面ニ轉進シ明朝敵ノ左側背ニ向ツテ攻撃スルヲ要ス

(176)

第十問題

前判決ニ基ク師團長ノ處置

説 明

先づ松山町方面に残置する部隊を何れにするや、又其兵力を何程にするやを決定すると共に、

何れの地點を占領させるかを決めねばならぬ。目下松山町東側附近に退却しつゝある歩兵第三聯隊を充てる時は、松山町附近を占領させるには好都合であるが、爲し得たなれば之を將來攻勢方面に使用即ち目下深谷より松山に向つて前進中の歩兵第二旅團長の指揮に復歸させれば、新鋭なる其第四聯隊と合して有効に使用し得るが、之が爲現在高坂附近を占領しつゝある歩兵第二聯隊を残置するとしたなれば、高坂附近退却後松山附近を占領し得るや否や疑問である。そこで歩兵第二聯隊をして一部を以て高坂附近を占領させ主力は今より直に松山町附近に後退して陣地を占領させるとしたなれば、高坂は直に奪取せられ、同地以北に敵が進入して来たなれば師團主力の轉進企圖を過早に看破されるかも知れない。即ち敵をして高坂及其東方根岸附近に互る線以北に成るべく進入させない様にするには、相當大なる兵力を其線に置かねばならぬ。さうすると其部隊が退却して松山町附近を占領することが困難となり、其兩目的の爲に別々に部隊を残置するときは轉進する兵力を漸次減少する不利がある。そこで松山附近も早くから占領させ高坂及其以東の地區も成るべく長く保持し、然も主力方面の兵力を成るべく多くする爲には歩兵第三聯隊(一大隊欠)をして其一部を以て根岸附近を占領して其以北に敵の進入するのを成るべく長く拒止させ、主力は松山東方高地を今から占領させ、高坂附近占領部隊を歩兵第二聯隊の一大隊として

(177)

歩兵第二聯隊主力は轉進の準備をさせ、高坂附近占領の一大隊は現在の線に於て極力敵の前進を拒止し成るべく明拂曉前まで保持させ、拂曉前撤退に際しては槻川河谷を西方に退却させ、師團主力に追及させる様にする。此行動は餘り巧妙に過ぎる様であるが、高坂附近を撤退するに方りて槻川河谷を西方に退却することは決して困難でない。寧ろ松山町方向に退却するよりも容易である。斯くして松山東方高地占領に成るべく早く著手することと高坂、根岸の線以北に敵の進入することを極力防止することと、師團主力方面の兵力を成るべく多くすることとの要求を満足せしめ得るのである。

松山町方面殘置部隊は、歩兵第三聯隊(一大隊欠)、野砲兵一大隊とし、其兵力過小の様であるが、之は松山東方根古屋高地を籠城的に占領させたなれば、市川の障礙を利用することに依つて翌日一日間保持する位は左程困難でない。此方面が保持出来ない位大なる兵力を敵が此方面に使用したなれば、師團主力の敵の側背に向つてする攻撃は益、容易になるわけである。

次に轉進する師團主力は今宿方面に進出するか越生町方面に轉進するか、此兩方面に進出するとしたなれば何れの方面に主力を以て進出するかが、研究問題である。

今宿方面への進出は、捷路であるが、此方面のみから進出せんとするとき何等かの徴候に依り

敵に察知され、敵の妨害を受くるとしたなれば、一方面よりの進出は不利である。

越生町方面への進出は、迂路であるが、敵に遠く隘路を進出し得る利益がある。それで、今宿方面と此方面と兩方面から進出するのがよい。

然らば何れの方面に主力を以て進出するかと云へば、敵に遠いことと、敵の外側に成るべく多くの兵力を以て包圍する爲越生町方面に主力を以て進出するのが有利である。

そこで越生町方面に歩兵第一旅團を進出させるか歩兵第二旅團を進出させるかと云へば、五大隊の兵力を有する歩兵第一旅團を越生町方面に進出させるのがよい。

次に轉進の爲松山町附近出發を何時とするがよいかと云へば、拂曉稍、前隘路口に到着する如く出發時刻を規正するのがよい。之が爲には越生町方面に進出する部隊は二十三時頃松山町附近を出發する様にすればよからう。又深谷町から前進中の歩兵第二旅團(第三聯隊欠)は、松山町西北側附近に向つて前進させる。

師團主力の轉進と共に戦闘の場合に要する衛生隊患者收容隊及輜重を師團の後方に向つて前進させる。

轉進ノ爲師團長ノ處置

一 松山附近占領部隊

1 編組

長 歩兵第三聯隊長

歩兵第三聯隊(第一大隊欠)

歩兵第二聯隊第一大隊

騎兵一分隊

野砲兵第一聯隊第二大隊

工兵一小隊

患者收容隊一中隊

2 任務

主力ヲ以テ松山東方高地ヲ占領シ一部(歩兵第二聯隊第一大隊)ヲ以テ高坂附近及根岸附近ヲ占領シ高坂、根岸ノ線以北ニ敵ノ進入スルヲ防支セシム

歩兵第二聯隊第一大隊ハ明二日拂曉前高坂附近ノ陣地ヲ撤シ師團主力ニ追及セシム

二 轉進部隊ノ區處

1 右縱隊

長 歩兵第一旅團長

歩兵第一旅團(歩兵第二聯隊第一大隊欠)

騎兵一分隊

野砲兵第一聯隊(第一大隊(第一中隊欠)、第二大隊欠)

工兵一中隊(二小隊欠)

一日二十三時其先頭ヲ以テ唐子村下唐子西端出發上唐子、玉川、田中ヲ經テ越生町ニ向ヒ前進セシム

2 左縱隊

長 歩兵第二旅團長

歩兵第三聯隊第一大隊

歩兵第四聯隊

騎兵一分隊

野砲兵第一聯隊第一大隊(第一中隊欠)
工兵一小隊

一日二十三時松山町西南端出發金谷、下神戸、大橋ヲ經テ今宿ニ向ヒ前進セシム

3 師團直轄部隊

師團司令部

師團通信隊

工兵第一聯隊(一中隊欠)

以上右縱隊ニ續行

野戰高射砲隊

依然松山町附近ニ在リテ明二日早朝今宿及越生町方面ニ前進セシム

戰車隊

明二日拂曉後越生町ニ向ヒ轉進セシム

4 騎兵隊

主力ヲ以テ今宿方面、一部ヲ以テ越生町方面ヲ警戒セシム

5 野砲兵第一聯隊聯隊段列 戰車隊ニ續行

三 後方諸機關

患者收容隊ハ越生町ニ

野戰病院一箇ハ玉川ニ

歩砲彈藥積載輜重ハ大橋及成瀬ニ

向ヒ夫々前進セシム

次に左の情況を與へ問題を課する。

情況第七

一 十九時三十分歩兵第二聯隊ハ其第一大隊ヲ以テ高坂村毛塚南端ヨリ正代南端ニ互ル間ヲ占領シ主力ハ高坂北端附近ニ集結ス

二 歩兵第一聯隊ハ上野本附近ニ集結中ナリ

三 歩兵第一旅團長ハ十九時四十分松山町南端ニ於テ轉進ニ關スル師團命令ヲ受領ス

第十一問題

轉進ニ關スル歩兵第一旅團長ノ處置

說明

右縱隊たるべき歩兵第一旅團は、出發前所命の地點たる下唐子附近に移動し同地に於て諸準備を爲し出發するか、或は出發前まで現在地附近に在るかが第一の研究問題である。今から直に移動を行ふと、我企圖を過早に敵に察知される不利がある。夫故高坂附近に於ける歩兵第二聯隊主力も出發前まで其儘の態勢に置き、出發前に靜肅に移動させるのがよ。夜行軍の爲の警戒は歩兵一大隊を前衛として砲兵を最後尾に置いて前進する。

原案

轉進ノ爲歩兵第一旅團長ノ處置

- 一 出發直前マデハ凡テノ部隊ハ現在ノ儘位置セシメ愈、出發前靜肅ニ移動ヲ行フ
- 二 轉進部署

右縱隊前衛

司令官 歩兵第一聯隊長

歩兵第一聯隊第一大隊

傳騎三騎

工兵半小隊

右縱隊本隊(同行軍序列)

旅團司令部

騎兵一分隊(三騎欠)

歩兵第一聯隊(第一大隊欠)

歩兵第二聯隊(第一大隊ト一小隊欠)

工兵第一中隊(二小隊半欠)

野砲兵第一聯隊(第一大隊(第一中隊欠)、第二大隊欠)

歩兵第二聯隊ノ一小隊

三 出發

1 二十三時前衛ノ先頭ヲ以テ下唐子西端ヲ出發シ得ル如ク歩兵第一聯隊ハ二十二時上野本出發、歩兵第二聯隊ハ二十二時十分高坂北端出發葛袋北方丁字路ニ於テ序列ニ入ル

2 野砲兵聯隊ハ二十二時三十分松山町西南端出發葛袋北方丁字路ニ於テ歩兵第二聯隊ノ後尾

ニ入ル

3 進路

下唐子、上唐子、玉川、田中ヲ經テ越生町ニ向ヒ前進ス

次に左の情況を與へる。

情況第八

- 一 歩兵第三聯隊ハ其第二大隊(二中隊欠)ヲ以テ長樂南端ヨリ根岸南端ニ互ル間ヲ占領シ其他ノ主力ハ十九時三十分松山町東側ニ集結ス
 - 二 十九時五十分歩兵第三聯隊長ハ松山町東方高地附近占領及其第一大隊ヲ歩兵第二旅團長ノ指揮ニ屬スベキ命令ヲ受領ス
 - 三 歩兵第二旅團長ハ二十時十分菅田(松山西北方六紵)ニ於テ轉進ニ關スル師團命令ヲ受領ス
- 第十二問題
轉進ニ關スル歩兵第二旅團長ノ處置

(186)

說明

歩兵第四聯隊の松山町到着は二十一時三十分頃とならう。此處に於て大休止を爲し、歩兵第三聯隊第一大隊を前衛とし其他は右縱隊と概ね同様の部署を以て前進する。

原案

轉進ノ爲歩兵第二旅團長ノ處置

- 一 歩兵第四聯隊松山町ニ到着セバ大休止ヲ爲シ歩兵第三聯隊第一大隊ヲ前衛トシ右縱隊ノ出發後前進ヲ起ス

二 轉進部署

左縱隊前衛

司令官 歩兵第三聯隊第一大隊長

歩兵第三聯隊第一大隊

傳騎三騎

工兵半小隊

左縱隊本隊(同行軍序列)

(187)